



Oita Institute of Technology

大分県立工科短期大学校

創立20周年記念誌



20

創立20周年記念誌

大分県立工科短期大学校



Oita Institute of Technology





Contents

あいさつ・祝辞

校長	宮崎 淳一	4
大分県知事	広瀬 勝貞	5
大分県議会議長	井上 伸史	6
中津市長	奥塚 正典	6
中津商工会議所会頭	仲 浩	7
大分県工業連合会会長	古手川保正	7
同窓会会長	後藤 聖和	8
後援会会長	山本 玲子	8

歴史 20年を振り返って

開校までの足跡	10
開校から現在までの歩み	14
各系の歩み	
機械システム系	18
電気・電子システム系	23
建築システム系	27

キャリア教育 就職支援

キャリア教育の主な取組	31
就職対策実践・業界研究セミナー	33

企業連携

大分県QCサークル活動支援企業会	34
技能向上セミナー	36
金型保全技術者育成講座	38
現場対応力強化事業	40
北部九州地域高度金型中核人材育成事業	42

地域連携

昂華祭	44
ピーチクリーン・アースデイなかつ・ なかつヤングフェスティバル	45
寺町とろう祭り	46
Loveファンタジア中津・職人フェスティバル	47

座談会

20年を振り返って	48
-----------	----

Topix

OITシンボルマークのデザインについて	54
モニュメント“夢みるAge”について	55
校歌作詞者について	56
校歌作曲者について	57

特別表彰者

故 安田俊彦氏	58
山下順一氏	60

資料編

年度別入学試験応募・合格・入学者の状況	62
卒業生就職状況	64
講座別技能向上セミナー申込者数一覧表	65
活動報告事例集	66
歴代後援会役員名簿	67
歴代職員名簿	68
同窓会役員名簿	69

編集後記	70
------	----



校長
宮崎 淳一

創立20周年にあたって

大分県立工科短期大学校は、1998（平成10）年4月に開校し、今年創立20周年を迎えました。

本校の設置が検討され始めた1990年代前半は、バブル崩壊による景気後退が進んだ時期でしたが、大分県では大手メーカーを始めとする製造拠点の立地や増設が進むとともに、自動車関連産業の伸長も見込まれて、技術者の育成確保が急務となっていました。こうした時代背景の中で、本校は高度な専門知識と技術・技能を併せ持った実践技術者の育成を目的として、産業界の期待を集めながら、中津の地に開校しました。

しかし、当時は全てが初めての経験であり、初代の時田雄次校長以下、職員と学生諸君が試行錯誤しながら、二人三脚で前人未踏の地を切り拓いていただいたわけです。このような草創期の苦労を経て、本校は着実に教育内容や実習機器等を充実させながら、本年3月までに累計1,405名の卒業生を産業界に輩出するとともに、企業在職者の人材育成にも貢献してまいりました。今日、本校が各方面から高い評価をいただくに至ったのは、歴代の職員の熱心な教育指導と学生諸君の勤勉努力、さらには卒業生の皆様のご活躍の賜であり、関係の皆様にご心から敬意を表する次第です。

近年の少子化の進行の中で、産業界において若手技術者の育成確保が深刻な課題となっており、本校の人材育成への期待はますます高まっています。この期待に応えるためにも、本校は常にアンテナを高くして、日々進歩する技術の動向や産業界の人材ニーズを的確に捉えるとともに、企業や関係機関との連携も一層深めながら、学生に魅力のある、また、産業界や地域の皆様に評価される学校となるよう、今後とも努力してまいります。

この度、創立20周年を機に、これまでの本校の歩みを記念誌にまとめることができたことは大きな喜びであり、本誌の編纂にご協力をいただいた皆様に御礼申し上げます。この20年を顧みますと、本校が現在あるのも、ひとえに地域の企業、行政、関係団体、さらには地元住民の皆様のご支援、ご協力あつてのことであると深く感じさせられた次第です。

これまでの本校に対する皆様のご恩顧に心から感謝申し上げますとともに、本校の更なる発展に向けて、引き続きご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

創立20周年を迎えて

大分県立工科短期大学の創立20周年に当たり一言ご挨拶申し上げます。

大分県立工科短期大学は、高度な専門的知識と技術・技能を併せ持つ実践技術者の育成を目的に1998(平成10)年4月に開校しました。4年制の国立大学工学部と同等の授業時間数を確保しながら、産業用双腕ロボット等最新鋭機器を導入するなど、全国の同種学校の中でもトップクラスの実験・実習設備を備えた短期大学校であり、これまでに輩出した約1,400名の卒業生は、県内外のものづくり企業の中核となる人材としてご活躍いただいています。

少子高齢化が進展する中、雇用情勢の改善とともに人材不足が顕著となっています。また、ものづくり産業を取り巻く環境も大きく変化しています。これまでのコスト競争に加え、インダストリー4.0によるIoTやAIなど先端技術を盛り込んだ生産工程の短期化、高付加価値を付けた製品づくりなど、その高度化が進んでおり、新たなビジネスモデルの構築が必要になっています。

このような時代の動きを捉え、本県では、新たなビジネスの創出を目指す大分県版第4次産業革命「OITA4.0」を推進しています。大分発の「IoT推進ラボ」を設置し、県民の利便性や県内企業の生産性向上に向けて取り組むとともに、ドローンの研究開発や実証試験等を支援し、西日本最大のドローン拠点を目指した取組も展開しています。

その一環として、工科短期大学校では、QCサークル活動や技能向上セミナーなど企業との連携も進め、ものづくり産業の基盤技術を継承・発展させることができる人材の育成拠点として、本県ものづくり産業の発展を支援していきます。また、次代を担う若者や子どもたちがものづくりの面白さと感動を体感し、ものづくりに関心を持てるよう、地域と密着した学校づくりも進めていきます。

結びに、今日まで県立工科短期大学の発展にご尽力いただいた各位に心から感謝の意を表するとともに、併せて皆様方の今後一層のご活躍をお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。



大分県知事
広瀬 勝貞

創立20周年に寄せて

大分県議会議長

井上 伸史



大分県立工科短期大学校が創立20周年を迎えられるに当たり、県議会を代表して心からお祝いを申し上げます。

貴校におかれましては、1998（平成10）年4月の開校以来、本県産業の発展や技術力向上のため、高度な専門知識と技術・技能を兼ね備えた人材を育成し、これまで1400名を超える卒業生を輩出されました。

このように、貴校は、本県産業界の発展や地域振興に大きく貢献されており、これもひとえに、教職員を始め、関係者の皆様の御尽力によるものと深く敬意と感謝の意を表する次第であります。

さて、産業界においては、日々進歩する技術に対応できる能力を身に付けた若い人材に対するニーズは極めて高く、その期待に応えることのできる人材の育成が急務となっております。

このような中、能力を伸ばす個別指導と、独自性の高い充実したカリキュラムを教育方針に掲げ、実践に強く、即戦力となる人材や、コミュニケーション力・チームワーク・問題解決力などの現場対応力を有する人材を育成する貴校には、ますます大きな期待が寄せられています。

県議会といたしましても、本県産業の一層の発展や産業界を担う人材の育成などについて、今後とも全力で支援してまいり所存でありますので、皆様におかれましても、日々研鑽を積み、県民とともに築く「安心・活力・発展」の大分県の実現に向け尽力されますようお願い申し上げます。

結びに、貴校の今後ますますの御発展、並びに関係者の皆様方の御健勝と御多幸を心から祈念申し上げます、お祝いの言葉といたします。

創立20周年に寄せて

中津市長

奥塚 正典



大分県立工科短期大学校が創立20周年の節目を迎えられたことを、心からお祝い申し上げます。

貴校は1998（平成10）年4月に、大分県の産業発展や技術力向上のために高度な専門知識と技術・技能を兼ね備えた人材を育てる目的で、ここ中津市に設立されました。以来、長きにわたり中津市のみならず、大分県や日本の経済及び社会の発展を支える有為な人材を輩出してこられました。このことは多くの方々から高く評価されているところであり、これも歴代の校長を始め、諸先生方のご努力の賜物と心から敬意を表しますとともに、厚くお礼を申し上げます。

この間、2008（平成20）年のリーマンショック等の影響で日本経済が低迷し、地方は一層厳しい局面を迎えましたが、中津市においては2004（平成16）年のダイハツ工業(株)（現ダイハツ九州(株)）の操業開始以降、自動車関連を中心とした企業誘致や地場中小企業の活躍により、ものづくり産業のまちとして発展を続けています。一方で、本格的な人口減少時代を迎え、産業界においても技術者不足が大きな課題となっております。

貴校には、今後も地域に立脚し、地域に貢献する大学校として、その力を存分に発揮していただき、わが国の未来を担う人材育成に一層のご尽力を賜りますよう、お願いいたします。

本市といたしましても、「安心づくり」「元気づくり」「未来づくり」を柱とした「暮らし満足No.1」のまちづくりを目指し、産業界においても、効果的な企業誘致の推進と地場企業の育成を促進することで、基盤のしっかりした地域経済の形成を行ってまいります。

結びに、大分県立工科短期大学校が創立20周年を契機にますます発展されるよう祈念いたしますとともに、関係の皆様の一層のご活躍を心よりお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

祝 辞

中津商工会議所会頭

仲 浩



大分県立工科短期大学の創立20周年を心からお祝い申し上げます。

大分県立工科短期大学は、大分県の産業の発展や技術力の向上を目指し、高度な専門知識と技術・技能を兼ね備えた人材を育てることを目的に、1998（平成10）年に開校されました。以来、約1,400名の優秀な人材を輩出し、大分県内外において企業の中核的な技術人材として活躍されておられます。これまで、指導に当たってこられた歴代校長を始め、教職員の皆様方のご尽力に深く感謝と敬意を表する次第であります。

さて、わが国経済は、安倍政権の下、デフレからの脱却と経済成長戦略に向けた取組が進められ、緩やかな回復基調が続いています。しかしながら、地方においては、少子高齢化や人口減少、東京圏一極集中などの構造的な課題がある中で、中小企業、特に小規模事業者にとっては、人材確保や生産性向上など、経営を取り巻く環境は、まだまだ厳しい状況にあります。

このような中、人間力と技術力を兼ね備えた、社会に通用する技術人を養成されてこられた実績は高く評価されており、今後とも、県北地域を中心に、大分県内の技術者育成の拠点として、さらに多くの優秀な人材の育成をお願い申し上げます。

学生の皆様には、大分県立工科短期大学において、それぞれの分野における専門知識と技術の習得に邁進され、卒業後は、その若い力を存分に発揮され、産業経済の発展の一翼を担う存在となっていただくことをご期待申し上げます。

中津商工会議所といたしましても、貴校をはじめ、関係機関と連携をより一層深め、共に地域産業の発展に貢献してまいり所存でありますので、ご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、貴校の今後ますますのご発展と、皆様のご健康を祈念いたしまして、お祝いのご挨拶といたします。

人“財”の育成に期待

一般社団法人大分県工業連合会会長

古手川保正



大分県立工科短期大学が創立20周年という節目の年を迎えるに当たって、歴代校長を始め、指導教員、職員の方々、そして多くの卒業生、在校生、関係者の皆様のご尽力に改めて敬意を表すとともに、一般社団法人大分県工業連合会を代表してお祝いを申し上げます。

一口に20周年と申しますが、貴校が1998（平成10）年に4科制で開校して以来、在校生に対し一貫して取り組んでいる「実践技術者」の育成も、創立10年目となる2007（平成19）年に時代のニーズを捉えた3系7コース制に再編・変更するなど修学の充実に努めていると伺っております。

また、企業在職者を対象としたQCサークル活動支援や技能向上セミナーの実施など、職業能力の開発にも取り組まれていることに感銘を深くしているところです。

特に、貴校の在校生や卒業生は、各種のものづくり競技大会や技能選手権で優勝・入賞するなど、第一線で活躍する即戦力エンジニアとして、県内外の多くの企業が注目しています。これは、まさに製造業の将来に欠くことのできない人“財”の育成であり、地域において高度な専門的知識と技能を兼ね備えた産業の集積、発展に大きく貢献しております。

一方で、多くの製造業は少子高齢化に伴う人手不足を背景に、人材確保が困難な現状もあります。大分県工業連合会は、県内の工業系学生との交流や企業訪問を強化した取組「テクノピッチ」やIoTモデル工場の創出につなげる若手技術者育成研修「大分ものづくり未来塾」などを進めているところです。是非とも、こうした取組の中でも、貴校の在校生や卒業生に中心的な役割を担っていただくことを期待しております。

最後に、この20周年を契機に、貴校がますます充実した「実践技術者」の育成に取り組み、今後さらに発展されますことを祈念申し上げ、私のお祝いの言葉といたします。

創立20周年に寄せて

同窓会会長

後藤 聖和



創立20周年、誠におめでとうございます。

同窓会を代表しまして、一言ご挨拶申し上げます。

本短期大学校は、大分県の産業の発展・技術向上に寄与するため、また、産業社会の変化に柔軟に対応できる高度な専門的知識と技能を兼ね備えた人材を育成するために開校した学校であります。

私は本校の1期生でございます。20年前のことを思い返してみますと、開校したばかりの真新しい校舎に心躍らせる一方で、まだ大地に根付いていない校庭の草木の頼りなさに不安を覚え、初めて親元を離れひとり暮らしを始める18歳の青年の心境と妙に重なったことを今でも思い出します。

そして、学生生活においては、先輩もいない。前例もない。先生方も学生達も全てが手探り状態の中で、学生自治会や昂華祭などを無の状態から創り上げたことが社会人になってからも必要な能力の訓練になっていたのだと今になって気付かされているところです。

あれから早いもので20年の月日が経ち、頼りなかった草木もたくましく育ち、特に春になると満開の桜がキャンパスに咲き誇り、その姿を地域の方々も毎年楽しみにしていると伺いますとき、この20年間で地域に愛される学校へと成長したのだと感じているところです。

また、ものづくりの各種競技会等で優秀な成績を収めたり、様々な地域貢献活動を行っている後輩達の姿は、確実に本校の伝統となりつつあり、今後もこれらの伝統・活動が次の後輩に受け継がれていくことを願ってやみません。

さて、私ども同窓会ですが、今年で結成7年目に入り、会員は現在1405名となっています。今後は、組織を強化させ本会の目的の一つでもあります、本校及び在校生への支援を行える体制を整えたいと考えています。

しかし、皆さまのご協力なしには本懐を成し遂げることもできません。今後も、これまでと同様のご指導・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、大分県立工科短期大学校の益々のご隆盛と、学校関係者の皆さまをはじめ、本校に関わります全ての方々のご健勝をご祈念申し上げまして祝辞とさせていただきます。

創立20周年に寄せて

後援会会長

山本 玲子



大分県立工科短期大学校創立20周年、誠におめでとうございます。後援会を代表して心からお祝い申し上げます。

あわせまして、開校から現在に至るまでのすべての後援会会員の皆様には、日頃から後援会事業に対し、格別のご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

本後援会は、保護者の皆さん方の熱意により、開校翌年の1999（平成11）年に設立されて以来、学生生活の一層の充実と本校の更なる発展を促進するとともに、学生や保護者相互の親睦を深めることを目的として活動してまいりました。活動内容は、会員の皆様からの会費をもとに学生の福利厚生、学内外の行事、各種競技会への参加費補助等、学生を積極的に支援させていただいており、学生にとってより良い教育環境となるように取り組んでいます。また、様々な行事や学生の近況を発信するために、年に数回、後援会ニュースも発行しております。

私ども役員一同、後援会の設立目的を果たせるように、また子どもたちが実りある2年間の学生生活を送ることができるように、微力ながらこれからも尽力したいと考えております。

これまで1405人の人財をものづくり業界へ送り出している工科短期大学校ですが、皆が第一線で活躍し、その活躍ぶりはいつも先生方の耳に届いていると伺いました。

私自身、現在2年生の子どもと、昨年度卒業しました子どもがおり、2人の息子が大変お世話になりました。本校では、四年制の国公立大学工学部と同等の授業時間数があり、実習等もとても充実しており、社会に出てすぐに即戦力となり得る力を身に付けることができます。先生方のフォローもとても手厚く、就職活動の際にも細かいところまでご指導いただきました。卒業する頃には社会人として旅立っていくにふさわしい、頼もしい顔つきになっていたのが印象的でした。工科短期大学校での2年間は、保護者である私たちが毎日安心して学校に送り出すことができました。

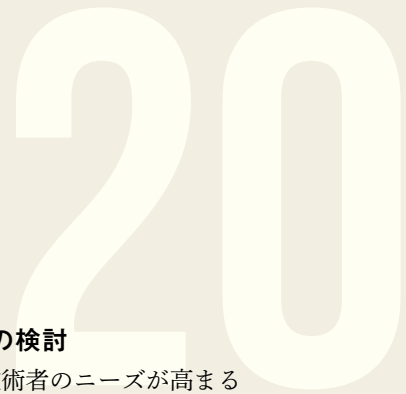
今後もさらに大分県立工科短期大学校が発展していくこと。そして在学生・卒業生の皆さんのますますのご活躍を祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。

歴史

20年を振り返って

校 是

- 一、社会に役立つ
感性豊かな技術人の養成
- 一、時代の変化に対応する
識見をもった人材の養成
- 一、地域に愛され地域と共生する
短期大学の創造



開校までの足跡

大分県の企業立地の動向

大分県では、1960年代から70年代にかけて、大分臨海工業地帯を中心に、鉄鋼、石油精製、石油化学などの基礎素材型産業や半導体等の企業立地が進み、80年代に入ると県北国東テクノポリス地域を中心に、電子部品や精密機械、メカトロニクス等のハイテク企業が相次いで立地して、ものづくり産業の成長が続いた。

また、県北地域では70年代後半から自動車部品メーカーの立地が徐々に進んでいたが、90年代初めに福岡県で完成車メーカーの新規操業や増設が相次ぐとともに、1992（平成4）年にダイハツ工業（株）が中津市への進出を表明したことから、自動車関連企業の集積が加速することが期待された。

ものづくり産業の発展と技術者のニーズ拡大

県外大手企業の立地が進む中、地場企業においても部品等の製造、工場の保守管理やロジスティクス等の関連サービスへの参入を目指す動きが活発になった。新たな分野に参入するためには、技術力や運営ノウハウの習得が必要なことから、地場企業は立地企業からの技術移転や大学、試験研究機関との産学連携等の取組を強化することとなった。

このような県外企業の立地や、地場企業のレベルアップを円滑に進めるためには、これを担える人材の確保が不可欠であり、特に高度な知識と技術・技能を併せ持った、実践技術者の確保・育成が求められることとなった。

大分県の工学系高等教育機関の状況

ものづくり立県を目指す大分県にとって、以前から工学系高等教育機関の不足が大きな課題となっていた。

当時、大分県内で工学系学科を設置する高等教育機関は、大分大学、日本文理大学及び大分工業高等専門学校の3校であったが、それらの学生数を合わせても、増加する大分県のものづくり産業の人材需要に応えるには不十分な上に、卒業生の大半が県外に就職しているという実態もあった。例えば1995（平成7）年度の3校の卒業生のうち87.9%が大分県外で就職している。

また、高校卒業者の進学意欲は年々高まっていたが、県内では大学等の数も学部・学科等の選択枝も限られていることから、進学者の約4分の3が県外に流出している実態があった。

県立職業能力開発短期大学の検討

ものづくり産業の現場を担う技術者のニーズが高まる一方で、教育機関の不足がネックとなっている状況を踏まえ、大分県では1991（平成3）年10月に策定した第5次大分県職業能力開発計画において「将来、県立訓練短期大学の設置が可能な法的処置がなされることが予想されるので、訓練短期大学の設置の可能性について検討を行う」との方針を打ち出した。

翌1992（平成4）年6月に職業能力開発促進法が改正されて、都道府県が国の認可を受けて職業能力開発短期大学を設置できることとなり、同年8月には労働省（現・厚生労働省）から学校の設置認可基準が示された。これを受けて、まず1993（平成5）年4月に山形県が全国初の県立短期大学校を開設し、さらに複数の県で設置に向けた動きが具体化した。

本県でも、こうした先行事例を参考にしながら、大学校の設置について検討が行われた。

企業、高校生の短期大学設置への期待

1994（平成6）年、県は職業能力開発長期計画（計画期間10年）の策定に着手し、その基礎資料とするため事業所や高校生に対し、アンケートによる実態調査を行った。

この調査の中で、職業能力開発短期大学の設置に関する意向を調べたところ、回答のあった事業所のうち「是非必要である」又は「設置することが望ましい」としたものが全体の3分の2に上った。また、卒業生の採用についても「是非採用したい」又は「採用を積極的に検討したい」としたものが3分の2に達する結果となり、大学校の設置に大きな期待が寄せられていることが判明した。

一方、同時に行った高校3年生に対する調査では、回答のあったもののうち、大学校ができれば「進学したいと思う」としたものと「進路の一つとして検討してみたい」としたものを合わせると、約28%が進学に前向きなことも明らかになった。

県立職業能力短期大学校設置プロジェクトの始動

工学系高等教育機関の不足という懸案に対して、県立職業能力開発短期大学校の設置を進める法律改正が行われたことや、大学校設置に対する事業所や高校生の高い期待も判明したことを受け、1995（平成7）年2月、大分県職業能力開発審議会から知事に対し、「県立職業能

力開発短期大学校（仮称）を早期に設置することが必要である」との提言がなされた。

この提言を受けて、県では大学校開設に向けたプロジェクトを正式にスタートさせることとした。同年5月に職業能力開発課内に職員4名体制の「職能短期大学校設置準備班」を置き、早速、基本計画の策定に取り掛かった。

県立職業能力開発短期大学校（仮称）基本計画の策定

学校を開設する上で、設置学科、定員及び学校所在地はとりわけ重要な項目である。

設置学科については、地域企業の現状と将来の人材ニーズを踏まえて、①生産技術科、②制御技術科、③電子技術科、④住環境科の4科を置くこととした。また、学生定員については、少人数教育を徹底するため、1学年各科20名、2学年合計で160名とした。

学校所在地については、県北国東テクノポリス地域内で自動車関連企業等の集積が期待される県北地域にあって、交通アクセスや商業施設などのアメニティが整った中津市が選ばれた。具体的な場所については、設置基準を満たし十分な敷地を確保できる、民間企業所有の工場跡地を新たに取得することとした。

また、開校時期については、進出を検討する県外企業や、技術力向上を急ぐ地場企業のニーズに早急に応えるため、準備期間を3箇年度以内に抑え、1998（平成10）年4月を目指すこととした。

これらの事項を盛り込んだ「県立職業能力開発短期大学校（仮称）基本計画」は、1995（平成7）年7月の県議会において説明され、事業実施が承認された。また、同年8月には県職業能力開発審議会でも承認された。

設計、用地取得、開設準備等の推進

県は早速施設の設計や学校用地の取得、国の設置認可申請に向けた作業等に着手した。



開校準備に追われる工科短期大学校設置準備室の職員（1997（平成9）年度）

1995（平成7）年8月、施設の基本・実施設計を業者に発注するとともに、建設予定地の地元説明会を開催し、大学校設置への協力を要請した。

同年9月、県議会で学校用地の取得議案が承認され、土地収用法の事業認定手続き等に着手。

同年10月、学識経験者等で構成する「職業能力開発短期大学校開設準備委員会」（会長：宮川浩臣大分大学工学部長）が設置され、以後、開校直前の1998（平成10）年2月まで延べ6回にわたり、施設や運営計画全般にわたって意見、提言がなされた。また、本委員会の下に置かれた「カリキュラム検討専門部会」において、カリキュラム編成作業が進められた。

なお、キャンパスのレイアウトに関して、校門を南側に設置する案と西側に設置する案が比較検討されたが、同年12月までに西側案の採用が決まり、これに基づく施設のレイアウトが固まった。

職能短期大学校設置準備室の始動

1995（平成7）年12月、学校用地に対し土地収用法の事業認定がなされ、翌年1月から用地造成工事が始まった。造成工事は建物建設工事の進捗に合わせて、取付け道路や周辺水路の整備等、開校直前まで順次実施された。

1996（平成8）年4月、県は事業推進体制を強化するため職業能力開発課内に置かれた設置準備班を独立させ、新たに室員5名の「職能短期大学校設置準備室」を設置した。また、同年5月策定の第6次大分県職業能力開発計画に、大学校の早期設置を盛り込んだ。

同年6月、大学校の初代校長として大分大学工学部教授の足立宜良氏を内定する。この時期、教職員の募集活動も本格化して、大分県内はもとより県外で活躍する大分県出身の企業エンジニア、大学の研究者等に広く打診がなされた。



建設が進む管理棟、研究棟及びアネックス（1997（平成9）年10月）

いよいよ建設工事に着手

1996（平成8）年7月、他の施設に先行して、まず体育館と学生寮の建設工事に着工。また、9月に県議会で工事請負契約締結が承認されると、校舎等の主要施設の建設工事も始まった。この工事は管理棟及び講堂、研究棟及び学生ホール、実習棟、アネックスの4つの工区毎に異なる業者が担当することとなった。10月16日に現地で安全祈願祭が行われ、いよいよ敷地全体で工事の槌音が響き渡ることとなった。

また、校舎の入口に学校の顔となるモニュメントを設置することとなり、日出町にアトリエを構える彫刻家の辻畑隆子氏に製作を依頼することとなった。

校舎建設工事が始まり、県の設置準備室では工事に伴う関係者の連絡調整に加えて、カリキュラムの編成や導入する実習機械等の選定、学校設置認可申請に向けた国との事前協議、さらには受験生確保のための高校へのPRなど、多岐にわたる作業に追われた。特に実習用機器については、質・量共に4年制大学を上回る水準にこだわった。例えば当時事業所や大学でまだパソコンが十分普及していない時代にあって、情報化の急速な進展に対応するため、学生定員を大幅に上回る台数のパソコンの配置等が計画された。

学校の名称と入学試験の日程が固まる

翌1997（平成9）年1月6日、知事の新年記者会見において、学校名を「大分県立工科短期大学校」とすることが発表される。

同年3月、一足早く着工した体育館と学生寮が竣工する。

開校1年前となった同年4月、設置準備室は「工科短期大学校設置準備室」に名称が改められるとともに、教職員の募集に応じて民間企業等から新たに採用された職員4名が配属されて9名体制になる。教職員予定者は、これ以降も同室と高等技術専門校に計6名が順次採用・配属されて開校準備に当たった。

また、初年度の入学試験については、同年秋に推薦入試を、翌年2月に一般入試を行うことが固まり、受験生の募集に向けて高校への周知に力を注いだ。

なお、一般入試については最終的に前期と後期の2回行うこととなった。

大学校設置認可を得て入学試験を実施

1997（平成9）年7月、労働大臣に対して設置認可申請書を提出する。

本申請は提出までに県と労働省との間で十分な確認、調整を行っていたこともあり、8月29日付けで無事認



帯刀将人大分県副知事（左から3人目）に労働大臣の設置認可書が手渡される
1997（平成9）年8月29日



初めての推薦入学試験が中津市内のホテルで行われる
1997（平成9）年11月6日



真新しい実習室に最新鋭のマシニングセンターが搬入される 1998（平成10）年3月



第1期生の入学式の際の記念撮影 1998（平成10）年4月7日

可された。認可書は同日、労働省において山中秀樹職業能力開発局長から帯刀将人副知事に手渡された。

同年11月6日、最初の入学試験となる推薦入学試験が行われた。この時点ではまだ学校の建物は完成していなかったことから、中津市内のホテルで小論文と面接による試験が行われ、46名の応募者のうち31名が合格した。

この頃、初代校長就任予定者の足立宜良氏が体調を崩して就任が困難となったことから、県は後任者として大分大学工学部教授の時田雄次氏の就任を内定する。時田氏は3月に大学を退官後、4月から校長に就任することになる。

1998（平成10）年2月17日、前期一般入学試験が行われる。この試験は推薦入試と同様、中津市内のホテルを会場としたほか、大分会場として県庁会議室でも行い、数学と英語の学科試験を実施した。当日は応募者104名のうち80名が合格した。

完成したばかりの校舎で入学者説明会を実施

同年3月、校舎及び外構の全ての工事が竣工。約47,000㎡の敷地に延床面積約13,800㎡の建物が、総工費約75億2千万円をかけて完成した。

設置準備室では、膨大な数の実習用機器や机・椅子等の什器類の搬入・調整作業を行う一方で、新入生を迎える準備に忙殺された。

3月18日には、完成したばかりの校舎で入学者説明会が行われ、新入生に対し入学後の学習内容等の説明、実習着の採寸等が行われた。

3月25日、後期一般入学試験が工科短大で行われ、応募者22名のうち17名が合格。応募者は推薦入試と2回の一般入試の合計で延べ172名に上り、受験生の確保に向けて努力してきた関係者はホッと胸を撫で下ろした。



入学式後に行われた辻畑隆子氏製作のモニュメント「夢みるAge」除幕式 1998（平成10）年4月7日

初めての入学式を挙行

4月7日、工科短大講堂において、平松守彦知事、鈴木一郎中津市長他の臨席の下、95名の新入生とその保護者等、計約200名が参列し、初めての入学式が行われた。時田雄次校長が「21世紀の先端技術に即応できる優秀な技術者を目指して頑張ってもらいたい」と式辞を述べた後、入学生を代表して生産技術科の室絵里子さんが「栄えある第1期生として、多くの友と先生方とともに、魅力ある大学づくりに励みたい」と宣誓した。

入学式の後、約1年半を掛けて製作されたモニュメント「夢みるAge」の除幕式が行われ、学生や保護者が見守る中、製作者の辻畑隆子氏、平松知事及び学生代表が像を覆っていた幕を取り除いて披露した。

全て一から手探りではあったが、チャレンジ精神あふれる第1期生と、教育に熱い情熱を注ぐ職員達による、工科短大の力強い歩みが、こうしてスタートした。

開校記念式典の開催

ゴールデンウィークを経て、新入生の学生生活も落ち着いてきた5月21日、工科短大講堂で開校記念式典が行われた。

式典に先立ち、平松知事らが管理棟玄関前に豊後梅を記念植樹する。

式典には労働省、国会議員、県議会議員、工事関係業者、中津市関係者、商工団体、地元自治会等関係者及び県関係者等約90名が出席。知事から中津市東浜区長ほか地元関係者と工事施工業者に感謝状が贈呈された。その後、アネックス多目的実習室で祝賀会が行われ、開校を祝った。



開校記念式典後の祝賀会で鏡開きをする平松知事（中央）、時田校長（右端）ら 1998（平成10）年5月21日

開校から現在までの歩み (沿革)

1998 (平成10) 年

- 4月 時田雄次 校長(初代) 就任
- 4月7日 第1回入学式が挙行される。
(入学生95名)
入学式後に辻畑隆子氏のモニュメント「夢みるAge」の除幕式が行われる。
- 5月21日 開校記念式典が執り行われる。
- 11月21,22日 第1回昂華祭が開催される。



OIT 開校PR用チラシ



第1回昂華祭の様様 昂華祭の旗は1期生の手形で文字が作られている。

1999 (平成11) 年

- 5月 第4回ゆきき祭りに学生が参加する。



第4回ゆきき祭りに、1、2期生が参加

2000 (平成12) 年

- 3月23日 各科ごとの卒業研究発表会が開催される。
- 3月12日 第1回公開卒業研究発表会が開催される。
(各科2グループずつ8グループの発表)



第1回公開卒業研究発表会の発表風景 2000 (平成12) 年3月



第1回公開卒業研究発表会のポスターセッション風景 2000 (平成12) 年3月

- 3月 第1期生卒業式が挙行される。



第1回卒業式の時の記念撮影の様様

- 11月25,26日 第3回昂華祭が中津商工会議所と共催で開催される。テーマは「夢・テクノロジー in 中津2000」



第3回昂華祭ではテムザックのロボットもお目見え。

2001 (平成13) 年

- 2月 工短大の校歌ができる。
(作詞：高橋洸志氏、作曲：河野敦朗氏)

2003 (平成15) 年

- 4月 山下 忠 校長(第2代) 就任

2004 (平成16) 年

- 4月 OIT導入PJが初めて行われる。「からくり人形ロボットの製作」に取り組む。

ヒューマンスキル演習が始まる。

第1回のOIT導入プロジェクトが開催される。2004 (平成16) 年度それまで2日間であったオリエンテーション期間を5日間とし、本校の概要を理解し、ものづくり教育の一端に触れ、親睦を図る機会として編成している。記念すべき第1回目のOIT導入プロジェクトの内容は以下の通りである。

- ①からくり人形ロボットの製作、②大野勇太郎氏の講演：210年前に制作された茶運び人形の復元の苦労話など、③中津市内散策、④ノートパソコンの利用講習会、⑤歓迎球技大会
- また、同時期に行われる2年生のコミュニケーションセミナーの内容は以下の通りである。
- ①就職についての講演(校長) ②自己分析シート、自己PR文、履歴書の書き方演習 ③電話応対講習会(エアビジネス学院院長 釘宮史子氏) ④言葉についての講演(元NHKアナウンサー 飯塚政利氏) ⑤面接指導 ⑥工場見学(日産九州工場)



平成16年OIT導入PJ大野勇太郎氏講演



- 8月9日 第5回寺町とろう祭りに住居環境科1年生が参加。



平成17年茶運びからくり人形ロボットづくり

2005 (平成17) 年

- 8月27日 第1回若年者ものづくり競技大会(千葉市で開催)の機械製図(CAD)部門で、生産技術科1年羽戸啓輔さんが全国2位になる。



- 10月3~7日 インターンシップが始まる。1年生88人全員が大分、福岡両県の56企業で、インターンシップ(体験就業)に取り組む。



第1回目のインターンシップの報告会の様様2005 (平成17) 年10月

2006年 (平成18) 年

- 2月 九州ブロックポリテックビジョン2006 ロボット競技会で、電子技術科2年岩城勝哉さんが優勝する。
- 4月 クォーター制を試行的に導入する。
1年生を対象に「キャリアデザイン入門」が始まる。



キャリアデザイン入門始まる。第2回吉野プラスチック(株)大分工場長 磯辺雄二氏の特別講義の様様 2006 (平成18) 年4月

- 8月12日 OBSテレビ「おおいた捕物帳」で工短大が紹介される。

キャリアデザイン入門が始まる。2007 (平成19) 年度

キャリア教育を1年次のOIT導入PJからの流れを引き継いで行うためにキャリアデザイン入門を設定。初年度の3系合同の特別講演の内容は以下の通りである。

- 第1回 安田俊彦氏(生産技術科教授、大分県高度熟練技能者会長)「企業が求める人材とは」
- 第2回 磯辺雄二氏(吉野プラスチック(株)大分工場製造課長、大分県高度熟練技能者会会員)「製造効率アップの取り組みと企業人としての心構え」
- 第3回 宮田守次氏(ミヤタハイメック品質技術研究所代表)「未経験の“もの創り世界”への挑戦ー諸君へ望むものー」
- 第4回 石丸 進氏(福山大学工学部、岡山大学教育学部非常勤講師)「創造的自己啓発の実践を通して生涯の夢の実現」(同短大)

2007 (平成19) 年

- 2月 ポリテックビジョン2007ロボット競技会で、電子技術科2年長野圭一郎さんが優勝する。
大分県北部流域林業活性化センター主催 木工デザインコンクールで住居環境科2年立川太士さんが優秀賞、阿部久弥さんが奨励賞受賞する。
- 4月 村上周太 校長 (第3代) 就任
3系7コース制が始まる。
クォーター制が本格導入される。
- 8月 九州工業大学と連携協定を締結する。

3系7コース制への移行 2007 (平成19) 年度
平成19年度から、自動車関連産業の集積が進む状況に鑑み、大分県の産業構造変化に対応した履修課程に再編を図るため、それまでの4科から機械システム系と電子システム系、建築システム系の3系に改めるとともに、自動車関連産業など就職が期待できる系の定員を増やすこととなった。従来4科とも20名であった定員をそれぞれ機械システム系46名、電子システム系24名、建築システム系10人に改編している。また、2年次にコース制を導入することで、より専門的な知識と技術の習得を目指している。1年次は同じ系の学生がすべて同じ授業を受ける一方、2年生では各系のコースから選択し、学生の進路に合った専門技術の習得を目指すこととなった。

2008 (平成20) 年

- 4月11日 「2008合同企業説明会 in 工科短大」が開催され50社が参加する。
- 4月 九州工業大学との人材育成 (連携) 事業が始まる。
- 8月 第3回若年者ものづくり競技大会の機械製図 (CAD) 部門において、機械システム系2年玉井裕介さんが厚生労働大臣賞を受賞する。



合同説明会 in 工科短大の様様



第3回若年者ものづくり競技会表彰式の様様

- 11月20日 タチカワブラインド主催「第10回ブラインドカラーコーディネートコンテスト」イメージ部門で建築システム系1年池田親哉さんが入賞する

2009 (平成21) 年

- 1月29,30日 「金型加工人材育成シンポジウム in 中津」が2日間の日程で工科短大 (初日) とグランプラザ中津ホテル (2日目) にて開催される。
- 2月 ポリテックビジョン2009の機械加工技術コンテスト旋盤作業において、機械システム系1年堀江智大さんが優勝する。
- 4月10日 前年度に引き続き、合同企業説明会が開催される。参加企業は24社少ない27社となる。
- 8月7日 第4回若年者ものづくり競技会機械製図 (CAD) 部門において、機械システム系2年梶原友教さんが厚生労働大臣賞を受賞する。



- 9月2日 山下順一客員教授による特別講義が開催され、全系の1年生が聴講する。

2010年 (平成22) 年

- 1月27日 合同企業説明会&セミナーが開催される。
平成21年度卒業生就職率100%達成 (2008 (平成20) 年秋のリーマンショックに端を発した世界的な景気後退に伴う、厳しい井雇用情勢の中で)
- 2月26日 九州ブロックポリテックビジョン フライス盤作業において、機械システム系1年原山祐太郎さんが優勝する。
九州ポリテックビジョン ロボット競技会において、機械システム系2年中村裕太さん、松本幸成さんが優勝する。
- 2月 デジタル技術検定試験で、電子システム系が団体優秀賞を、また電子システム系1年樋田駿介さんが優秀賞を受賞する。
- 3月 第12回3Dマイホームデザイナーコンテストにおいて建築システム系2年生がスクール部門団体優秀賞を受賞する。



第12回マイホームデザイナーコンテスト授賞式での記念写真

- 4月 小林敏弘校長 (第4代) 就任
- 4月8日 OIT導入PJで「好きなモノマップコミュニケーション」が取り入れられる。
- 6月5日 第1回プレス金型保全補修基礎講座開講式が行われる。2011年2月まで計37回 (185時間) 県内9社から11人受講。



第1回プレス金型保全技術者育成基礎講座 開講式

- 8月5日 第5回若年者ものづくり競技大会機械製図CADにおいて、機械システム系1年三浦裕貴さんが厚生労働大臣賞を受賞する。三年連続 (V3を達成)。



2011 (平成23) 年

- 7月 第1回マイホームデザイナースクールコンテストにおいて建築システム系2年生が「金賞」受賞。
- 8月15,16日 九工大金型教育実習が行われる。

2012 (平成24) 年

- 2月24,25日 九州ブロックポリテックビジョン2012 機械加工技術コンテスト・旋盤作業において、機械システム系1年徳池将さん優勝、渡邊雄祐さん準優勝。
- 2月1日 学内合同企業説明会開催。
- 7月 集中豪雨により被害を受けた中津市内の住居の復旧活動に、ボランティアとして学生、職員が参加する。



集中豪雨により被害を受けた中津市内の住居の復旧活動の様相

- 11月3日 安田俊彦客員教授 広瀬勝貞知事から大分県功労者として表彰状を授与される。
- 11月17日 同窓会設立総会及び創立15周年記念祝賀会が開催される。



同窓会設立総会及び創立15周年記念祝賀会の様相

2013 (平成25) 年

- 1月23日 韓国忠南(チュンナム)機械工業高校学習団来校。
- 2月26日 県政ふれあいトークで広瀬知事来校。(知事と学生との懇談会)
- 4月 佐伯心高校長(第5代)就任
電気システム系を電気・電子システム系に変更し、電気エンジニアコースと電子エンジニアコースを設ける。
- 5月21日 東亜マイスター高等学校(韓国)見学来校。



東亜マイスター高等学校(韓国)来校

- 6月7日 第1回 LCI(低コスト生産設備改良)講座開講式が開催される。



第1回 LCI講座 開講式の様相

- 8月9日 第8回ものづくり競技大会機械製図(CAD)において、機械システム系2年の猪鼻 颯さんが厚生労働大臣賞を受賞する。



- 11月10日 第2回大分県学生溶接選手権において、機械システム系2年の滝口直久さんが優勝、中島雄樹さんが3位となる。
- 11月15日 大韓民国教育部(日本の文科省に相当)生涯職業教育局パク局長、東亜マイスター高校関係者など韓国から見学者来校。
- 11月19日 東京明治記念館で、安田俊彦客員教授が中央職業能力開発協会から都道府県技能検定委員を代表して表彰される。

2014年(平成26)年

- 1月29日 学内合同企業説明会に47社が参加する。(例年より5割増し)
- 4月4日 日産自動車 今津副社長が本校視察、地元産業団体(中津商工会議所、中津市工業連合会)と工科短大学生と懇談。
- 4月16日 「産業戦略セミナー in 中津サミット」が開催される。産業技術総合研究所企画副本部長 中村吉明氏による基調講演「これから5年間の競争地図(グローバルものづくりのトレンド)」が行われる。
- 7月 実習用3Dプリンターを導入。
- 11月9日 第3回大分県学生溶接選手権において、機械システム系2年加来恵里花さんが優勝する。
- 11月14,15日 韓国東亜マイスター高校実習生(12名)を受入れ。
- 11月25日 東亜マイスター高校研修旅行生受入れ 2年生約100名来校、工科短大の1年生と親交を深める。



日産自動車 今津副社長が工科短大を視察

2015 (平成27) 年

- 1月23日 技能五輪メダリスト石田秋峰氏(旋盤種目 平成22年度銀メダル・平成23年度銅メダル受賞者、㈱日立製作所インフラシステム社勤務)による実演及び意見交換会が開催される。



- 4月16日 第7回学生金型グランプリプラスチック金型部門において機械システム系卒業生4名、漆間貴文さ



第7回学生金型グランプリ金賞受賞の知事報告会の際の記念写真

- 5月19日 東亜マイスター高校2年生（電気科、LED照明科2年生）が来校。
 人、國吉達也さん、松永拓也さん及び水元優太さんが金賞を受賞する。（課題テーマは「トートバッグ型マグカップ用ティーバッグ」）



本校1年生との集合写真

- 7月10日 北九州工業高等専門学校、福岡工業大学短期大学部との包括的連携協力に関する協定を締結する。
 9月3日～25日 東亜マイスター高校3年生が工科短大で研修。（約1ヶ月間）
 11月 デジタル技術検定において、電気・電子システム系1年太田陽介さん、藤田俊洋さん及び中島匠さんが優秀賞を受賞、工科短大が文部科学大臣賞を受賞。



デジタル技術検定文部科学大臣賞受賞の校長報告会の際の記念写真

2016（平成28）年

- 1月30日 OBSテレビ特番「おおいた大捕物帳」で工科短大が紹介される。（健ちゃんこと首藤健二郎さんがリポーターをされている老舗番組）
 2月27日 ポリテックビジョン2016 in 北九州 フライス盤部門において、機械システム系1年村上直矢さんが優勝する。
 6月 公開の映画「サブイボマスク」に全面協力した中津市ロケツーリズム推進協議会の活動に学生が参加する。（工科短大の学生は映画にエキストラとしても参加）
 7月26～28日 韓国・東亜マイスター高校（韓国・大田市）を佐伯校長、兒玉講師及び学生3名が訪問する。



東亜マイスター高校（韓国、大田市）での記念写真

- 9月30日,10月26日 建築システム系2年生が宇佐市教育委員会の委託を受け、大分県建築士会宇佐支部の町並み修景隊とともに宇佐海軍航空隊の遺構を実測調査する。

- 10月 実習用双腕ロボットを導入。
 10月27日 3校包括連携協定に関わる意見交換会開催。（於：北九州高専）
 11月26日 同窓会総会・懇親会開催。

2017（平成29）年

- 2月15日 広瀬知事と学生のふれあいトークが工科短大にて開催される。



「県政ふれあいトーク」にて、広瀬知事に双腕ロボットの説明をする、電気・電子システム系2年の大田真弘さん

- 4月 宮崎淳一校長（第6代）就任
 4月12日 第9回学生金型グランプリ（東京ビッグサイト）において金賞を受賞する。機械システム系卒業生3名近藤克哉さん、富家健太さん及び南和人さん参加（課題テーマは「ポテチクリップ」）



第9回 学生金型グランプリ金賞受賞の知事報告会の際の記念写真

- 6月2,3日 工科短大で「ものづくり技術展 in 中津」が開催される。
 11月3,4日 第20回昂華祭が開催される。
 20回記念として、善ちゃんの笑ってためになるサイエンスショー、ドローン飛行実演他を行う。
 11月12日 第47回技能祭 第6回大分県学生溶接選手権において、機械システム系2年岡本和也さんが優勝。
 12月23日 電気・電子システム系の制作による、中津駅前に設置したイルミネーションが「Loveファンタジア中津2017」イルミネーションコンテストにて最優秀賞を受賞。

2018年（平成30）年

- 2月24日 ポリテックビジョン2018 in 北九州 機械加工技術コンテストのフライス盤作業において、機械システム系1年濱永 功樹さんが優勝。
 7月14日 創立20周年記念式典・講演会を開催する。（於：中津文化会館）

機械システム系（生産技術科，制御技術科）の20年間の歩み

1. はじめに

本校の機械システム系は、開校当初、生産技術科と制御技術科の2科で発足した。2007（平成19）年度からの3系7コース制の実施に伴い、従来の生産技術科と制御技術科の個別の募集から機械システム系として、いわゆるくくり募集へ変更した。1年次は、機械システム系入学者全員が共通カリキュラムを履修し、2年次進級時に、生産技術科の修了となるデジタルメカエンジニアコース、及び金型エンジニアコースと、制御技術科修了となる自動化システムエンジニアコースに分かれる現在の体制となった。

2. カリキュラムの変遷

まず、3系7コース制となる以前の生産技術科と制御技術科における訓練目標と仕上がり像について述べ、次に、3系7コース制の「機械システム系」となった現在の仕上がり像を述べる。さらにコース制実施に伴うカリキュラム変更と、導入した新規設備及び新規ソフトウェアを活用した各コースの特徴的な授業について述べる。

2.1 生産技術科における訓練目標と仕上がり像

生産技術科においては、基本的な生産加工技術を身に付け、数値制御及び情報技術を習得し、精密加工技術と自動生産システムの設計製作をすることができる実践技術者を養成することを訓練目標とした。仕上がり像は、機械工学とコンピュータ制御を理解し、これらを融合したコンピュータ統括生産システムを取り扱えるプロダクションエンジニアとした。（図1）

2.2 制御技術科における訓練目標と仕上がり像

制御技術科においては、エレクトロニクスと機械工学の基礎を身に付け、コンピュータ技術を習得するとともに、ロボット等の駆動に必要な各種制御技術を身に付けた実践技術者を養成することを訓練目標とした。仕上がり像は、機械と電子両分野の基礎を理解し、これらを融合した領域に

おける実践技術者、すなわち、電気・計装等の付帯設備を含めた各種機械を設計・管理できる技術者とした。（図2）

2.3 機械システム系の発足の経緯とカリキュラムの基本的考え方

機械システム系の発足に際しては、企業ニーズ（中でも大分県内の自動車関連企業での金型技術者の人材育成に対する要望）を反映したカリキュラム編成の検討がなされ、コースの1つに金型技術者を育成するコースを設ける形でコース制をとることとなった。併せて、入学後の進路拡大による学生募集への効果を期待して、基礎学科及び基礎実技が共通である生産技術科と制御技術科を機械システム系として、くくり募集することとなった。2007（平成19）年度入学生から、生産技術科と制御技術科は機械システム系として再編がなされ、1年次は機械システム系全員が系基礎学科及び系基礎実技を中心とした共通授業を履修し、3コースに分かれる2年次において、専攻学科及び専攻実技を中心としたコース別授業を履修する形となった。（図3）

現在のカリキュラムにおいては、1年次前期に全履修学科の5割弱が行われており、この入学して間もない時期に、機械工学の基礎科目の多くを習得する形となっている。そして、1年次後期からは、実技が重点的に配置され、2年次後期においては、実技に加えて卒業研究がほぼ同等の時間が配置され、これらで授業時間の大半が占められるという2年間の履修の流れとなっている。

2.4 各コースの仕上がり像

デジタルメカエンジニアコースでは、3次元CADやCAD/CAMなどのデジタルツールを使いこなすとともに、実際の工場で使用されることが多い最新の高精度NC工作機や汎用工作機、溶接まで幅広く学習し、生産現場に対応できる人材の育成を目指している。金型エンジニアコースでは、金型技術の中でも最もシェアの大きな技術である、金属プレス技術とプラスチック射出成形技術を

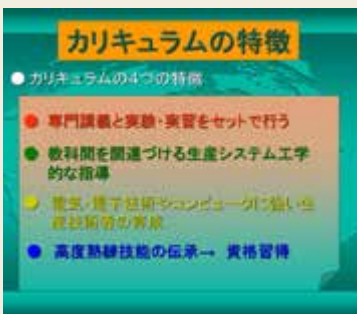


図1 生産技術科の教育・訓練の特徴2005（平成17）年度生産技術科紹介資料から抜粋



図2 制御技術科の教育・訓練の特徴2005（平成17）年度制御技術科紹介資料から抜粋



図3 機械システム系のカリキュラムチャート（現行）

身に付けた人材の育成を目指している。自動化システムエンジニアコースでは、電気・電子の基礎をより深く理解し、センサー、アクチュエータなどのメカトロニクス工学、工業用コンピュータ（PLC）を用いたシーケンス制御について総合的に学び、自動化システムの構築・保守ができるエンジニアの育成を目指している。

2.5 機械システム系2年生共通授業

(1)3次元CAD (CATIA V5) (デジタルメカ・金型・自動化共通)

3次元CADについては、コース制に先立つ2004（平成16）年度に生産技術科へCATIA V5が導入され、通年の8単位科目として設けられ、現在に至っている。この授業では、3次元CADを用いて、ソリッドモデルやワイヤーフレーム、サーフェイスモデルなどの3次元形状作成技術からアセンブリ技術まで学ぶとともに、3次元形状を利用し、2次元の部品図や組図を自動生成する方法を学んでいる。

(2)数値制御加工実習 (デジタルメカ・金型 共通)

NC旋盤、マシニングセンタ、ワイヤー放電加工機などのNC工作機械について、NC言語によるプログラミングを行い、基本的加工法を習得している。(写真1)

(3)CAD/CAM(CAM TOOL) (デジタルメカ・金型 共通)

CAD/CAMについては、2002（平成14）年度頃から生産技術科の数値制御加工実習の中で、CAM TOOLが導入され始め、コース制に先立つ2004（平成16）年度には、4単位の単独科目となり、その後コース制の2年生暫定実施の2007（平成19）年度から、通年の8単位化され、現在に至っている。(写真2) この授業では、3次元CADを用いて、自由曲面を含む3次元形状の設計手法を学び、その形状を実際に加工するためのCAMの使用方法を学んでいる。

2.6 デジタルメカエンジニアコースの特徴的な授業

(1)溶接工学

溶接工学については、コース制の準備段階の2006（平成18）年度から、高度熟練技能者による溶接特別講習会として、始まり、2008（平成20）年度から、正式にカリキュラムに組み込んだ。内容は、機械や機器を製作するための各種溶接法の習得であり、被覆アーク溶接法及び炭酸ガス溶接法、TIG溶接法を習得するものである。溶接工学については、当初から現代の名工である山下順一客員教授から指導していただいている。



写真1 マシニングセンタ (2011 (平成23) 年度整備) による実習の様子

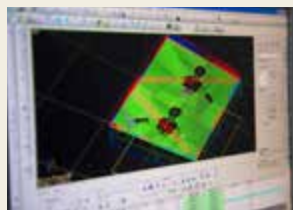


写真2 CAM TOOLを用いたCAD/CAM実習のPC画面

(2)CAE実習 (FEMAP with NX Nastran)

CAE実習については、機械構造物の強度検討に必要な内部応力や変形を求める手段である汎用構造解析ソフトが、3次元CAD等と同じくパソコン上で使用できる環境が整ってきたことから、コース制に伴い、カリキュラムに取り入れられた。現在使用しているソフトウェアは、FEMAP with NX Nastranであり、線形静解析について、骨組み構造、板構造、シェル構造、及び一般3次元構造について、各種問題のモデル化から解析、評価まで行っている。

2.7 金型エンジニアコースの特徴的な授業

(1)プレス加工法

金属を切る、曲げる、変形させることで部品を量産する方法の1つであるプレス加工法には、高精度の金型が必要である。プレス金型技術者育成のため、プレス金型の設計、製作、プレスによる生産の基本について、塑性加工理論を基にプレス技術を学び、実習課題でさらに理解を深める内容になっている。(写真3) 関連設備として、プレス成形に必要なサーボプレスが金型コースの設置に併せて2006（平成18）年度に整備され、その後、金型製作に求められる仕様を満足する精密平面研削盤、高精度ワイヤー放電加工機が2007（平成19）年度、2009（平成21）年度に整備された。なお、この科目については、(株)三井ハイテックから、OBの方を紹介していただき、講師として指導していただいている。

(2)モールド加工法

射出成形は、プラスチック（樹脂）を溶かして形を造り、冷やし固めることで部品を同形に量産する手法である。射出成形には高品位な金型が必要であり、射出成形を利用した生産に必要な知識を学び、実習課題でさらに理解を深める内容になっている。金型コースの設置に併せて、2007（平成19）年度に、従来からあった小型射出成形機より型締め力が大きな射出成形機が整備された。(写真4)

2.8 自動化システムエンジニアコースの特徴的な授業

(1)メカトロニクス実習

シーケンスをコントローラとして、押しボタン、リミットスイッチ、及び光電センサーなどの入力と、ベルトコンベア、空気圧シリンダなどの出力としてのアクチュエータを組み合わせ、さらに汎用ロボットなどと協調させることで複雑な自動化装置の制御プログラムの製作、デバッグ、調整法について総合的に学んでいる。(写真5)



写真3 プレス加工実習の様子



写真4 型締め力1300kNの射出成形機 (2007 (平成19) 年度整備)

(2) CAE電子回路

回路シミュレーションソフトSPICEを用いて、ダイオード、トランジスタなどの基本的な回路素子の動作を理解する。

(3) CAI制御工学実習

制御系の数値解析ソフトMATLABによるコンピュータシミュレーションを用いた制御システムの解析方法を学習する。(写真6)

3. 卒業研究の取組

卒業研究の取組については、教員の数×年数分だけテーマがあり、限られた紙面で、20年の推移を記すことは困難である。ここでは、最近の卒業研究の実績の中で、機械システム系の3コースそれぞれの特徴を表しているテーマの事例を記すにとどめる。デジタルメカエンジニアコースでは、3次元CADを駆使しての機械設計からCAD/CAMによる加工プログラムの作成、そして、3軸及び5軸マシニングセンタを使っての部品加工を行った、「エアエンジンの設計・製作」(写真7)、金型コースでは、プレス加工のテーマで、順送金型の課題として、ステンレス製のしおりの金型の製作から成形品の評価まで取り組んだ「プレス順送金型の設計・製作」(写真8)、自動化システムエンジニアコースでは、機械技術と電気電子技術を統合したものづくりの事例として、マイコン制御により、2つのステッピングモータと1つのRCサーボモータを駆動し、描画機能を持つ水

平多関節型ロボットである「ロボットアームの製作」(写真9)等の卒業研究がなされた。

4. 検定・資格試験の取組

検定・資格試験については、学習の動機付け、技術・技能の向上、及び就職試験対策を主たる目的として、資格取得指導に取り組んできている。2005(平成17)年度からは、生産技術科において、カリキュラムの中に資格修得実習が取り込まれており、現在に至っている。

4.1 技能検定、技能照査

2004(平成16)年度から、生産技術科において、技能検定4職種5作業(普通旋盤、フライス盤、機械系保全、機械検査、機械製図)への取組を始め、2017(平成29)年度までの14年間で、技能検定7職種11作業で延べ1409名の3級技能士及び186名の2級技能士を生み出している。

また、2005(平成17)年度から、CADトレース技能審査(機械部門)への取組も始め、2017(平成29)年度までの13年間で、初級において144名、中級において41名の合格者を出している。

4.2 品質管理検定

品質管理に関する知識をどの程度持っているかを筆記試験で客観的に評価する品質管理検定は、2005(平成17)年度から実施されているが、本校では2007(平成19)年度か



写真5 メカトロニクス実習の様子 (2006 (平成18) 年度)



写真7 デジタルメカエンジニアコースの卒業研究事例 (2017 (平成29) 年度)

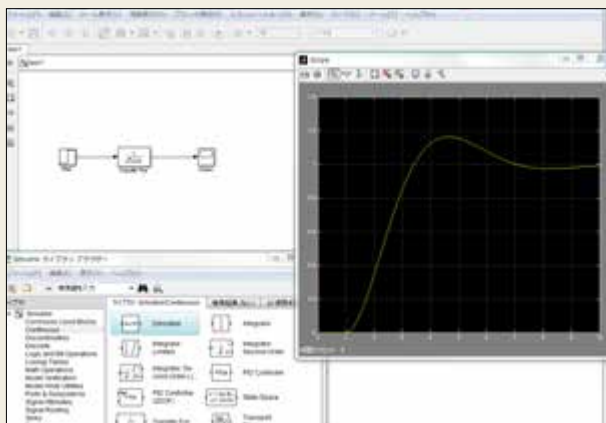


写真6 MATLABを用いたCAI制御工学実習のPC画面



写真8 金型エンジニアコース卒業研究の事例 (2015 (平成27) 年度)

ら取り組み始め、これまでに3級で147名の合格者を出している。

4.3 特別教育

(1)産業用ロボット（教示）特別教育

産業用ロボットの教示等に係わる機器の操作の業務に従事する者に対して、「教示等」に係る特別教育を行うことが法令で義務づけられている。機械システム系でのカリキュラムとなった2007（平成19）年度から1年生に対し、油空圧制御実習の中の産業用ロボットの实習において、産業用ロボット（教示）特別教育を実施し、修了証を発行している。

(2)プレス作業特別教育

動力プレスの金型、安全装置、安全囲いの取付け等の業務に労働者を従事する者に対して、特別教育を行うことが法令で義務づけられている。2010（平成22）年度から2年生金型コース学生へ、塑性加工学及び金型加工実習において、プレス作業特別教育を実施し、修了証を発行している。

5. 工場見学会の実施

工場見学については、2005（平成17）年度までは、生産技術科、制御技術科の各々で、年1回程度、11月、12月に実施されてきた。2006（平成18）年度のカリキュラム変更により、1年生に対して、3系共通の一般教育科目「キャリアデザイン入門」が設けられたことに伴い、機械システム系では、5月に、1日使って2社～4社の見学を定例的に実施している。さらに、2010（平成22）年度からは、12月か1月のいずれかに、第2回目の工場見学を北九州方面で実施することとなり（写真10）、以来、機械システム系では、1年次に2回の工場見学会を実施することが年間行事に組み込まれている。いずれの見学先も学生が継続的に就職している企業、又は関連する企業である。5月の工場見学は、入学して間もない時期であり、本校機械システム系を卒業した後の職場を早い段階で理解することに大きく役立っている。さらに、12月ないし1月の工場見学については、2年次のコースの選択さらに具体的な就職先の検討及び就職活動開始時期での企業訪問という意味で、就職活動への意識

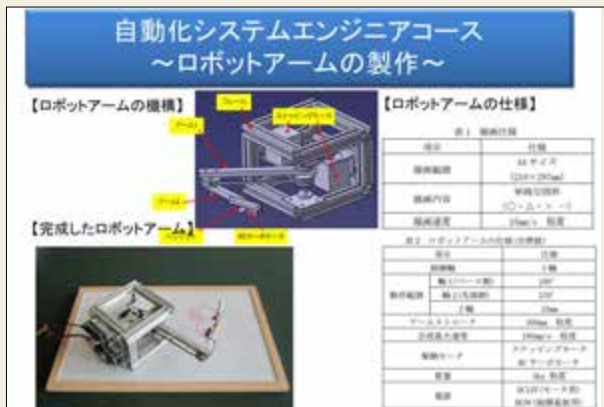


写真9 自動化システムエンジニアコースの卒業研究事例（2017（平成29）年度）

付けにおいて、有効である。

工場見学先については、今後さらに学生の就職先検討における選択肢の拡大に役立てるよう、増やして行きたい。

6. 学外の競技会への取組

若年者のものづくり技能に対する意識を高め、若年者を一人前の技能労働者に育成していくためには、技能習得の目標を付与するとともに、技能を競う場が必要である。機械システム系では、卒業研究での取組や放課後の時間を活用しての取組を行い、積極的に学外で行われる競技会へ参加してきている。

6.1 ポリテックビジョン

九州大会といえる九州職業能力開発大学校ポリテックビジョンについては、1999（平成11）年度から制御技術科での卒業研究の取組にてロボット競技会へ参加し始め、現在も自動化システムエンジニアコースでの卒業研究の中で取り組んでいる。2003（平成15）年度からは生産技術科での卒業研究の取組にて、機械加工コンテストへも参加し始め、翌年度からは、1年生から選抜された学生が参加している。ロボット競技会においては、2009（平成21）年度に優勝しており、機械加工コンテストにおいては、普通旋盤部門で、2003（平成15）年度、2008（平成20）年度及び211（平成23）年度（写真11）と計3度優勝しており、フライス盤部門で、2009（平成21）年度、2015（平成27）年度及び2017（平成29）年度と計3度優勝している。

6.2 若年者ものづくり競技大会

全国大会である若年者ものづくり競技大会には、2005（平成17）年度の第1回から参加している。製図部門では過去5度の金賞（厚生労働大臣賞）（写真12）に輝いてお



写真10 三井ハイテック（株）様工場見学（2014（平成26）年度）



写真11 ポリテックビジョン機械加工コンテストの様子（2011（平成23）年度）

り、その中で2008（平成20）年度～2010（平成22）年度については、3連覇を達成している。普通旋盤部門では、2012（平成24）年度と2013（平成25）年度において、3位入賞している。フライス盤部門では、2015（平成27）年度に3位入賞し、引き続き、2016（平成28）年度に2位入賞、2017（平成29）年度に3位入賞している。

6.3 大分県学生溶接選手権

大分県技能祭で2012（平成24）年度から毎年開催されている学生溶接選手権へは、第1回からデジタルメカエンジニアコースから選抜された学生が参加し、2016（平成28）年度からは、1年生も参加するようになっている。2013（平成25）年度、2014（平成26）年度及び2017（平成29）年度の過去3度、1位となった。（写真13）

6.4 学生金型グランプリ

日本金型工業会が主催する学生金型グランプリへは、第2回の2010（平成22）年度から金型エンジニアコースの卒業研究での取組にて、継続して参加しており、金型を専攻している大学生や大学院生が参加している中で、2015（平成27）年度には2色成形への取組を評価され（写真14）、また2017（平成29）年度には環境にやさしい「オールアルミ金型」での高精度な金型加工による成形品の出来栄の良さを評価され、それぞれ金賞を受賞した。

7. 就職状況

まず、内定先の企業数と内定者数との比率を約5年ごとに推移を見てみる。1999（平成11）年度～2003（平成15）年度の5年間の就職内定者145名の内定先は86社であり、一社当たりの内定者数は1.7人であった。その後、2004（平成16）年度～2008（平成20）年度の5年間の就職内定者192名の内定先は79社であり、2009（平成21）年度～2013（平成25）年度の5年間の就職内定者207名の内定先は87社、さらに、直近2013（平成25）年度～2017（平成29）年度の5年間の就職内定者184名の内定先は78社であり、一社当たりの内定者数は2.4人前後となっている。このような推移を見ると、開校当初においては、継続的に採用していただける企業が少なく、新規企業へ積極的に応募している傾向がうかがわれる。その後は継続的に採用していただける企業が増加した状況がうかがわれる。

次に、コース毎の傾向について、直近5年間の内定結果から見てみる。デジタルメカエンジニアコースでは、就職内定者94名の内定先は47社であり、一社当たりの内定者数は2.0人である。金型エンジニアコースでは、就職内定者42名の内定先は17社であり、一社当たりの内定者数は2.5人である。自動化システムエンジニアコースでは、就職内定者48名の内定先は34社であり、一社当たりの内定者数は1.4人である。これらの結果から、金型エンジニアコースは、比較的特定の企業から多くの学生が内定をいただいております、自動化システムエンジニアコースは、比較的多様な企業から内定をいただいている様子が見られる。

さらに、直近5年間の機械システム系の内定先の分野を大きく分類すると、自動車メーカー、自動車関連、デジタルカメラ・OA機器関連、鉄鋼業関連、機械設計、機械加工・組立、金型、その他に分けられる。

最後に、直近5年間の県内就職率については、約7割であり、多くの卒業生が大分県内で活躍している。

8. おわりに

旧生産技術科と旧制御技術科を母体とする機械システム系であるが、機械システム系となって10年が経った。振り返ってみると、生産技術科と制御技術科をくり募集とし機械システム系を発足させたこと、金型コースを設置したこと、3次元CAD、CAD/CAMを本格的に導入したこと、資格修得をカリキュラム化したこと、学外競技会へ積極的に参加してきたことなどが現在の機械システム系の姿を形作ってきている。そして、工場見学やインターンシップ、そして就職において、企業の皆様、講義・実習においては非常勤講師の先生方、さらに卒業生や保護者の皆様に多大なご支援を賜り、ご尽力をいただいていた。ここに、改めて感謝の意を表したい。

品質管理において、「後工程はお客様」という考え方があるが、機械システム系にこの言葉を当てはめると、卒業生が就職後、どのような満足度で企業人として過ごして成長を続けておられるかによって、機械システム系の教育・訓練が評価されると言える。少子化の時代にあって、機械システム系は、社会からその存在価値を問われ続けている。今後も、機械システム系において人材育成を担っていくために、毎年改善した教育・訓練を提供する継続的改善を図っていく所存である。（機械システム系 入部 久志）



写真12 若年者ものづくり競技大会機械製図部門 金賞／厚生労働大臣賞受賞（2016（平成28）年度）



写真13 大分県学生溶接選手権選手団記念写真（2017（平成29）年度）



写真14 金型グランプリにて金賞を受賞した作品（2015（平成27）年度）

電気・電子システム系（電子技術科）の20年間の歩み

1. はじめに

本校の電気・電子システム系は、1998（平成10）年、開校当初は、電子技術科としてスタートした。基礎をしっかりと身に付け、応用がきく電子技術者を育成することを目標に教育訓練を展開してきた。その後、電子装置にはコンピュータ制御技術を組み込んだシステムが主流となり、2007（平成19）年度からの3系7コース制への移行に伴い、電子技術科から電子システム系となり、電子回路技術・コンピュータ技術・制御技術を柱として、電子回路エンジニアコースとコンピュータ制御エンジニアコースの2コースを設置した。近年では、工場等の生産現場では電気機器や配線設備、自動機械、産業用ロボット等の制御技術が不可欠となり、それらに対応できる電気に関わる技術者を養成するため、系名を電子システム系から電気・電子システム系に変更し、コースを電気エンジニアコースと電子エンジニアコースとした。

2. カリキュラムの変遷

電子技術科では、電気、電子の基礎から通信技術、コンピュータまで幅広く専門分野の学習し、電子分野の産業に適した実践技術者の養成を目指すカリキュラム編成とした。2007（平成19）年度からは電子システム系となって、電子回路エンジニアコースでは主にアナログやデジタルの回路設計から、プリント基板製作、動作解析、評価まで行い、さらにデジタル回路はHDL（ハードウェア記述言語）によって回路設計を行う実習や、PLD（programmable logic device）を利用して設計からシミュレーション、動作検証を行う実習をカリキュラムに取り入れた。コンピュータ制御エンジニアコースでは将来の組み込みソフトウェア技術者を目指し、ハードウェアとソフトウェア両方の知識と技術を兼ね備えた技術者の養成を目指すカリキュラムとして、オペレーティング



写真1 プリント基板加工機

システムやマイコン制御を学ぶ実習、Visual Basicについて学ぶアプリケーションプログラミングの実習をカリキュラムに取り入れた。2013（平成25）年度からは電子システム系から電気・電子システム系に系名を変更し、1年次のカリキュラムに電気設備や電気工事、シーケンス制御などの電気系科目を取り入れ、電気工事士及び技能検定シーケンス制御作業の資格取得を目標としたカリキュラムにした。電気エンジニアコースでは電気機器や制御機器実習等の科目を設けて、電気設計、配電盤・制御盤の設計・製作ができる技術者を養成するカリキュラムにした。電子エンジニアコースではデジタルCAD実習やPLD設計実習等の科目を設けて、電子回路やマイコンを使った機器の設計・製作・動作解析ができる技術者を養成するカリキュラムにした。また、2016（平成28）年10月に安川電機製の産業用双腕ロボットが導入され、電気・電子システム系では産業用ロボット特別教育をカリキュラムに取り入れて実施している。写真1に電子回路製作実習及び卒業研究において基板製作を行う基板加工機を示す。写真2に産業用ロボット特別教育及び卒業研究において使用している双腕ロボットを示す。写真3は建築システム系が卒業研究で製作した模擬家屋に、電気屋内配線の実習を行った様子である。

3. 検定・資格試験の取組

電気・電子システム系で取組をしている検定・資格試験について紹介する。図1に電気・電子システム系が取り組む資格取得スケジュールを示す。1年次に取り組む検定・資格試験は全員が受験している。ここでは、各検定・資格試験の取組について紹介する。



写真2 産業用双腕ロボット

3.1 デジタル技術検定の取組

デジタル技術検定は、公益財団法人国際文化カレッジ主催、文部科学省後援のデジタル技術に関する検定である。情報化社会において、その核となるコンピュータや電化製品、工場の制御システムなどを扱うには幅広く高度な専門知識が必要である。本検定の試験内容は電気や電子回路から情報処理、制御まで広範囲にわたっている。2009（平成21）年度から4級、3級の検定受験に向けての取組をしており、1年次の6月に4級を受験し、11月に3級を受験している。2009（平成21）年度には団体優秀賞に表彰され、2015（平成27）年度には文部科学大臣賞に表彰された（写真4）。また個人が表彰される優秀賞及び優良賞にも各級ごとにそれぞれ表彰を受けている。

3.2 電気工事士試験の取組

一般財団法人電気技術者試験センターが実施している電気工事士試験については、系名を電気・電子システム系に変更した2013（平成25）年度から取組を始めた。電気工事や電気製図、電気設備実習などの授業科目において一般用電気工作物の電気工事や保安に関する必要な知識を学び、実習で技能を身に付けている。その中で第2種電気工事試験の筆記試験及び技能試験への合格を目指して授業時間や放課後のスキルアップ時間を使いながら取組をしている。1年次の10月に筆記試験を受験し、12月に技能試験を受験している。高校までに第2種電気工事士を取得している学生には第1種受験の指導をし、また1年次に第2種電気工事士を取得し2年次に第1種電気工事士試験受験を希望する学生にも指導をしている。

3.3 技能検定の取組

電気エンジニアコースへの変更に伴い電気機器組み立て（シーケンス制御作業）3級への受験指導を行っている。試験内容はベルトコンベアやランプの制御をPLC（シーケンサ）を使いラダープログラムで行うものである。

3.4 CS試験の取組

コンピュータサービス技能評価試験（CS試験）は中央

職業能力開発協会が実施している公的資格の能力評価試験で、その中の表計算部門3級と2級に2006（平成18）年度から受験指導を行っている。3級の合格は単位取得条件とし、2級にも半数以上の合格者を出している。

3.5 ITパスポート試験の取組

2009（平成21）年度以前は第2種情報処理試験に希望者のみ受験していたが、IT初心者向けのこの試験が新設されたことに伴い、ITに関する基礎的な知識を習得するため全員で受験している。

3.6 ドットコムマスター試験の取組

ドットコムマスターはNTTコミュニケーションズが実施するICTスキル認定試験で、2007（平成19）年度から初心者レベルのシングルマスターに取り組んできたが、試験制度の改変やITパスポートを受験指導することなどから2012（平成24）年度で受験を取りやめた。

4. 卒業研究について

卒業研究は2年次の前半の第5、6クォーターにおいて週1コマの時間を使ってテーマについて調査し、学生へのヒアリングを行いながらテーマ及び担当する指導教員を決定している。その後、研究内容について下調べや資料収集を行い、9月末に研究計画書を提出する。本格的に取り組むのは後半の第7、8クォーターとなる。

テーマとして、各種競技大会に向けた内容や実習用教材の製作、マイコン制御や基板製作を行ったものづくりを実施している。1つのテーマに対して1名又は2名の学生が取り組み、卒業研究を通して習得した知識や技術を集大成してヒューマンスキルとテクニカルスキルを高めていく。指導教員1人当たり3～4名の学生を担当して指導に当たっている。

5. 学外の競技大会への取組

2年次に約半年間掛けて卒業研究を行っており、その中で学外の各種競技大会やコンテストへの出場に向けた内容をテーマにして取り組んでいる。ここでは、主な競



写真3 屋内配線実習（2階の配線）

	1年次												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
資格・検定			デジタル技術検定（4級）	CS検定（表計算部門3級・2級）				第2種電気工事士（筆記試験）	デジタル技術検定（3級）	第2種電気工事士（技能試験）	国家技能検定・電気機器組立（シーケンス制御3級）	ITパスポート試験	

図1 資格取得スケジュール

技大会やコンテストへの取組について紹介する。

5.1 ポリテックビジョンロボット競技大会への取組

開校時から、卒業研究のテーマに掲げ、数名の学生が競技大会出場ロボットの製作に取り組んでいる。1999(平成11)年度～2000(平成12)年度は「カンコロジー競技大会ロボット」が全国大会として幕張メッセなどで行われた。その後、九州ブロック大会になり、2001(平成13)年度～2012(平成24)年度は「円盤格納競技ロボット」に競技が変更になった。2005(平成17)年度の九州ブロックポリテックビジョン2006ロボット競技会(写真5)、2006(平成18)年度の九州ブロックポリテックビジョン2007ロボット競技会においては2年連続で優勝をした(写真6)。なお、2013(平成25)年度～現在は「ピンポン球格納競技ロボット」になり、無線通信が必要になるなど、より高度なロボット大会になっている。

5.2 ロボットランサー競技大会への取組

ロボットランサー競技大会は、一般社団法人日本機械学会が主催するロボットグランプリの競技大会であり、エネルギー源とコンピュータを搭載した自律型で槍を装備した槍騎兵(ランサー)ロボットによる競技である。制限時間内にコースラインの左右に設置した複数の標的をどれだけ正確に数多く突くかを競う競技である。開校時から卒業研究のテーマに掲げ、競技大会用ロボットの製作に取り組んでいる。2017(平成29)年度開催の第



写真4 文部科学大臣賞の賞状とメダル(2015(平成27)年度)



写真5 ポリテックビジョン2006ロボット競技会で優勝した「ミニ」

21回ロボットグランプリのスタンダードクラス決勝においては、23チーム中11位の成績を収めることができた(写真7)。

5.3 ROBO-ONEへの取組

二足歩行ロボットによる格闘競技大会「ROBO-ONE」は、ものづくり技術の向上と二足歩行ロボットの普及を目指している一般社団法人二足歩行ロボット協会が主催している大会である。ロボット競技会「ROBO-ONE」は2002(平成14)年2月に日本科学未来館において初めて開催され、以降半年に一回の割合で開催されてきた大会である。電子技術科では2004(平成16)年度と2005(平成17)年度の卒業研究において二足歩行ロボットの製作についてテーマに掲げ、競技大会用機体の製作に取り組んだ。外装をパンダのぬいぐるみにして倒立を行い競技会会場を大いに湧かせた(写真8)。

5.4 LSIデザインコンテストへの取組

LSIデザインコンテストは当初、琉球大学工学部の授業の一環として実施されており、LSIデザインコンテストin沖縄は、1998(平成10)年から毎年1回開催されている。HDL(ハードウェア記述言語)を用いてLSIの回路設計を行うコンテストである。コンテストには国内外の高専・大学・大学院から参加しており、それぞれのレベル別に評価がされる。毎年10月頃に発表される課題に従ってオリジナリティのある回路を設計して1月末



写真6 ポリテックビジョン2007ロボット競技会で優勝した「OITロボッツ」



写真7 第21回ロボットグランプリ2018での競技の様子

頃までにエントリーをする。1次審査を通過すると沖縄で行われる最終審査を兼ねた発表会に招待される。2000(平成12)年度から2012(平成24)年度まで毎年卒業研究のテーマに掲げ、コンテストの課題に取り組んできており、計7回招待を受けた。写真9は2004(平成16)年度に「VHDLによるデジタルFMレシーバ(復調回路)の設計」の卒業研究テーマで取り組み、動作検証を行った作品である。

6. 地域交流への取組

2013(平成25)年度から2年間、中津商工会議所青年部が主催する地域連携事業「中津駅前ライトアップ事業」の一環として「自然エネルギーを活用したクリスマスイルミネーション」の製作に取り組んだ。卒業研究において太陽電池で発生した電力を二次電池に蓄え、その電力を使って夜間にイルミネーションを点灯させるシステムを製作し、12月から1月にかけて中津駅前に設置した(写真10)。

また、2017(平成29)年度には、中津商工会議所青年部が主催するクリスマスイベント「第8回LOVEファンタジア中津2017」に設置するイルミネーションを電気・電子システム系2年生が製作を行った。使用済みペットボトル約230本、LED1800個を、高さ約180cmの四角錐状に飾り付けツリーに仕上げた。また大分県のマスコットキャラクターである「めじろん」をカラーLEDで縁取りしてデザインし、校名が入ったプレートはマイコンを使って制御し、表示に工夫をした。製作した作品は中津駅南口ミニ洞門前に設置した(写真11)。この結果、コンテストにおいて本

作品が最優秀に選ばれた。

7. 就職状況

開校当初はバブル崩壊後の就職氷河期真っ只中であり、2005(平成17)年頃までは希望する企業になかなか入れず、電子知識が必要ない製造現場に就職せざるを得ない状況もあった。その後、徐々に景気が良くなりかけたとき、2008(平成20)年のリーマンショックが起これ、2009(平成21)年には最悪の景気に突入り求人激減した。そういう状況でも、何とかほぼ100%の就職率を達成することができた。2011(平成23)年の東日本大震災後は景気が徐々に回復し、現在では空前の売り手市場になり、開校当初には考えられなかった大手企業にも就職することができるようになってきている。

8. おわりに

1998(平成10)年に開校して20年が経過する中で、就職難の時期もあり、またコース制への移行に伴う新しいカリキュラムの取り入れの実施など行いながら20周年の節目を迎えることができた。教育訓練の実施に当たっては、非常勤講師の先生方にもご尽力をいただき、また、インターンシップや工場見学、特別講義などにおいて地元企業の皆様を始め、多くの関係者の皆様の多大なご支援を賜り、感謝の意を表したい。今後も社会において求められる人材の育成に向けて努めてまいりたい所存である。

(電気・電子システム系 小野 陽二)



写真8 製作した二足歩行ロボット



写真10 製作し設置したクリスマスイルミネーション

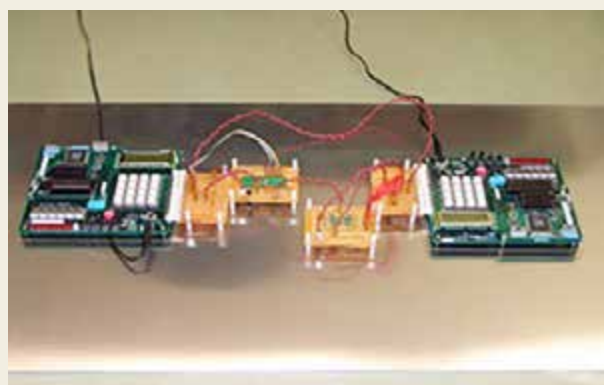


写真9 設計した回路を組み込んだFMレシーバ



写真11 製作したイルミネーション(ツリー、めじろん)

建築システム系（住居環境科）の20年間の歩み

1. はじめに

大分県は全産業に占める建設業従事者の割合が全国平均に比べて高く、本校に住居環境科という建築系の学科が設置されたのもそうした地域的な事情、特性を受けてのことであった。

また、県北地域は大分市から約80km、隣接する北九州市から約50kmの距離にあり、建築関係の人材育成機関が少ない状況があった。

住居環境科は地域の建設技術者の人材育成を掲げ、他の設置科と同様に1998（平成10）年の開校時、20名定員でスタートし、その後、製造業の好況期を迎えていた2007（平成19）年度の3系7コース制の導入により、建築システム系として定員を10名に変更することとなった。2017（平成29）年には建設業の施工管理者技術者の人手不足に鑑み、定員を15名に変更している。

住居環境科の紆余曲折の道りを振り返り、20年間の歩みをここに辿ってみる。

2. カリキュラムの変遷

開校時からのカリキュラムの流れは基本的に座学となる講義を先行させ、その後、実験、実習で理解を深めていくという構成であった（図1）。しかしながら、2年間の専門課程の中で複数の科目を同時平行的に行なわなければならない部分があることや、1年次の終わりには

就職活動の準備も始まることなどから、2年間の初年度をどのように構成するかは当初からの課題であった。

2.1 ものづくり教育の実践

2007（平成19）年度に工科短大が3系7コース制に再編される前年の2006（平成18）年度には本校の特徴である、ものづくり教育を基軸とした科目をカリキュラムの中に盛り込んだ。内容的には2年間の専門課程の教育訓練の中に3つのステップと称して、企画・設計から製作・施工、完成後のプレゼンテーションまでの一連の流れを、題材を変えながら3回繰り返すことにより身に付けていくことを計画した。具体的には、1年次の前半の実習に「ベンチの制作」（写真1）を、後半からは「住宅模型の制作」、「住宅模擬家屋の製作」を行うこととした。この流れは2010（平成22）年度までの5年間踏襲されている。

その頃のトピックスを一つ紹介する。2006（平成18）年度の集中実習（期間は10月2日（月）から6日（金）までの5日間）において「箱のデザイン製作」を行った。その際、8名の学生が製作した収納箱を、大分県北部流域林業活性化センター主催の「木工デザインコンクール」に出品することとなった。審査は一次審査の写真選考、二次審査の実物を会場に搬入しての審査を経て、応募総数が百点を超える中、2名の学生が入賞し、それぞれ奨励賞と優秀賞を受賞している。

2.2 コース制への展開

2007（平成19）年度の3系7コース制の導入により、2年次にプランナーコースと施工管理エンジニアコースに分かれ、それぞれコース別選択科目を6科目14単位（2010（平成22）年度までは16単位）ずつ立て、以降は現在に至るまでこの流れが反映されている。



図1 住居環境科のカリキュラム



写真1 ベンチ制作風景（2010（平成22）年度）

2009（平成21）年度から建築士法の改正に伴い、建築士試験の受験資格要件が変更された。これに併せ、科目や開講時期の見直し、調整を図っている。

また、2014（平成26）年度からそれまで最初に木造、次にRC造の順で進めていた建築施工実習の順番を入れ替え、RC造を扱う建築施工実習を先にすることとした。これは、総合建設業や専門工事業などの施工管理分野の求人が増加している状況の中で、住居環境科の学生が住宅関係会社に関心が向かいがち傾向があり、実習内容を建築現場の工事内容や流れを模擬体験できるようなものに編成し直すことで建築工事に興味をもってもらい、ひいては就職先として施工管理分野に目を向けてもらうことを意図したものである（写真2、3）。

3. 検定・資格試験の取組

2004（平成16）年度から、1年次に中央職業能力開発協会認定のコンピュータサービス技能審査表計算部門と、ワープロ部門の3級と2級を全員に受験させている。2013（平成25）年度からは2級のみを受験するようにしたが、カリキュラムやスキルアップタイムに受験対策の演習を組み込み、現在まで継続して受験している。年度により違いがあるが概ね7～8割の合格率となっている。

建築CAD分野では2001（平成13）年度から中央職業能力開発協会のCADトレース技能評価を2015（平成27）年度まで継続して受験している。合格率は年度によって

違いはあるが初級で9割から10割の、中級でほぼ8割の合格率（全国平均は5割以下）を維持していた。

2016（平成28）年度からは、CADの検定試験をより難易度の高い全国建築CAD連盟認定の建築CAD検定2級に変え、1年次に受験し、2年間の実績では2016（平成28）年度8割、2017（平成29）年度9割を超える合格率を挙げている。

2年次には建築施工管理エンジニアコースの学生は2級建築施工管理技士学科試験を受験している。合格率は8割程である。

また、プランナーコースではカリキュラムに宅地建物取引士資格の受験対策の科目を立て希望者に受験させている。

その他の資格試験として、スキルアップタイムの時間等を利用し、住環境福祉コーディネーター2級の受験対策演習を行い、2016（平成28）年度から1年生全員が受験している。

4. 校外見学実習について

建築を学ぶに当たっては、実際の建築や建築生産現場を直に見ることで意識や理解につながる。

建築システム系では当初年2回程度行っていた校外での見学会を拡充し、現在では大分県建築士会の中津支部や宇佐支部とのつながり、また教育委員会や企業の協力を得て、年6、7回程度の校外見学実習を行っている。見学する物件内容としては住宅の現場、竣工後の住宅、



写真2 RC造柱脚部分の組み立て（建築施工実習）



写真4 四日市別院修理工事の見学の様子（2015（平成27）年度）



写真3 木造住宅の施工実習（木造建築施工実習）



写真5 黒崎ひびしんホールの見学（北九州市、2010（平成22）年度）

S造やRC造建物の現場、古建築の修理工事現場、そして最近の公共的な建築等になる(写真4、5)。

見学時には現物を目の当たりにしながら関係者から説明を受けることで、学生にとっては建築のしくみや専門的な用語を比定しながら理解することができ、建築により深い関心を持つ機会になっている。

5. 地域との交流事業

2008(平成20)年度から2012(平成24)年度にかけて地元の中津東高校の土木科の生徒を工科短大の夏期休暇期間等に受け入れ、5日間程度の集中実習で木造の基本加工や箱の製作実習、建築CAD基本操作の手ほどきを行っている(写真6)。この際、実習指導を受けて、後に工科短大に進学した生徒もいる。

また、ボランティア活動として建築システム系として関わっているものとしては、地元の職人フェスティバルの際に建築士会中津支部と協働で折り紙建築教室を開催し、子どもたちに教えている(写真7)。

中津市で毎年8月16日に開催される「寺町とうろう祭り」は住居環境科が2004(平成16)年時点から関わっていた関係で3系協力の取組となった後も、建築系の学生が企画分野で担当を務めている(写真8)。

さらに、昂華祭では毎年、収納棚や本棚などを製作する木工教室を行い、参加者から好評を得ている(写真9)。

こうしたイベントは学生たちにとって地域の方々と触れ合う貴重な体験の場となっている。

6. 卒業研究について

卒業研究は2年次の第5、6クォーターの週1コマの時間を使い、学生のヒアリングを通し、テーマを選定し、担当する指導教員を決めている。事前準備を行い、9月に研究計画書を提出した後、本格的に取り組んでいる。

テーマについては、富貴寺や薦神社、四日市別院等の地元大分県内の古建築の模型製作が続いた時期があり、オープンキャンパス時に卒業研究を紹介するコーナーで展示を行っている(写真10)。

近年は、中津市や宇佐市教育委員会の協力を得て空家改修(写真11)、空家の耐震診断、フィールドミュージアム構想に基づく宇佐海軍航空隊の遺構整備計画等のフィールドワークに携わっている(写真14)。一方、制作に関わるものとしては組み立て型の茶室(2004(平成16)年度)、屋外休憩所(2014(平成26)年度)や、学生エントランスロビーの休憩コーナー『COTORI』(2015(平成27)～2017(平成29)年度)(写真13)、実習用2階建家屋(2015(平成27)、2016(平成28)年度)(写真12)や木造カーポートの制作(2017(平成29)年度)などがある。

制作等のものづくりに関する卒業研究は、成果物が形となって残り、校内において見学、利用してもらえること、また、達成感が得やすいという観点から卒研のテーマとして志向され継続されている。また、フィールドワークは対象となるエリアを現地調査することで、社会との繋がりや地域の方々とのコミュニケーションを育む機会となっている。



写真6 地元の高校生への実習指導(2009(平成21)年度)



写真7 折り紙建築教室(職人フェスティバル、2017(平成29)年7月)



写真8 寺町とうろう祭りの展示企画準備の様子



写真9 昂華祭木工教室(2016(平成28)年11月)

7. 就職状況

開校から10年以降の求人の状況を見ると、求人社数は2008（平成20）年度から2011（平成23）年度までは20社程度であったが2012（平成24）年度から求人数が増え40社代に、2015（平成27）年度からは年60社程度の企業から求人が得られるようになった。

ここ4年間の職種の内訳としては、地元大分県又は福岡県の総合建設業や、専門工事業に5～6割、住宅関係の会社に2～3割、その他、住設関係や建築設備、積算関係の職種に2割程度となっている。

2011（平成23）、2012（平成24）年度頃は住宅関係の会社への内訳が3割ほどで一番多く、ゼネコンは2割程度であったが、近年はゼネコンが5割、住宅関係が3割、住設、建築設備、その他に2割といった状況である。また、九州職業能力開発大学の応用課程への進学は隔年で1人くらいの割合である。

住居環境科の学生は地元志向が高く、過去5年間の内訳では県内が7割、県外が3割となっている。工科短大の立地上、福岡県等の近県出身の学生も1、2割程度い

るが、出身地の地元企業に就職するが多い。

8. おわりに

1998（平成10）年に船出した住居環境科も、就職難の時期や再編等で難航を余儀なくされた時期もあったが、20周年の節目を迎えることができた。

この間、地元の大分県建築士会中津支部所属の方々や、中津市役所の建築審査課からも非常勤講師を務めていただき、教育訓練にご貢献いただいた。

また、地元企業の皆様、中津市役所、宇佐市教育委員会の関係部署の皆様、そして地元関係者、卒業生と保護者の皆様には多大なご支援をいただいた。ここに記して、改めて感謝の意を表したい。

来たるべき社会を見据えながら現状に甘んじることなく、企業の皆様や地元、新たな試みにも挑戦し、着実に一步一步前進していきたいと考える。地域に密着し、共に発展できるように、建築システム系の歩みをこれからも継続していく所存である。

（建築システム系 松尾 浩助）



写真10 オープンキャンパス時の古建築の模型展示



写真11 空家の改修計画（2013（平成25）年度卒業研究）



写真12 実習用2階建木造住宅の制作



写真13 学生エントランスロビーの休憩所「COTORI」の設置



写真14 宇佐海軍航空隊跡整備事業における実測調査風景



写真15 住居環境科同窓会時の記念撮影（2013（平成25）年7月）

キャリア教育の主な取組

1. はじめに

本校では全科共通科目の総合訓練のカリキュラムに、2004（平成16）年度から「OIT導入プロジェクト」、「ヒューマンスキル演習」を、2005（平成17）年度から「インターンシップ」を、2006（平成18）年度から「キャリアデザイン入門」を導入して専門教育と合わせ全校的な取り組みを始めた。各科目を1年次のカリキュラムに取り入れ入学直後からキャリア教育に取り組み、職業観や就業意識の形成と向上を図っている。

2. OIT導入プロジェクト

入学式翌日からのOIT導入プロジェクトでは、本校の概要を理解し、各イベントを通して親睦を図りながら、ものづくりの基本姿勢を学んでいる。オリエンテーションやものづくり体験、海岸清掃活動、球技大会などを実施している。

2.1 ものづくり実践プログラム

2004（平成16）～2006（平成18）年度は「からくり人形ロボットの製作」（写真1）、2007（平成19）年度は「た



写真1 からくり人形ロボットの製作

まご落としコンテスト」を3系合同で実施した。2008（平成20）年度からは各系プログラムを実施している。

2.2 好きなモノマップコミュニケーション

入学後、なるべく早く一人でも多くの語りあえる仲間を得ることにより、今後の工科短大での学業を円滑に進められるように2010（平成22）年度から3系の1年生合同で実施している。各自が好きなモノを紙にいくつでも書き出し、マップ形式でまとめ、2人1組になってマップを交換し、そのマップの内容に関して1回7分間会話を始める。話す相手をローテーションさせて実施することで入学して間もない時であるが、互いの好きなモノを話題に会話ができ、すぐに打ち解けている様子を感じられる（写真2）。

2.3 環境教育ガイダンス及び海岸清掃活動

本校は中津市大新田海岸の近くに位置している。環境教育ガイダンスでは、NPO法人水辺に遊ぶ会の協力をいただいて、中津干潟の重要性と海岸清掃の意義について学び、環境保全の重要性の認識を高めている（写真3）。ガイダンス後は実際に大新田海岸に行き、干潟周辺の清掃活動や沿岸の松林の保全活動を行っている（写真4）。



写真3 環境教育ガイダンス



写真2 好きなモノマップコミュニケーション



写真4 海岸清掃活動（ビーチクリーン）

この活動は2006（平成18）年度から毎年1回実施している。2018（平成30）年度は1年生と2年生全員が参加して実施をした。

3. キャリアデザイン演習

第1クォーターの水曜の3限と4限にキャリアデザイン入門を実施している。外部講師による特別講義やグループワーク、工場見学等を行いながら自分のキャリア設計に必要な基礎知識を習得し、自身の将来像を描いている。

3.1 外部講師による特別講義

入学して間もない第1クォーターでは、社会が求める人材や現在の労働状況の実態について講義をいただいている。社会人としての基礎力、企業と学生が持つ意識のギャップ、働き方について、講義やグループディスカッションにより学んでいる（写真5）。

3.2 グループワーク

自分のキャリアを自分で考えるために2016（平成28）年度からワークブックを使っでのグループワークを取り入れて実施している。グループワークは3系の1年生が5人～6人のグループに分かれて、まず各自で考えるシートと呼ばれるシートに記入した後、グループワークを実施する。グループワークでは記入したシートの内容を、持ち時間の中で話し、話を聞いた他の人はその話を聞いて思ったことや感じたことを、話した人にフィードバック



写真5 キャリアデザイン特別講義

クして伝える（写真6）。

4. 企業経営者による特別授業

第2クォーターから第4クォーターのヒューマンスキル演習では、年数回、企業の経営者の方をお招きして企業が求める人材や必要なスキル、企業経営や人材育成などの特別講義を実施している（写真7）。

5. インターンシップ

2005（平成17）年度からカリキュラムの中に位置付け、1年次の9月末に5日間のインターンシップを実施している。インターンシップ参加の前には、心構えや社会人としてのマナー等に関する事前研修を、外部講師を招いて実施し、インターンシップ後は受入先企業様を招き、報告会を開催している（写真8）。

6. おわりに

本校で実施している事業の中から、主に1年次に実施している「OIT導入プロジェクト」「キャリアデザイン入門」「特別講義」「インターンシップ」について述べた。これらの事業は校内設置の専門委員会である「キャリア教育企画委員会」にて企画しており、今後も学生のキャリア支援へ向けて取組を実施していく。

（電気・電子システム系 小野 陽二）



写真7 企業経営者による特別講義



写真6 グループワーク



写真8 インターンシップ報告会

就職対策実践・業界研究セミナー

1. はじめに

本校では就職支援の一環として、1年生を対象に就職対策実践セミナーや業界研究セミナー、就職力バランス診断などを行っている。

2. 就職対策実践セミナー

就職対策実践セミナーは、例年11月頃から1月頃の間、産業界の動向や就職対策に造詣の深い外部講師をお招きし、就職活動の心構えや履歴書作成、面接対応等の実践セミナーを開講している。2017(平成29)年度は、講師にキャリアカウンセラー・人材育成トレーナーの大多正人氏をお迎えして、第1回は就職活動の基本と心構え、新卒の就職状況、企業が求める人材、企業研究の進め方について解説していただき、第2回はより実践的に履歴書作成(写真1)やビジネスマナー、面接対策(写真2)について模擬面接などを交えながら、就職活動の実際について解説していただいた。学生は就職対策実践セミナーで心構えや知識を身につけた上で次項の業界研究セミナーに臨む。



写真1 履歴書の作成



写真2 面接対策・ビジネスマナー

3. 業界研究セミナー

業界研究セミナーは、各企業の方に本校においていただき、写真3のように学生が各企業のブースを回り、各企業の方から、事業内容や求める人材像等を直接伺うことで、業界に対する学生の理解を深めるものである。

2017(平成29)年度は、写真4のように体育館を会場として開催した。各企業のブースには長机1卓とイス、バックパネル1枚を用意し、バックパネルには企業名の表示の他にポスターの掲示や模造紙を貼ってプロジェクターの映像を投影することもできるようにしている。電源コンセントは各企業が利用できるように配線してあるが、近年は参加企業が増え、使用するプロジェクターの数も増えてきており、電源容量が課題となっている。参加企業数は2010(平成22)年度は1回のみ行い33社であったが、2017(平成29)年度には2回行い、1回目54社・2回目59社となっている。

4. おわりに

主に就職対策実践セミナーと業界研究セミナーについて述べた。キャリア教育や他の就職支援と相まって、学生の就職率は毎年ほぼ100%となっている。

(機械システム系 満永 浩一)



写真3 企業のブース



写真4 業界研究セミナー全景

大分県QCサークル活動支援企業会

1. 発足の経緯・背景

大分県は、経済産業省の補助事業として、2008（平成20）年から3か年計画で企業の人材育成事業に取り組み、品質管理セミナーやQCサークル研修会、QCサークル成果発表会を開催した。2011（平成23）年度からは県が単独事業としてこの活動を引き継ぎ、企業が連携して人材育成に取り組む体制づくりを進め、その結果、この取組に賛同する企業55社が参加して、2011（平成23）年11月19日に「大分県QCサークル活動支援企業会」が発足した。

2. QC企業会とは

QC企業会とは、企業の規模・業種を問わず、会員企業の人材育成を図ることを目的としており、各企業における小集団活動の連携・相互交流を図り、QCサークル発表会などによる啓発の場づくりを行うとともに、積極

的に学ぶ機会を生み出している。初代会長は柘木順一氏（九州富士機工株式会社（現・株式会社TF-METAL九州））で、QC企業会の黎明期を牽引していただき、2015（平成27）年からは遠入勝好氏（大分精密工業株式会社）が現会長に就任し、QC企業会の更なる発展にご尽力されている。事務局は本校の企業連携・交流室が担当し、QC企業会の活動をサポートしている。2018（平成30）年5月時点の会員企業数は67社となっている。

3. 主な活動内容

QC企業会の主な活動は、定期総会、QCサークル活動成果発表会の開催、人財育成講演会、各種セミナー、勉強会の実施、工場見学交流会、会員相互の情報交換・交流会の実施、情報収集及び提供などとなっている。



写真1 2017（平成29）年度定期総会



写真4 QCサークルセミナー応用編



写真2（初代会長）柘木順一氏



写真2（現会長）遠入勝好氏



写真5 TWIセミナー



写真3 QCサークル活動セミナー入門編



写真6 IEセミナー

3.1 QCサークル活動成果発表会

年間2回程度の頻度で、会員企業様の改善活動の成果を発表いただき、会員企業参加者相互の研鑽の場としている。毎回4~5社の企業から選出された代表サークルによる発表が行われている。

3.2 各種セミナー

QCサークル活動セミナー入門編・応用編・TWIセミナー・IEセミナー等を行っており、一般財団法人日本科学技術連盟や、一般財団法人日本規格協会で講師登録をしているQC企業会のアドバイザー等が講師を務めている。

3.3 人材育成講演会

年間2回の頻度で、QC企業会のアドバイザー企業や協力・支援団体の協力をいただき、その年々の企業ニーズにマッチした講師を招聘して講演会を実施している。



写真7 人材育成講演会1



写真8 人材育成講演会2



写真9 未然防止型QCストーリーセミナー

3.4 企業ニーズ対応型セミナー

会員企業に対し、セミナーの内容ニーズ調査を行い、調査結果に基づき、要望の高かったテーマについて、QC企業会のアドバイザーによる公開セミナーを実施している。

3.5 異業種交流会

会員企業の協力をいただき、工場見学会や見学先企業の改善活動の事例紹介、見学者との意見交換を行い、相互に学び合う場として実施している。

4. 広報活動（企業会ニュースの発行）

広報活動として、QC企業会の活動を広く知っていただくため、年間活動のPRや諸活動の報告を主体に、企業会ニュースを発行している。

(企業連携・交流室 興梠はづき)



写真10 QCサークル活動成果発表会



写真11 株式会社九州イチタン工場見学会



写真12 企業会ニュース

技能向上セミナー

1. はじめに

本校では、1999（平成11）年度から“地域との交流を深め、地域の皆様のお役に立てる短期大学校を目指す”という趣旨から、技能向上セミナーを開講している。

本セミナーは、職業能力開発促進法における「高度職業訓練（労働者に対し、職業に必要な高度の技能及びこれに関する知識を習得させるための職業訓練をいう。）（法第15条の7第1項第2号）」のうち、短期間の訓練課程となっている。

講義は、本校の機械システム系、電気・電子システム系及び建築システム系の講師陣が担当している。

2. 2017（平成29）年度実施セミナーの紹介（19講座23コース）

※講師の職名については当時のもの

2.1 機械システム系実施セミナー（10講座14コース）

① 2次元CAD入門（AutoCAD）

教授 十河 英二

② プラスチック射出成形技術（初級編）

教授 遠藤 宏光

③ 普通旋盤技術

准教授 川崎 信人

④ 品質管理セミナー（QC検定3級レベル対応）：2コース

教授 入部 久志

⑤ 品質管理セミナー（QC検定2級レベル対応）：2コース

教授 入部 久志

⑥ 機械技術者のための機械保全入門（2級対応）

准教授 安部 洋行

⑦ 電気空気圧制御入門

教授 満永 浩一

⑧ シーケンス制御入門（PLC使用）：2コース

教授 佐藤 安正

⑨ JISによる機械製図

教授 栗林 仁

⑩ 産業用ロボット（教示）特別教育：2コース

～多関節、円筒座標ロボット使用～

教授 満永 浩一

講師 渡邊 亮

2.2 受講風景（機械システム系実施セミナー）



写真1 品質管理セミナー（QC検定3級レベル対応）



写真2 電気空気圧制御入門



写真3 産業用ロボット（教示）特別教育 ～多関節・円筒座標ロボット使用～

2.3 電気・電子システム系実施セミナー（5講座5コース）

① 産業用ロボット（教示）特別教育

～双腕ロボット使用～

准教授 新名 恒

② センサ・モータ制御入門（電子回路製作の基礎）

教授 松永 晃

③ EXCEL中級

講師 兒玉 章宏

④ 実験で学ぶ電子回路

教授 小野 陽二

⑤第二種電気工事士技能試験（受験対策編）

教授 小野 哲宏

2.4 受講風景（電気・電子システム系実施セミナー）



写真4 実験で学ぶ電子回路



写真5 第二種電気工事士技能試験（受験対策編）

2.5 建築システム系実施セミナー（4講座4コース）

①初級建築CAD講座（Jw_cad使用）

教授 松尾 浩助

②住宅の省エネルギー基準入門

教授 吉田 和彦

③建築大工2級技能士講習

教授 野口 道雄

④住宅給排水設備図の作図講座（Jw_cad使用）

教授 松尾 浩助

2.6 受講風景（建築システム系実施セミナー）



写真6 初級建築CAD講座（Jw_cad使用）



写真7 住宅の省エネルギー基準入門

3.【講座別】技能向上セミナー申込者数一覧

1999（平成11）年度から2017（平成29）年度までの実績（資料編に記載）

4. おわりに

技能向上セミナーは、1999（平成11）年度の開講以来、大分県内はもとより福岡県北九州地域からも受講申し込みがあり、延べ2,700名を超える個人及び事業所の方々が受講している（2017（平成29）年度末時点）。

毎回、セミナーの受講者には、終了時に「受講者アンケート」に答えてもらっており、その一例を紹介する。

【アンケート回答の一例】原文のまま

・今回は基礎的な内容で理解しやすかったので、次はもう少しレベルアップした講義を受講したいと思った。教材も学ぶために必要最低限のものが揃えられており、快適に学習することができたのがとても良かった。（2016（平成28）年度「電気空気圧制御入門」受講）

・現在、弊社で開発中の製品において、センサ技術を使用することを予定しております。初歩的な内容でしたが、今回ご教授いただいた内容を足がかりに、スキルを上げ、直近の業務に活かしたいと考えております。（2015（平成27）年度「センサ・モータ制御入門（電子回路製作の基礎）」受講）

・当初、実寸図面作成や理解に困惑気味ではあったが、何度も繰り返し図面を見ていたら、理解できるようになり、完成までこぎ着けた。この内容は、傾斜角度や組み立てなどを行う弊社でも同様のことがあるので、たいへんに勉強になった。今後、活かしていきたいと感じた。（2016（平成28）年度「建築大工1・2級技能士講習」受講）

本校としては、このような貴重なご意見・ご要望を踏まえ、これからもより一層、職業に必要な技能及び知識の向上、資格取得等に役立つセミナーを展開していきたいと考えている。

（企業連携・交流室 岡崎 英美）

金型保全技術者育成講座

1. はじめに

本講座は2010（平成22）年にスタートした産学連携事業であり、変遷を重ねながら現在に至っている。

本講座の実施に当たっては、当初からダイハツ九州株式会社と明星金属株式会社の多大なご協力をいただいている。初年度は「プレス金型保全技術者育成基礎講座」として開講し、3年目には生産に使用している金型の修理に挑む「実践編」を開講、同時に大阪府の協力が得られたことで受講企業を広域化することができた。2014（平成26）年には、新たに株式会社大阪精密の協力を得て「プラスチック射出成形金型保全技術者育成講座」を開講することで、金型分野の領域拡大がかなえられた。現在も大分県工業振興課との連携事業として、大分県自動車関連企業会の会員を中心に講座を実施しており、金型関連企業の方々には、金型人材育成の一助として活用いただいている。

ここでは、この事業発端の背景と現在の講座内容について紹介する。

2. 背景

2004（平成16）年、中津市でダイハツ九州株式会社が、自動車の生産を開始した。その後、生産台数の拡大に伴い、関連部品メーカーの現地化が進み、周辺企業における金型保有数の増加が見込まれていた。そこで懸念されたのが金型技術者の育成である。個々のメーカーでは、金型技術者が少なく、現地工場での人材育成が不十分になることが予測された。大分県としては、金型技術者育成を重要事業として位置付け、産学官（自動車メーカー、金型メーカー、本校、産業集積推進室〈現在は工業振興課〉）が連携した

取組が実現した。中でも重点項目として、金型維持管理における重要な仕事である金型保全業務に着目し、金型保全技術者育成事業がスタートした。

3. 金型保全技術者育成講座の歩み

講座の歩みについて図1に示す。

4. 金型保全技術者育成講座の内容

金型保全技術者育成講座は、3つの講座で構成されている。大分県の事業として「プレス金型保全技術者育成講座」、「プラスチック射出成形金型保全技術者育成講座」。もう1つは、大分県自動車関連企業会が開催する「金型補修技能講習（アーク溶接編、TIG溶接編）」である。以下、プレス金型保全技術者育成講座とプラスチック射出成形金型保全技術者育成講座の内容を紹介する。講座は、開講式から始まり、講座の終わりには成果報告会、修了式が行われる（写真1、2）。



写真1 2017（平成29）年度 成果報告会



写真2 2017（平成29）年度 金型保全技術者育成講座修了式

H22年	・プレス金型保全基礎(ダイハツ九州)で37日実施、H22:8社10名 H23:10社10名)
H23年	・保全のセラー研修・金型メンテナンスの育成法・突発保全技術の向上
H24年	・プレス金型保全基礎(サファイヤ)で8日×5日=15日実施、6社7名
	・保全のセラー研修・金型メンテナンスの育成法・突発保全技術の向上
H25年	・プレス金型保全基礎(サファイヤ)で8日×5日=15日実施、11社15名
	・大阪府の協力による広域化
	・不具合解析研修・保全技術の共有化・QC手法による保全管理
H26年	・プレス金型保全基礎(サファイヤ)で8日×5日=15日実施、6社10名
	・H25と同様・大阪府の協力による広域化
	・プラスチック射出成形金型保全基礎(大阪)で5日実施、6社9名
	・射出成形保全への展開・精密調整の技能・仕上げ、すり合わせの技能
H27年	・プレス金型保全基礎(ダイハツ九州)で10日実施、10社11名
	・保全スキル向上・金型メンテナンスの改良・材料・設備の知識向上
	・プラスチック射出成形金型保全基礎(大阪)で5日実施、9社13名
	・精密調整の技能・仕上げ、すり合わせの技能・事例・見る保全ポイント
H28年	・プレス金型保全基礎(ダイハツ九州)で10日実施、6社10名
	・プラスチック射出成形金型保全基礎(大阪)で5日実施、4社5名
H29年	・プレス金型保全基礎(ダイハツ九州)で10日実施、4社6名
	・プラスチック射出成形金型保全基礎(大阪)で5日実施、7社7名

図1 金型保全技術者育成講座の歩み

4.1 プレス金型保全技術者育成講座

この講座は、10日間で実施される。場所は、ダイハツ九州株式会社 プレス課の金型保全場をお借りし、同プレス課の金型保全担当者を指導者として実施している。

前半（5日間）は、安全教育から始まり、プレス機械の構造や各プレス工程での金型構造を学ぶことで知識を高め、実際に練習金型を使用して工程毎にトライアウト（試し打ち）を行いながら、パネル（金型で成形された製品）のチェック方法を学んでいく（写真3）。



写真3 トライアウトによるパネルチェックの様子

後半（5日間）は、2班に分かれて学ぶこととなる。1班は、金型メンテナンスをチェックシートに従って実施し、金型維持管理における重要な点検を見落としなく行えるようにする「メンテ班」（写真4）。もう1班は、金型の変形や破損箇所を肉盛り溶接や手仕上げによって補修、補正することにより、金型生産の突発停止に対応できるようにする「補正班」である。後半でどちらを勉強するかは、受講各社の希望に合わせて班分けを行う。

また、受講後には、学んだことを活かし、自社へ展開できるものを考え、発表してもらおう。



写真4 金型メンテナンス実習の様子

4.2 プラスチック射出成形金型保全技術者育成講座

この講座は、5日間という短い期間で精密TIG溶接を利用した補修箇所への肉盛り溶接実習（写真5）と、手仕上げ実習（写真6）を行うものである。指導者として、プラスチック射出成形金型の保全を仕事にされている株式会社大阪精密の方々を招き、本校の機械加工実習場にて実施している。練習用プレートで精密肉盛り溶接が行えるようになるまで、何度も繰り返し練習する。肉盛り用の材料線径

は、細ければ細いほど難度が上がる。線径は0.6mmからスタートし、期間中に0.2mmまで使用できるようになる人もいる。

最後は、本校にある実際の金型を肉盛り修正し、射出成形品にて補正箇所のできばえを確認する。

また、講習の終わりには、株式会社大阪精密での金型保全事例を勉強し、何を原因に金型の不具合が起こるのかを学ぶ。ここで、不具合の多くが、金型を大切にすることを怠ったことが原因であることが理解できる。



写真5 精密TIG溶接機を使用した肉盛りの様子



写真6 手仕上げ実習の様子

5. おわりに

金型保全技術者育成講座がスタートした頃は、金型保全を社内で手探りに行う方々への救いの手になっていた（補正方法の確認と相談先の確保）。しかし、近年では、金型保全の担当予定者の受講も多く、この講座を金型技術者育成の登竜門とする利用ニーズを感じている。金型保全担当者が少ない企業での社内育成が困難な現状に対し、大分県としてこの金型保全技術者育成講座を続けて行く意味は非常に大きいと考える。

なお、2018（平成30）年度のプレス金型保全技術者育成講座は、実習の班分けをせず実施することを試みる。メンテナンスと金型補修の基礎を全て身に付ける内容となるよう、充実した実習を用意している。

今後も金型関連企業の皆様の人材育成へ役立つ講座を目指し、積極的に展開して行きたい。この講座により、金型を大切に意識を身に付けた人材を増やすことが、大分県内企業の発展に繋がることを信じてやまない。

（機械システム系 遠藤 宏光）

現場対応力強化事業(低コスト生産設備改良(LCI)講座)

1. はじめに

大分県では、北部九州に集積が進む自動車関連産業の一層の振興を図るため、現場改善指導や技術力向上、人材育成、新規参入受注獲得支援などを目的に2013(平成25)年度から3カ年にわたり、「低コスト生産設備改良(LCI)講座」を本校で開催した。

この事業は、官民連携事業として、大分県商工労働部産業集積推進室・大分県立工科短期大学校と日産自動車株式会社日産ラーニングセンターものづくり大学(以下「日産短大」という。)とが連携し、地場企業の技術者の技術力向上を人材育成の観点から支援することで、地場企業の生産性向上と競争力強化を図ることを目的に実施したものである。(図1)



図1 官民連携による低コスト設備改良(LCI)講座

2. 低コスト生産設備改良(LCI)とは

低コスト生産設備改良”Low Cost Improvement”(以下「LCI」という。)は、1993(平成5)年から日産自動車株式会社が製造部門を中心に生産性向上を達成するため、テクニカル改善に役立つ実践的な先進技術・技能を駆使し、生産現場での改善を実践しうる人材の育成を目的として、生産現場の指導員クラスの社員に実践的な技術教育を行う研修である。同社の現場改善で実施されてきたポカヨケ等に代表されるような、改善より1ランク高いステップのテクニカル改善を、自分たちの手でできるメカトロ設備に対する専門知識、より高いローコスト設計・製作の実践的な技術・技能を持った人材育成研修制度として確立されてきた。(図2)

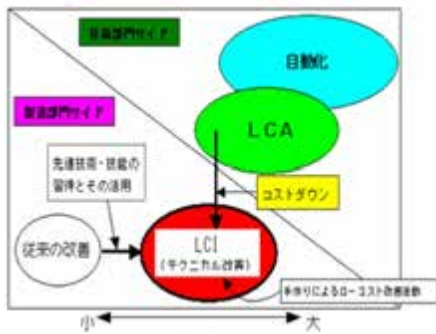


図2 LCI講座の位置づけイメージ図

3. 大分県版 LCI 講座

大分県 LCI 講座の実施については、日産短大との綿密な打合せを繰り返し、2013(平成25)年6月7日に開講した。年間20日のスケジュールで、生産現場において自ら設備改善ができる人材の育成を目的に、機械製図、空気圧制御、シーケンス制御、装置設計等の知識教育を、日産短大の経験豊かな講師陣が実習を交えた座学形式で10日間にわたり実施し、後半の10日間では日産短大で教材として使用している自動搬送装置(写真1)と同様の装置の設計から製作・調整を行う、実践的な内容へと展開していく講座となっている。(表1)

表1 2013(平成25)年度のLCI講座スケジュール(2014(平成26)、2015(平成27)年度も同様の20日間スケジュール)

月	開催日	内容
6月	7(金) 8(土)	開講式、機械製図
	22(土)	機械製図
7月	5(金) 6(土)	空圧制御
	12(金) 13(土)	シーケンス制御
8月	1(木) 2(金) 3(土)	装置設計
9月	19(木) 20(金) 21(土)	装置製作
10月	18(金) 19(土)	調整
11月	8(金) 9(土)	調整
	22(金) 23(土)	調整
12月	7(土)	振り返り、まとめ、修了式



写真1 自動搬送装置

日産短大での LCI 講座では、生産現場における技術者の基礎力の向上を図ることも目的としており、3つのステップ(「わかる」→「できる」→「うごける」)で実践力の向上を図っている。(写真2)



写真2 日産短大の3ステップ実践力強化



写真3 LCI講座の使用教材



写真4 日産短大講師陣による実技指導

また、基礎力向上などの例として、機械製図においては、CADなどのデジタルツールの活用はせず、ドラフターによる手書き製図を行うなど、徹底的な基礎固めを行う手法が取られており、大分県版のLCI講座においても同様で、受講者の基礎力の養成をするとともに装置製作実習では実践的な内容の講座が実施された。(写真3, 4)

また、2015(平成27)年度のLCI講座においては、過去2年間の日産短大講師陣の講座をサポートしてきた工科短大の指導員が、知識教育部門を担当した。これは、日産短大講師陣から指導者育成も本事業の目的の1つとして要求されていたことであり、2年間の講義・実習指導法を学んだ結果実施した事業である。

大分県版LCI講座は、2013(平成25)年度、自動搬送装置の製作費(2台)として初期投資が必要となり、年度予算7,997千円でこの事業をスタートさせた。次年度の2014(平成26)年度においては、講座運営予算のみとなり、5,72千円で事業を継続させ、最終年度の2015(平成27)年度には、LCI講座に加えて講座受講者の技術力の定着を視察するフォローアップ事業を実施し、その予算額は5,198千円となった。

3年間の講座の企画・運営、受講生募集等は、実施団体となった工科短期大学校が事務局となり、その運営にあたった。3ヵ年の受講者所属事業所は以下のとおりである。(表2)

表2 LCI講座受講者所属事業所

平成25年度	平成26年度	平成27年度
(株)北田金属工業所 JPRESS(株) (株)ケーアンドケー 神栄テクノロジー(株)(2名) (株)ミナミダ (株)ホックス 中央発条工業(株) FA. TECK(株) (株)ヒロテック	(株)九州イチタン 菱機械工業(株)中津工場 (株)C K K 豊洋精工(株) (株)ヨシカワ大分工場 大分パーライジング(株)(2名) 九州富士機工(株)	(株)北田金属工業 豊洋精工(株) 神栄テクノロジー(株)(3名) THK リズム(株) 菱機械工業(株) (株)九州イチタン 河村化工(株)
受講者総数 10名	受講者総数 8名	受講者総数 9名

3.1 LCIものづくり実習

大分県LCI講座の後半10日間は、自動搬送装置の装置製作を実施した。日産短大で行われている半年間にわたるものづくり実習では、自動搬送装置の設計・製作を全て行うこととなるが、大分県版のLCIものづくり実習では、全ての課程を実施するスケジュールが取れないため、自動搬送装置の一部の設計・製作を行う内容となっている。主な製作箇所は、自動搬送装置のワーク置き台、ワーク回転機構の設計・製作及びその制御装置の製作である。各年度とも4~5人を1グループとして、装置の仕様決め→構想設計→製図(部品設計図、組立設計図)→機械加工→機構部組立→制御装置設計→制御装置組立→調整といったものづくりの一連の作業を実施した後に、成果物を実際に納品することを想定して、仕様書等の作成を行い、成果発表会を実施した。(写真5)



写真5 LCI講座成果発表会

3.2 LCIフォローアップ事業

最終年度の講座においては、過去2年間この講座を受講した受講生の各事業所を、日産短大講師と工科短大スタッフで訪問し、講座で身に付けた技術・技能が活用されているかの検証及び技術アドバイスを実施した。各事業所の現場責任者から、LCI講座の内容が十分に発揮され、現場における改善・改良、保守メンテナンス業務に遺憾なく発揮されていることが確認できた。(写真6)



写真6 LCIフォローアップ事業

4. おわりに

2013(平成25)年度から3ヵ年の計画で実施された本事業は、産学連携事業として、地場企業の人材育成と競争力の強化という当初目的を達成し(写真7)、加えてフォローアップ事業において、その検証もできた。さらに、工科短大においても、日産短大の人材教育プログラムのノウハウを教授でき2016,2017(平成28,29)年度において自動搬送装置の設計・製作を卒業研究とすることで、自立事業として確立し技術継承をしている。



写真7 平成27年度LCI講座修了式

(機械システム系 佐藤 安正)

北部九州地域高度金型中核人材育成事業（金型技術者の育成）

1. はじめに

「北部九州地域高度金型中核人材育成事業」は、2005（平成17）～2007（平成19）年度にかけて実施された産学連携製造中核人材育成事業である。これは北部九州地域に集積しつつある自動車産業が求める「複雑な形状の金型を、高精度で早く安く、かつ、地域で調達したい」というニーズに応え、地域のものづくり産業の競争力強化を図るため、①技術・技能、②デジタルエンジニアリング技術、③新加工技術を身に付け、他の追随を許さない高度な金型の設計・解析・生産技術を創造できる人材（高度金型中核人材）を当該地域で育成することが目的である。また、前項のような背景により当校においても、2008（平成20）年度から小さな自立化ということで、国立大学法人九州工業大学と大分県が連携協定を締結したことから、人材育成に係る事業として2008（平成20）年度～2010（平成22）年度の3年間、本校の金型エンジニアコースの学生に対して、レベルアップを図るため、九州工業大学による金型教育が実施された。

2. 背景及び事業概要

北部九州地域には、図1及び図2に示すように、自動車メーカーや自動車部品サプライヤ、さらには二次、三次サプライヤも多数誘致され、九州工業大学先端金型センター（福岡県飯塚市）を始め、金型関連技術についての技術ポテンシャルを有する研究・教育を実施している大学等も集積していることが伺える。この教育・研究機関の集積を活用することで、技術・技能双方を理解し、高度な金型の設計・解析・生産技術を創造できる人材を育成し、地域の金型企業の技術力やそれに基づく提案力、研究開発力を高めていくことが、アジアに近いという北部九州地域の地理的特性を生かし、ものづくりの基地として国際競争力の維持・強化への不可欠な課題と考えられた。この「中核人材金型育成事業」は、各大学間の得意分野を活かしながら、金型人材育成を連携協力して実施された。具体的な教育プログラムは、協議会の企画委員会、部会で検討、開発を行った。2005（平成17）年度～2007（平成19）年度の3年間において9機関で27講座を開催した。

3. 効果

育成した中核人材の当該技術が、産業の維持・発展・定着する上で必要不可欠な理由は、日本の金型の設計・製造は、ものづくりに関する深い経験とノウハウを持った技能者により支えられてきたが、今後は納期短縮、コ

スト削減、複雑形状化、高張力材料化に伴う難成型化といった厳しい要求に対応しなければならないということである。本プロジェクトの人材育成プログラムは、成功事例や失敗事例を取り上げ、かつ、型設計のための工学知識の習得と連動させた「事例研究型実践講座」を継続的に実施することにより、従来、現場の経験や勘に頼っていた技能・ノウハウとデジタルエンジニアリング技術（3次元CAD/CAM/CAE）の両方を理解した人材を育成することを狙いとした。この人材育成プログラムでは、現場での不具合を最新のデジタルエンジニアリング技術により、その原因を突き止め、また顧客からの様々な要求や課題を解決するための提案力を身に付けていく人材を育成した。こうした人材の育成により、経験や勘に頼っていた現場の技能とノウハウを最新のデジタルエンジニアリングや理論的、工学的な裏付けにより、金型技術を一段上に引き上げることが可能となった。

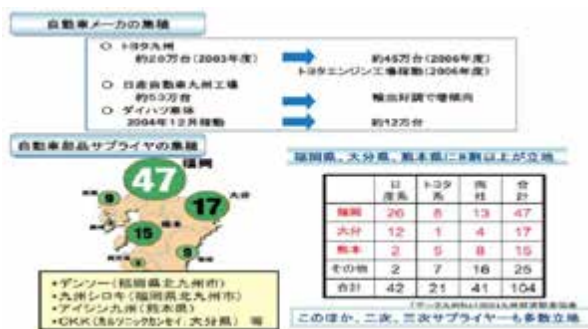


図1 九州圏の自動車メーカーと部品サプライヤの集積（2005（平成17）年度資料）



図2 地域大学等有する金型関連技術（2005（平成17）年度資料）

4. 小さな自立化

九州工業大学では、社会人にも対応し金型関連に特化した「デジタルエンジニアコース」を2008（平成20）年度に開設することを決定した。一方、本校では、2007（平成19）年度から「金型エンジニアコース」を設置し、2年次2008（平成20）年度からコース制を導入し、モールド金型とプレス金型

に関する設計から製作、さらには成形までの流れを習得させる教育を実施することとなった。図3には要求される技術レベルに対する経験時間を表している。九州工業大学では、金型関連の応用教育として「北部九州地域高度金型中核人材育成事業」と同等のカリキュラム内容を用意していることに対して、本校では短大という2年間の教育という制約もあることから小さな自立化コースを目指す予定となった。

コース制導入に併せて、九州工業大学先端金型センターにて、4日間の日程で金型に関するものづくり教育を実施(写真4)。本校の機械システム系金型エンジニアコースの学生が参加した。実施内容は、前半にプラスチック金型の基礎と成形実験、さらに金属光造形による造形実習を実施した。後半に、3次元樹脂流動解析実習やCAM加工に関する最新技術の講義を受けた。最後に、4日間で習得した金型教育に関して、各グループによる15分間のプレゼンテーションを行い、金型業界で貢献していくための貴重なアドバイスやご意見をセンター長である鈴木裕教授から頂いた。参加した学生からは、金型への関心が更に深まり、ものづくりの楽しさも実感したという意見が多く聞かれた。この4日間の実習において、金型の基礎から設計・製作・成形に至るまでの全体の流れが講義・実習を通してより深く理解できたことは、今後進めていく卒業研究等の中で、九州工業大学による金型教育は非常に貴重な体験となった。(図4)

企業に対しては、大分県内企業における金型関連職種は、他県に比べ特に遅れを取っており、産学官一体となって底上げをして行くことが急務となっていた。北部九州地域に集積しつつある自動車産業が求める「複雑な形状の金型を高精度で早く安く、かつ、地域で調達したい」というニーズに応え、地域のものづくり産業の競争力強化を図るため、高度な金型の設計・解析・生産技術を創造できる人材(高度金型中核人材)を育成していくための金型講演及びディスカッションとして九州工業大学鈴木裕教授・榎原弘之教授を中心に、金型加工シンポジウムを中津市内ではじめて実施した。

一方、学生教育に対しては、46名の学生に対して12名が金型エンジニアコースの学生となった。1年間という短期間で習得していくためには、前期の中で、ある程度の流れや特徴を示しておく必要性があった。モールド及びプレススの両輪を習得することは、かなり厳しいと思われたが、数ヶ月後に就職内定を頂く企業先によっては、早い時期に取り組む必要性が生じた。また、何れの金型分野で就職するかどうかの選択基準にもなり得た。さらに、後期の卒業研究では、モールド関係職種の会社に内定していれば、モールド系の卒業研究テーマで実施することとした。できれば、卒業研究テーマを決定する際に、内定企業と打ち合わせをさせていただき、身のある卒業研究の内容にしたいところではあるが、職員側の体制整備等も考慮する必要性があることから今後の大きな課題となった。

5. 所感

産業界が求める金型中核人材育成のための現状教育の不備として、既存のCAD/CAM/CAE解析セミナー等では、多くは短期セミナーであることの制約等々により、時間的に受講者の技術レベル(技量)格差を補完した導入教育が困難で、一方的な座学中心で無実習という傾向が強いことが指摘された。また、金型業界は、中小零細企業が大半で、大学での専門教育を受けた技術者を採用することはまれである。

一方、金型の生産には、より低コスト、短納期、高性能化が求められており、CAD/CAM/CAE技術を持ち備えた多軸工作機械を含めた高度な生産技術が求められた。ところが、現在の短大・大学教育では、金型そのものを対象とするカリキュラムの整備はほとんど行われていないと言っても過言ではない。したがって、この職業系工科短大での金型エンジニアコース導入が、大分県内を始め北部九州の金型教育人材育成の一端を担う小さな自立化の一步に成り得ればと思った。

6. おわりに

本校で導入した金型エンジニアコースが、北部九州地域における金型技術の一貫教育の確立に少しでも寄与できればと考えた。また、これまで実施してきた「中核人材金型育成事業」を通して、九州工業大学のご教授陣から様々な指導を頂き、大分県版の地域拠点における小さな自立化を目指し現在に至っているところである。

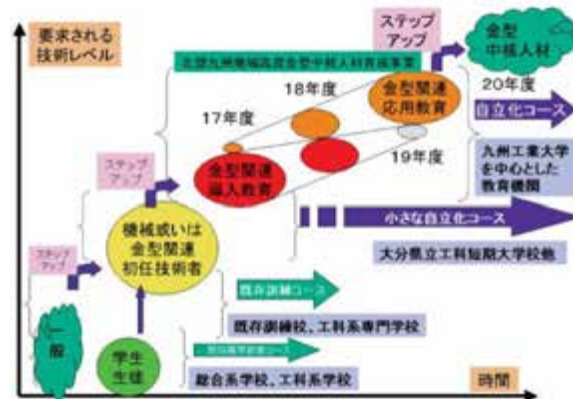


図3 人材育成の住み分け(2005(平成17)年度資料)



写真4 九州工業大学金型センターによる金型教育(2009(平成21)年9月資料)
(機械システム系 栗林 仁)

地域 連携

本校では、学生達が学園祭の開催、ボランティア活動の実施、地域イベントへの参画等を通じて地域の皆さんと交流することで、地域振興に貢献すると共に、ヒューマンスキルの向上を図っている。

● こうかさい ● 昂華祭 (学園祭)



山下 忠 校長による「ロボット育ての夢へのご招待」講義風景
2003 (平成15) 年



スタンバイOK！ 学生バンド演奏の本番前のリハーサル風景 2006 (平成18) 年



お点前はいかが？ 見よう見まねの俄作法で抹茶を味わう
キッズたちと一緒に 2006 (平成18) 年



伝説の茶室「幸庵」にて 着物姿でおもてなし
2006 (平成18) 年



只今ペットボトルロケット製作中 2008 (平成20) 年



これが人気の電流イライラ棒！ まだかな～
2012 (平成24) 年



第15回昂華祭サイエンスショーの様様 2012 (平成24) 年



中津市民吹奏楽による演奏。かわいい飛び入りダンスもありました。
2017 (平成29) 年11月3～4日



地元の高校生も参加。中津北高校書道部による書道パフォーマンス 2017 (平成29) 年11月3～4日



昂華祭実行委員の「成功に向けてがんばろー」のかけ声で昂華祭スタート。
2017 (平成29) 年11月3～4日



模擬店も工夫を凝らして販売。模擬店看板娘のインスタグラム・バージョン 2017 (平成29) 年11月3～4日

●ビーチクリーン



ビーチクリーン後の記念撮影 2018（平成30）年



NPO法人水辺に遊ぶ会 足利由紀子理事長による講演
2016（平成28）年



いざ！干潟の沖合まで 2015（平成27）年



2人でキャッチ！ 陽光浴びて元気にビーチクリーン
2018（平成30）年

●アースデイなかつ 2017（平成29）年5月21日



小学生を対象に、木工教室を行いました。



東九州短大の学生とコラボで、恋ダンスを華麗に披露。

●なかつヤングフェスティバル 2017（平成29）年5月14日



日の出町商店街で、恋ダンスのストリートパフォーマンスを行いました。



缶バッチの製作 どんな図柄にするかな～？

●寺町とうろう祭り



浮かび上がるとうろうイルミネーション 2012 (平成24) 年



とうろうを並べる準備作業中 2012 (平成24) 年



工科大に現れた赤合子兜の軍師官兵衛
2014 (平成26) 年



準備を終えて奥塚市長と一緒に皆で記念撮影 2017 (平成29) 年



赤合子兜の軍師黒田官兵衛 寺町とうろう祭りに見参! 2014 (平成26) 年



Before : 寺町にあるお寺、宝蓮坊の境内にとうろうを配置 2017 (平成29) 年



After : 暗がりの境内に浮かび上がるとうろう群 2017 (平成29) 年

● Love ファンタジア中津 2017 (平成29年)



第8回Loveファンタジア中津2017において最優秀表彰を受賞
(ダイハツ九州スタジアム横特設会場にて)



完成した作品をキャンパス内で披露 (事務室前にて)



OITイルミネーションの点灯(中津駅前)

● 職人フェスティバル

中津駅構内で大分県建築士会中津支部の方々と一緒に
学生が子供たちに折り紙建築指導 2017 (平成29) 年



2016 (平成28) 年は日の出町商店街アーケード内の店舗跡で開催



2015 (平成27) 年はダイハツアリーナ内で開催
広いアリーナの一角が折り紙建築コーナーに。



後列：仲村、小野孝仁、司城
前列：中野、筒井、後藤

座談会 20年を振り返って

(出席者) 卒業生／司城俊一(生産技術科1期生)・筒井隆浩(制御技術科1期生)
小野孝仁(電子技術科1期生)・仲村鮎美(電子技術科2期生)
後藤聖和(住居環境科1期生)・中野健児(住居環境科1期生)
教員／入部久志(機械システム系)・満永浩一(機械システム系)
小野陽二(電気・電子システム系)・松尾浩助(建築システム系)

今の仕事やポジションについて

(後藤) 玖珠町役場の建設水道課で働いていて、今の仕事は、主に公営住宅の整備や営繕を担当しています。計画に基づいて町営住宅を作ったり改修したりするときに、設計業者さんから上がってきた設計書をチェックしたり、工事に入ったら標準仕様書に基づいて作れるように監督員をしています。

役場には建築技師は2名しかいないので、他の課の建築関連は全部自分に回ってきます。

町道の維持の仕事もしていて、最近では雪のせいで竹が道路に覆い被さっていることが多いので対応しています。

特殊地下壕という防空壕があって、

中が落盤している事故が発生しているので、建築ではなく土木になるが、担当しています。職場でのポジションは総括技師として主査級の役職です。

(司城) 今の職場では(工場に指示を出したりする)技術管理部から急遽、経理の応援を3、4年していた時期もあります。そのあと工程を担当し、4年くらい前に技術管理部に戻ってきました。

今していることは、石油を地下から引っ張り上げるためのパイプの継ぎ手を作っています。目に付くところで言うと、羽田空港の滑走路の途中が一部橋になっていて、その地下のジョイントを作りました。地盤強化用ということで道路の高架の下に埋め込むための基礎杭、それと、

今はTOTOさん絡みの半導体関係の仕事をしています。ポジションは参事補(係長と課長の間)です。

(筒井) 今は半導体関係の仕事をしていて、静電チャックと呼ばれているシリコンウェハを加工するためのエッジング装置に使われる素材を提供しています。工程管理の業務を行っていて、トラブル等があれば改善しています。もともとは派遣社員として開発部門で入り、製品の設計などをしていました。今は部署が変わり、素材の調整工程を担当しています。また、業務改善を担当しています。

(小野) 現在は、A-WING株式会社という会社の代表を務めています。工科短大卒業後、大分市内の電気工業の会社に就職したのですが、リー



筒井 隆浩
(制御技術科1期生)



小野 孝仁
(電子技術科1期生)



司城 俊一
(生産技術科1期生)



中野 健児
(住居環境科1期生)

マンションの際に転機があり、独立し、小型風力発電機を製造販売するベンチャー企業を立ち上げました。A-WINGという社名の由来は、どうせやるなら一番を目指したものづくり、ということでアルファベットの最初の"A"に、翼という"WING"を足した造語です。久留米市に本社を置き、私自身は単身赴任です。

ポリシーとして困っている人を助けることをしたい、笑顔が見たいとの思いが強く、国外での未開発地域での活動に特化し、インドネシアやバングラデシュ等の特に電気や安全な飲料水が不足している地域のために、電気と水のインフラを同時に提供可能な自社製品を考案しています。JICAや現地財閥系企業と連携することでBtoCのビジネスモデルを展開しています。

事業を楽しんでいて現場の作業環境がすごく好きなこともあり、現在、海外法人を含めグループ企業が数社あるのですが、現場に行って作業員と現場に泊まり込んでみたりプラント等の製品の製造にちょっかいを入れたり、かなり迷惑な社長です。売上はまだ数億程度ですが、自身の目標に向け日々努力しています。

生活のリズムとしては、一年の半分が海外の現地に滞在していて、国内滞在時は、研究開発や、アフリカ諸国からの青年研修を通じてグループの活動や技術の発信を行っています。この研修は年に数回ですが、北九州にある公益財団法人(KITA)と行っています。

(中野) 卒業してから、工科短大の近

くの会社で4年くらい働いていました。その後、地元の豊後高田に戻り、働いて14年目になります。もともとは建築の内装の会社だったが、今は太陽光発電等に力を入れています。主に営業をしていますが、営業をしながら現場の工務、設計も全部しています。

ポジションは今年から次長で、管理もしながら、本社の工程等も見えています。運営等もさせてもらっています。

(仲村) 熊本で、ノアシステムデザイン株式会社というシステム会社を経営しております。

経営とは名ばかりで、実際はSEからPG営業まで全て行っております。社員は4名です。

卒業後は北九州のソフトウェア関連会社で働き、工場にも行ったり、携帯のマニュアル作成、銀行系もあったり会社から受けたプログラムを作成したりしました。

その後、何社か経験し、どこに行っても自分の裁量、判断のできないのであれば一緒だなと思って。熊本のソフトウェア会社に在職中、「自分でやったらいいなあ」と感じているときに、ちょうど、みんなで出資して会社をやろうという話になりました。当初は代表取締役になるつもりはなかったのですが、やるなら性根入れてとことんやろう、失敗しても死ぬもんじゃなし!と紆余曲折ありましたが、代表となりました。

ありがたいことに、前からの仕事のお客さまや紹介もあり、仕事が途切れずに来ています。

最初は自宅でやっていましたが、今はマンションの一室を会社に使っています。また、春に大きめのところに引っ越し予定です。

主にWebシステムの開発や、CMSを利用したホームページの作成、アプリ開発、他企業のサポートなど、PCに関わることで、可能であれば種類を問わず請け負っています。

会社でのポジションは一応社長ですが、一番チョコチョコと何でもかんでも作っているタイプの社長です。明確な目標が無いままここまでやってきたというのもあり、そこが自分の中で不安な点でもあります。何とかなるとい気持ちで頑張っています。おかげで今年5年目を無事迎えられるそうですが、まだまだ頑張らねばならないと感じています。

工科短大での思い出

(後藤) 入学者説明会が3月くらいにあって、テニスコートの方から歩いて短大にきましたが、まだ工事中のバレーコートなどがたくさんあって、芝生もまだ生えてなくて寒々しく、できたばかりだったんだなあという風景が今でも鮮明に浮かんできます。

(小野) コンクリート打ちっ放しだったよね。

(松尾) 建設中は南側に塀が建っていて、近所の方も何ができていないか見えない状態だった。ある日突然ばたんと塀が無くなって忽然と現れた校舎群を呆然と眺めている人がいたなあ。

(みんな) (笑)

(仲村) 今では中庭には卒業制作がい



後藤 聖和
(住居環境科1期生)



満永 浩一(教授)



松尾 浩助(教授)



仲村 鮎美
(電子技術科2期生)

くつか並んでますよね。

(小野) あ、そうなんだ。

(後藤) 思い出といえば、中野さん、あるじゃないですか、昂華祭。

(中野) そうそう昂華祭は大変だったね。でも人生において勉強になった。ゼロからだったし、一番勉強になったなあ。

(後藤) やるか、やらないか、からだったしね。

(入部) 昂華祭の名前は どうやってつけたの？

(後藤) 実行委員会の中で最初、東浜祭にしようかとかも出てました。でもしっくり来なくて、もうちょっと、若者らしく勢いのある、エネルギーあふれる名前にしようということになりました。名前は工科短大の工科を取ろうってなって、それに祭をつけた。昂は高ぶる。華は華やか。若者らしく、エネルギーで華やい感じにした。そして「昂華祭」というものが漢字も含めて決まったような記憶があります。

(司城) 初耳！

(入部) 名前の由来が誰にもわからなかった。

(筒井) 確かに言ってなかったかもね。

(小野) 住居が中心に集まってやってくれてたね。

(司城) 生産はみんな、住居祭って呼んでいた。

(みんな) (笑)

(後藤) 今は人が少ないけど、あの当時は住居が26人くらいいて、半分以上が女性で他と比べて華やかで賑やかだった。

(みんな) (笑)

(筒井) 生産や制御は少なかったもんね。よく住居に遊びに行ってたなあ。

(後藤) 嫁さん捕まえたしな。(笑)

(仲村) 人数の少ない学校ですが、昂華祭などのイベントで科を問わず友人ができたように思います。当時テレビ番組で、電流イライラ棒というのがあり、その簡易版を製作したところ、昂華祭では子ども達が喜んで遊んでくれました。仕組みは簡単ですが、当時の電子科では使用しない大型木製パネルの断裁や組み立て、金属加工などで、他の科の先生や学生と協力したことを覚えています。

私たちのころの昂華祭は子どもをあまり見なかったけど、卒業して2、3年したくらいに近所の子どもがたくさん来ていた。すごいなあ、子どもが増えてるって感じた。

(司城) 生産の中の七不思議があって、満永先生が歩いているときにキュッキュと音がして音でわかった。「あっ！来たっ！」って皆で言っていた。(笑)

何の音だったんですか

(みんな) (笑)

(満永) スリッパの音ですよ。(笑)

(中野) あ、思い出といえば卒業式で松尾先生がバイオリン弾いたときかな。

(後藤) (笑) 卒業証書授与の最後のホームルームで素晴らしいサプライズがあった。

(松尾) 聴いてみたいって言われたから真に受けて……(笑)

(中野) あれから毎年弾いているんじゃないですか。

(松尾) あれ以来してないですね。

(みんな) (笑)

(後藤、中野) やった方がいいですよ。

(後藤) 最高のプレゼントでしたよ、鮮明に記憶に残っています。

(小野) 短大の思い出といえば、先生方が異種多様な能力を持っている人が多くてびっくりした。こんなに色々なジャンルの人が集まっているのかと思った。民間から来られている人がいたから現場の作業もされていたし、過去の仕事を聞いたら色々な実績を持っている人がいて、在学中は感じなかったけど。卒業してからもやりかた教えてくださいって聞いたら教えてくれる。

(仲村) 卒業してからわかることって多いですよ。施設も新しく、また、やりたいと思ったことを伝えると先生の裁量でさせてくれたことが多かったように思います。

具体的には、サーバを一台まるごと貸していただき、セットアップしてみたり、ロボット相撲に使用する部品についても、技術的に扱えるかどうかわからなくてもチャレンジさせていただけました。

(中野) 今は英語ってあるんですか。

(仲村) 4、5人でグループになって。

(中野) レイチェル先生だったかな。

(みんな) 懐かしい〜。

(司城) まじめにやっておけば良かったな〜。職場でも外国の人が入ってきたりしているから、英語が話せなかったら何言っているか分からない。(笑)

(小野) 向こうの若い人って何か国語か話せるから英語があるとコミュニケーション取りやすいよね、学生の時やっとなら良かった〜。

海外でよく感じるのは、会社の規



小野 陽二 (教授)



入部 久志 (教授)



後列：後藤、筒井、中野、司城、小野孝仁
前列：満永、入部、松尾、小野陽二、仲村

模とか関係なく社長でもオーナーでも、会って話せる機会が多くて、そこでもっと自分の言葉でコミュニケーションを取れたら、一緒にやろうよって話ができるのに自分でチャンスを逃してると思う。勿体ないなって思う。

社会に出て気づいたこと

(後藤) 親にお金出して貰って学ばせてもらえる環境のありがたさが非常に身にしみたことがありました。学校を卒業して2級建築士を取ったあとに、今の職場で働きながら1級建築士の勉強をしていたのですが、なかなか独学では難しくて(玖珠から大分まで)予備校に通い始めました。半期で50万くらいかかりました。

足掛け3、4年で25歳の時に1級建築士を取れました。自分でお金を出しているから真剣になれる。宿題してないと、また、1分遅刻しても教室に入れてくれないようなところで、職場も頑張っって早く出て通っていました。試験の前になると0時くらいまで授業もあって、そこから家に帰って2時間くらい掛けて宿題。就寝時刻は3時。そして仕事、そして学校、という生活が続きました。「あなたの人生の中で、この何年間かは全てのことを犠牲にしてください」と言われて過ごしていました。

お金を誰かが出してくれて勉強できるっていうのは本当にありがたいことだと感じました。それと、学校で勉強していることをちゃんとしておけば1級も2級もそんなに難しい

試験ではないと思う。

(筒井) 当時はそれになかなか気付けない。

(みんな) (笑)

(筒井) 今になって、あの時もっと勉強しとけば良かった。て思うよね。

(後藤) ほんとう思うね。

社会に出て苦労したこと

(仲村) コミュニケーションが大事。お客様の要望を聞き出すときに、行って1時間くらい色々な話してみないと出てこない。何でも良いから色々な引き出しは持っていた方がいいと思う。知らなくても、インデックスだけ頭に入れて後から調べたり……。

(小野) 質問ができたら良いよね。

(仲村) そうそう、質問ができたら一番です。「これどうですか?」とか相手が話してくれるように聞き出してみると、「実はね、こういうのもしたいんだよ」って話してくれる。それが仕事につながるときもあるし、雑談で終わるときもあるけど。

私は今は一人でしているけど、企業に入ったら複数人でやっていかなくてはならないから、進め方とかそういうやり方は学校でもっとやっておけばなあと思った。リーダーでも良いし、構成員の場合でも、組んでやるときの連携の仕方とか。

(中野) 今は職場体験とかあるんですか?

(松尾) インターンシップをやっていますね、5日間。

(中野) 俺らのときはあったかな?

(小野) 無かった気がする。

(松尾) 今はカリキュラムの中に入っ

ています。

(中野) 入っているんですね。あるのは良いことですよ。

(小野) 学生の時に身に付けておけば良かったという話であれば、私の周囲で、新人がコミュニケーションを取れない!とあっちこちで聞きます。

要は、相手の気持ちやどの位共有できているか? という話になるのですが結構難しいです。単純に、聞く、話す、また、伝える能力、聞いた内容を理解する力、等が少なくとも必要になる。

コミュニケーションと簡単に言いますが、この内容自体は体験を通じ、他者からの反応を見る等、人とコミュニケーションを取ることでしか把握はできませんから。

全然別の話ですが、講義時間の最後に自分の考えを話す時間を与えてみるなど、真剣に講義を聞いて、何を話していたか? ということを中心に、自分の意見を発言する練習をしても良いのでは? と感じます。

教科書等の学術書を後日、勉強すればわかる、と感じている学生には良い特効薬になると思います。

そうすれば、多分誰もが経験のある、わからないから暇になるという時間はきっと新しい有意義な時間になるはずですし、新鮮な発見もできると思います。

あと、自身の話でいうと当時英語の勉強を全くしなかったことははっきり言ってしまうと痛恨のミスです。特に海外では個人の能力とは別に、会社以外の場で、個人としての考え方や文化や歴史、宗教の話題に

触れ合うことが多くなるのですが、その時に自分の口で自身の意見をしっかり伝えられないことが辛い！意外と引き出しが多いので話すことには困らないのですが、細部の説明ができない(笑)。余計に悔しい！

英語については、小学生の時に今後の必要性を聞いていたのに、中学生になってもほとんど気にしないまま全く勉強せず。高校になるとテスト中ということでもほとんど勉強せず。必要性が迫らないとわからないものです。その時になるとかなり慌てないといけな(笑)。段取り八分。何事も早めの準備に越したことはないです。

英語は今後の社会で必ず必要な能力になると思います。翻訳機などの機械を当てにせずに、自分の意見を伝えられるためにも、しっかり将来へ向け、準備して欲しいと感じます。

(入部) 筒井さん、今の会社には最初は派遣社員で入ったと思うのですが、どういう経緯で正社員になったのですか。

(筒井) 今の会社で最初は開発をやっていて、生産技術(素材)の方の部署に異動して、それから2年くらいで社員になれました。

(入部) どのような過程があったんですか。

(筒井) ちょうど新素材を作る(セラミックスに導電性を持たせる)という大きなプロジェクトがあって。そのサポートを頑張っ、て、上手くいって成功した。そこを評価されて社員になれました。

(入部) 試験とかあったんですか。

(筒井) もちろんありました。元々、卒業後すぐは電気工事の会社に就職していました。その後、職業訓練校に行っ、て、派遣で今のところへ入りました。

(小野) 今までで一番キツイ仕事は？

(筒井) 今が一番キツイかな。今は事業部長にプレゼンをする機会もある。喋るのは得意ではないので、プレゼン能力が上がる教育があればと思う。学生時代だったらプレゼンするといったら卒研の発表の時かなあ。

(後藤) プレゼン能力を鍛えようという授業はたくさんあったと思うよ。何分間かスピーチなかったっけ？

(中野) あったな、ビデオ撮られてた。

(松尾) あれは住居がやっていたんですよ。

(後藤) やっていたのはうちだけですか。撮って、後でみんなで見るとい、う。そりゃみんな真剣に考えてくるよね。(笑)

(筒井) 学校で品質工学とか統計の勉強とかありましたっけ。結構、今の仕事でそういうのが重要で、QCとか。

(司城) 生産はあったよ。小山田先生。名言が「真の値は、神のみぞ知る。」っていう。

(みんな) (笑)

(小野) 1期生はみんな、小山田先生の全体講義をアネックスで受けてたよね。安全工学かな。

(仲村) 何かあったときに暴走しても必ず止まるとか、そういう場合に倒すように設計する、っていうのが後に役に立った。自分が物を設計する側になって、なるほどって思った。

後輩へのメッセージ、工科短大に期待すること

(小野) 何でも一生懸命することかなあ。

(仲村) 何が自分の食いつ持になるかわからないから。

(小野) わからないことがあったら、聞いて勉強したら良い。

後輩へ伝えたいことは、「気になることは自分で調べるとい、う感覚」でしょうか？

現在は、色々な情報がWebにあり、簡単に調べた情報や経験談から自分が解っている、知っている、と勘違いしてしまうことが多くあると思います。

結果とは、結論ではなく、行動した成果であり、実際に行動したこと、で経験となり、次の行動に生かせるわけですが、その検証のための行動が非常に少ないと感じることが多いのです。

例えば、気になるのであれば、実

際に自分で行動して調べる。その場所に立ち、自分の身体で臭いや周囲の状況を肌で感じることで、多くの情報全てがソースになるのですが、Webの画面で見るとその一過性の情報で全てを判断するのはあまりに勿体無く、キャンパスライフを送る時間の使い方としては非常に残念だと思います。

今後将来、自分の自信につながる経験値とは、まず行動から起こるものだと思いますので、今日よりも明日と色々なことに有意義にチャレンジしてみるべきだと思います。色々な計画や情報はそれからだと思います。

まず行動!! 2年間しかない学生生活を有意義に過ごす中でしっかりと、今後自身がしたいことに取り組むための準備を頑張っ、て進めると良いと思います。

(後藤) 何か頼まれた時に、考えるのもいいけど、とりあえずやってみるとい、う姿勢で受けた方がいいかな。助けてくれる人は周りにいるので。頼む側は自分のことを見て色々考えて頼んでくれているから、あまり引かず、出来ませんって言わず、どんどん挑戦していっ、てほしい。失敗したなあって思うこともたくさんあるけど。(笑)

(中野) 在学中に何が一番得意か、何がしたいかっていうのを自分の中で、決められたらその職に就くだろうし。見つけられなくて就職したとしたら、そこまで続かないことの方が多いかも。目標でも、自分のしたいことが自分でわかっ、てい、れば、結構大変なことが多いだろうけど、「それに向かって頑張れる。」ということもあるだろうから。

(司城) 自分が新人の時には、「とりあえずまず自分で考えて自分の意見を言っ、てこい」ってずっと育てられた。

今の若い子で何も考えずに、聞こ、うって子がいて「それじゃ覚えな、いよ」っていつも言っています。時間掛けすぎたらダメだけど、最低限自分なりに考えて自分の意見を言える子が欲しいな。今は学校で、試験があるから公式を覚えるけど、実際社

会に出たら何でも見て良いので、どこに何を書いてあるかわかれば良い。優秀じゃなくても、上を目指そうとする人が良い。

(仲村) 要領が良いのも大事ですね。この学校で、2年という短い期間ですが向いている道を見つけれられると良いなと思います。また、社会に出ると「目の先の仕事しか見えない人」、「仕事の先の会社全体の利益を考えられる人」に分かれると思います。

向き不向きはありますが、先を考慮されるようになると、選択肢が広がって良いかなと思いますし、何かあっても力になってくれる人が増えます。そうやって欲しいと思います。

今後の抱負

(小野) 私自身は事業経営をしていますので、できれば、工科短大の卒業生と仕事を一緒にしてみたいです。もちろん、産学や産学官等での取組として、工科短大(国内)や、他の学校(海外)と連携して一つのテーマへの共同活動、製作とかもやってみたいという希望は持っています。

ただ、簡単なことではないので、それに向けた体制や準備は必要と感じていてもう少ししっかりしたフォローの体制が必要かなと思っています。

あと、学校に関してということであれば、私は同窓会の役員としての活動もあるので、今後、卒業生が関与することになる同窓会の組織的な運営や活動の充実でしょうか？ できれば今後は定期的な集まりや後の方が続けられるような活動を準備しておく必要があると感じています。

先日、ある商工会議所の会頭と話をする機会があり、その際に、初めの人もしっかりやっていかないと、と諭してくれました。あーそうか…。と、私たちにその責任があるのかと思いました。四年制大学の卒業生には数10年過ぎても未だに学外活動(OBとしての参加)を通じて新入生との交流を持っている人は沢山います。も

う少し交流の輪を広げる活動や経験も増やせると良いかと思います。特に工科短大は地元の就職者や近隣周辺からの入学者が多いとも聞いていますので、そういったコミュニティは大切だと感じています。

(仲村) 技術者を増やしていきたいと考えています。

これは社員を増やしたいということではなく、手に職をつけることはその人にとっても益になることになるので、その手伝いがしたいと思っています。

(後藤) 工科短大の繋がりの中で、志学塾なるものに通っています。教鞭をとられていた、安田先生が発起人なんですけど。毎月第1土曜に中津市内で若手リーダーを育てる目的で開催していて、この前は川島整形外科病院のTQM(トータル・クオリティ・マネジメントの略)活動発表会にも参加させていただきました。この会は、大病を患った安田先生が、自分が身に付けてきたものを次の世代に引き継ぎたいという思いから立ち上げたものだとは自分は認識していて、先生が亡くなった今は、事務局の伊集院先生を中心に、QC(クオリティ・コントロール：業務改善)活動について勉強をしています。塾名のとおり志をもって学ぶ塾です。何ヶ月かに一回は自ら発表したりして、人前で話すのが苦手な自分にとっては、正直かなりの負担になっているんですが、発表後は苦労したなりの達成感やスキルアップにつながっていることが実感できます。今は学ぶ側ですが、ゆくゆくは自分がこれから身に付けていくものを後輩に引き継げる人間になりたいし、後輩が「宝」と思えるものを身に付けようと考えています。今はあまり若手がないので、卒業生で興味のある方は是非連絡をお願いします。それと、もう一つ、先ほど小野さんも言っていたんですけど、同窓会の組織を強化していきたいと考えています。ちゃんとした組織をつくって、早めに会長職を後輩に引き継ぎたいと(笑)。会長の腰が

重いんで立ち上げた状態からほぼ何も変わっていませんが、同窓生が活躍することが、母校の発展に一番寄与することと考えているので、同窓会で同窓生を支える活動を行っていきたいです。取り急ぎ各期で幹事を決めたいと思っているので、声が掛かった方は快く受けてくださいね(笑)

(中野) 私個人としては、今、勤めている会社で、もっと自分のこれからの役割をしっかりと考え、全体を見ながらの仕事が身に付けられたらと思っています。

特に若い子の育て方です。自分の意志をしっかり持ちながらも、ちゃんと意見も聞け、考え方、動き、意欲を持ち、失敗を次にプラスにできるような子を育てたいです。そして、共に自分も成長できればと思っています。

(筒井) 今の会社に勤めて15年になり、指導する立場になりました。培ってきた技術と経験を活かし、後進の育成に努めたいと思います。短大からも後輩が入社しており、同じ会社で働けることはうれしい限りです。現在、私と同じ部署には卒業生はいませんが、同じ部署であれば熱く指導します。

(司城) 同窓会の立場としては、意見交換会的なものを行い「働き始めたら何が大切か、何を準備したらいいか」などの参考意見を、学生にフィードバックできたらと思います。学生さん達への就職活動の参考情報として、卒業生のリアルな声を届けられたらと。と言うのは簡単ですが、今後の抱負として。

(松尾) 話は尽きませんが、予定の時間が来てしまいました。皆さん、本日は座談会にお集まりいただき、ありがとうございます。

OIT シンボルマークのデザインについて



大分県立工科短期大学のシンボルマークは、大分県商工労働観光部職業能力開発課工科短期大学設置準備室において、1997（平成9）年11月5日～26日の3週間の期限で行われた、大分県内の6社と福岡市からの1社の計7社によるコンペにより、決定しました。

選ばれたシンボルマークを手がけたデザイナーは、大分市在住の中谷秀治氏です。

中谷氏にデザインの制作意図について解説していただきました。

【未来へのチャレンジ】

頭文字 O・I・T を基本に生き生きと学なぶ学生たちの姿を（○）で表現。

大学と学生の輪をつなげて未来へ羽ばたくイメージを動きあるデザインでまとめてみました。

カラーの紺色は宇宙をイメージ。

既に大分県立工科短期大学のシンボルマークとして定着している OIT のマークですが、これからも長く在学生や卒業生、関係者を始め、地域の人々に愛され使用されることを願っています。

モニュメント “夢みる Age” について

“夢みる Age”を創って 辻畑 隆子



工科短大創立20周年、心からお慶び申し上げます。この中津の地は私の出身地であり、父母はもちろん、先祖もこの地に眠っています。長年、中津の地を離れても帰郷の際“お帰りなさい！”と言ってくれるような空気分。その度に私の心の中に内

在する望郷の念があふれてきます。

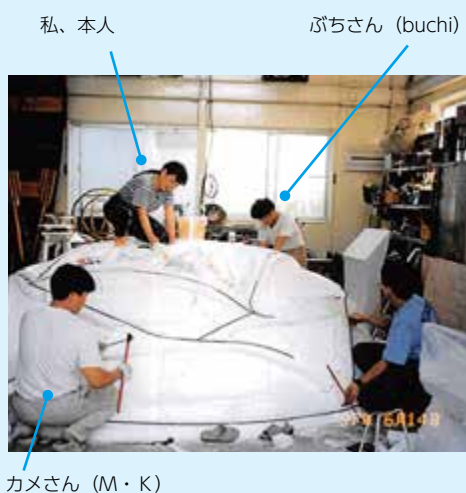
20余年前、初めてモニュメントのお話を頂いてから、現地に行くと基礎工事中。具現的に建物をイメージしてもピンときませんでした。しかし、何度か足を運ぶうちに、イメージの形が私の中に降りてきました。中津、学校、若者、学ぶの言葉を並べていると、テーマのポイントの形が自然と浮かんできました。この地上、風、ひとりの若者が夢に向かって…と。しかし、現実的には、屋外の場合、風速、温度、安全、そして何より広い空間に映える一つの塊として

の美形を創り出さなければと。それには何としても大空をバックにできる高い空間をと。モニュメントの高さは6.5mと計画してみました。ところが、当時の私のアトリエでは天井が低く、愛知県の友人のアトリエを借りてやることになりました。私もその当時、若かったせいか？頭の中でイメージが決まると、何ら迷いも妥協もなく実行へと一直線！悩みは後で考えれば良いと。何より、当初の心の勢いを消さなようにと懸命でした。

その翌年の春に、現地で建立作業。はじめてモニュメント全体を空間の中で目にできました。建物もすっかり完成の中、やはりこのスケールで良かったと安堵、じんわりと目頭が熱くなりました。

最後に、ここで学ぶ皆さんに伝えたいことは、自分の心で決めたことは、必ず実行してほしい。自分の心の中の“できる”を信じてほしい。

例え数々の失敗があったとしても、最後の最後まで、自分を信じる“オンリーワン”の若者でと、切に願います。



私、本人 ぶちさん (buchi)
カメラさん (M・K)



大分から、このランドクルーザーで、愛知県へ。まだナビのない時代
近所の女性 (この女性、私ではありません。)



モニュメントと辻畑隆子氏 (1998(平成10年)除幕式会場にて)

辻畑 隆子(つじはた たかこ)氏 プロフィール

1975 (昭和50)年	日展初入選	1988 (昭和63)年	日展特選	2005 (平成17)年	日彫会選抜展出品
1979 (昭和54)年	個展	1990 (平成2)年	ロダン大賞美ヶ原高原美術館賞	2007 (平成19)年	油屋熊八像 (別府市)
1981 (昭和56)年	日彫展奨励賞 日展特選 大分県民栄誉賞	1992 (平成4)年	女流展出品 (日本美術協会主催)	2010 (平成22)年	廣瀬武夫像 (竹田市)
1982 (昭和57)年	現代美術選抜展出品 (文化庁主催)	1993 (平成5)年	発する風(大分市 県民の森)	2011 (平成23)年	日展審査員
1985 (昭和60)年	福沢諭吉像 (中津市)	1996 (平成8)年	日展審査員	2012 (平成24)年	大分合同新聞文化賞
1986 (昭和61)年	ロダン大賞彫刻の森美術館賞 日本現代陶彫展出品	1999 (平成11)年	日彫展審査員	2014 (平成26)年	大分県知事功労賞
		2000 (平成12)年	白日会吉田賞受賞	2015 (平成27)年	白日会審査員
		2001 (平成13)年	白日会審査員 白日会長嶋美術館賞	現在	日展会員、日本彫刻会会員、白日会会員

校歌 作詞者 高橋 洸志 先生について



本校校歌の作詞者は、宇佐市のご出身で中津南高等学校で国語の教師を務められた故・高橋洸志先生です。

本校が開校して2年後の2000（平成12）年に校歌を作ることになり、作詞者の候補として16名の候補者が選出されました。その中から四日市高等学校（現在の宇佐高等学校）の校歌を作詞された高橋先生にお願いすることになりました。当時、大分県商工労働観光部からは、若い人に歌われる歌、すぐに口ずさめる歌を、という要望がありました。

当時の本校の担当者には、高橋先生は穏やかで熱心な教育者に映ったそうです。高橋先生に締切期限を1ヶ月半で作詞を依頼したところ、1週間のうちに校歌3案をご用意いただきました。当時の本校の在学生及び職員でアンケートを行った結果、現在の校歌となる歌詞が選ばれました。

高橋先生曰く、「この歌詞は、貴学の要望に沿って作ったものです。私としては思い切って型を破ったものです。」

先生のご長女の谷口敦子様から、先生はお酒をこよなく愛し、深酒をすることも多く、また愛煙家であったと伺っています。本校の歌詞を考えていた際は、おそらく書齋に籠って一人でタバコを燻らせ、思案を巡らせておられたことと思います。

現在、入学式、卒業式の式典では、学生、職員、関係者が校歌を斉唱しながら、厳かなひとときを共有しています。

故 高橋 洸志（たかはし こうじ）氏 プロフィール

1933（昭和8）年6月30日宇佐市下乙女出生。
宇佐高等学校、中津北高等学校、四日市高校、
中津南高等学校で教鞭を執る。
2005（平成17）年6月15日ご逝去。

安田俊彦氏の経歴及び業績



2012(平成24)年 機械システム系卒業式の際の挨拶

1943(昭和18)年4月24日 鹿児島県生まれ
1962(昭和37)年3月1日 鹿児島県立鹿児島実業高校
機械科卒業

1962(昭和37)年3月7日 九州松下電器株式会社入社
九州松下電器時代:

- ・「技能育成塾」を組織し、塾長として後進の指導、技能継承に貢献
平成9年に、社内有志で「技能育成塾」を組織し、自ら塾長に就任して国家技能検定等の資格取得指導を行うなど、同社の技能継承に尽力した。
- ・社内誌に「ザ・スーパー社員」として紹介される。

5つの特級技能資格を始め、21の国家技能検定資格を保有する。

1999(平成11)年10月 大分県で初めて、厚生労働省の委託を受けた中央職業能力開発協会から高度熟練技能者(機械加工)に認定される。

2003(平成15)年4月24日 九州松下電器株式会社定年退職

2003(平成15)年5月1日 大分県立工科短期大学校非常勤職員(教授)として採用される。

大分県立工科短期大学校時代:

- ・「若年者ものづくり競技大会」の指導を通して後進の育成
同校において、中央職業能力開発協会主催の「若年者ものづくり競技大会」の参加者を督励し、入賞に向けての指導に尽力。同校の学生は、毎年優秀な成績を収めている。
- ・キャリアデザイン入門の講師を平成18年~25年まで8年間務める。
同校におけるキャリア教育の一環として3系合同の特別講義の講師を務め、



2013(平成25)年度職業能力開発関係表彰式で中央職業能力開発協会から都道府県技能検定委員を代表して表彰される。(東京明治記念館にて)



2009(平成21)年8月8日 第1回大分県Qサークル成果発表会での安田先生の講演風景



2006(平成18)年 技能祭にて(左は伊集院豊磨先生)



2006(平成18)年度卒業研究発表会にて卒研究生と共に



指し棒を持ったお得意のポーズで熱弁を振るう安田先生(2007(平成19)年度キャリアデザイン入門特別講義)

キャリアを築く上での心得を学生に指南している。

・大分県QCサークル活動支援企業会の設立と事業の推進に貢献

2011（平成23）年に設立された「大分県QCサークル活動支援企業会」に尽力。同企業会には63の会員を擁し、定例会・研修会・発表会の開催や会員企業の相互訪問を行うなど、特に県北地域における地場産業の発展に大きく寄与している。

・大分県内高校生への技能検定指導を通して若年者の技能向上に貢献

自らが会長を務める大分県高度熟練技能士会では、広く県内工業高校の教員、生徒に国家技能検定の指導を行うなど、機械加工の技能継承に積極的に取り組んでおり、若年者の技能向上に対する計り知れない貢献を果たしている。



機械加工部サークルメンバーとの写真(2010(平成22)年3月)

2012（平成24）年 3月31日 大分県立工科短期大学校任用終了する。

2012（平成24）年 4月1日 大分県立工科短期大学校客員教授（機械加工）を委嘱される。

2012（平成24）年 11月3日 大分県功労者として広瀬知事から表彰状を授与される。

2013（平成25）年 11月19日 東京明治記念館にて、安田客員教授が都道府県技能検定委員を代表して国・大分県の技能向上に貢献された功績により表彰される。

志学塾の開講：

大分県QCサークル支援企業会を母体として、2014（平成26）年5月に発足した志学塾において、講師を務め、若年者人材育成のための講座を開講し、働く意味、仕事の目標等の志を伝承することに貢献した。

2015（平成27）年 12月2日 逝去

*高度熟練技能者とは、機械では代替できない高度な技術を駆使して高精度・高品質の製品を作り出すことができる技能者で、大分県では6業種9職種で27人が認定されている。

「他力だったなあ」 安田 弘子（夫人）

病を得て、家にいることが多くなったある日、いつものように本を読んでいた夫が、立ち上りながらつぶやきました。

改めて自身の来し方を振り返り、また今の自分を見つめる時に、全てがまわりの方々のおかげであったと再確認したかのようにつぶやきでした。

若い頃、パナソニックに入社後、30才代の頃からカバンの中に「指し棒」を忍ばせていました。「定年後は、後輩たちに『もの作り』を指導したい」と夢を語っていました。

工科短大に招かれた時、義母と私は「夢は持ち続けなければ叶わない、持ち続ければ夢は叶う」その言葉を不思議な心持ちで語り合いました。

学校で、学生さん、先生方、職員の皆様方のご厚情を賜わり、毎日、楽しそうに出勤していました。

春の新入生を迎え、お名前を宙で言えるように写真入りの名簿を繰り返し見ながら声に出していました。

会社時代に機械で手にケガをしましたので、実習中に事故が起きなかったことを安堵していました。

一方で、自身も先生方に様々なことを教えていただけることを楽しみにしていました。さすがに専門の先生方だ、と話してくれました。お忙しい時間にご迷惑も掛けただけではないでしょうか。

こうして工科短期大学で、人生の第4コーナーを走り切り、身体は病気になりましたが心は元気に、72年間のゴールテープを切らせていただきました。家族一同、心から感謝致しております。本当に、ありがとうございました。

溶接技術者の人材育成について

大分県立工科短期大学校 客員教授（現代の名工）

山下 順一



1. はじめに

私は、1990（昭和45）年～2018（平成30）年（現在）の49年間、溶接関係に係わってきた。その中でも、この15年間（2004（平成16）年～2018（平成30）年）は会社経営（1998（昭和63）年1月に会社設立）の傍ら、県内の教育機関や県内企業の発展のために溶接技術者の人材育成に大きく携わってきた。1987（昭和62）年5月に、全国溶接技術競技会被覆アーク溶接部門で最優秀賞を頂いてから、人のために何かしなければという強い意識を持つようになった。そのような責任感を抱くことで溶接技術指導を通じて「人を育て、県・国を発展させる」信念を貫き、これまで人材育成に取り組んできたところである。この書面では、これまでの溶接技術者の人材育成への活動に関する内容と、自分なりの評価や所感を述べることにする。

2. 溶接へのアプローチと思い

溶接へのきっかけは、親やそれ以外の方の影響も全くなかった。父親から手に職を付けろよという言葉だけで具体的なアドバイスもなく、一生、飯が食えろと聞かされ、溶接への好奇心もない中で三井造船株式会社へと入社した。しかし、資格取得や競技大会に出場し賞を頂くことで感動や向上心が生まれ、最終的には日本一を取るまでやるという強い信念を持ち続けた。三井造船株式会社には、基礎的な溶接技術を指導していただいたおかげで、今の自分があることに深く感謝を申し上げる。

溶接技術の習得は、一夜にしてできるものではない。これから溶接をやろうとしている人や現在、従事している人も基本をしっかり身に付けていただきたいと思っている。何でも基本が大事である。教育する立場にある方は、基本ができていなければ、習う学生や企業の方も将来の技能向上がなく終わってしまうことになる。溶接技術は「リズム・集中力・忍耐力」の3つを持ち備えることが重要であり、溶接はリズムを持ちながら、集中して最後まで作業するという目標を、常に若い人材に幾度となく言い聞かせている。

大分県内の溶接部門における「ものづくりマイスター」は私一人であり、企業人や会社経営者等で教育機関や他の企業への人材育成に継続的な指導を行う方はいないの

が現状である。この業界は特に、個人の技術・技能を他人に伝授するような人材が少ない。最優秀賞を頂いてから30年が経過するが、大分県では未だにそのような指導者が出てこないことを非常に危惧している。しかし、私が指導をした学生や企業人は確実に企業の中で活躍しており、近い将来、大分県の溶接業界を牽引してくれる「第二の山下」が出てくることを期待し、それまでは生涯現役でしっかりとやるべきことを全うしようと考えている。したがって、大分県内の溶接部門が衰退することがなく空白期間が生じないように、私が今後も変わらぬ指導をしていくつもりである。

3. 人材育成に関するこれまでの活動及び効果

・教育機関での人材育成

2003（平成15）年から私立楊志館高校を皮切りに、数多くの教育機関へ被覆アーク溶接、TIGアーク溶接、半自動溶接の3種類の溶接指導を行ってきた。実施した教育機関は以下のようになっている。

県立工科短期大学校（写真1）、大分工業高校、鶴崎工業高校、日出総合高校、情報科学高校、津久見高校、佐伯豊南高校、日田林工高校、中津東高校、私立大分高校、私立日本文理大学附属高校、私立楊志館高校（計12校）。上記の中でも、日田林工高校は2005（平成17）年～2011（平成23）年の7年間において校内溶接大会の企画・運営・審査・指導を実施した。また、私立楊志館高校では2006（平成18）年～1年間、溶接指導に関する非常勤講師も務めた。さらに、県立工科短期大学校では2004（平成16）年から現在までの15年間、客員教授として溶接全般に関する技術指導を行っている。私が技術指導を実施していく中で、学生や教職員の目標を掲げる必要性があると思い、県内の高校生による溶接大会を企画した。全国初の大会で事例がなかったこともあり、発案時は非常に時間と調整を要した。当時は、県立高等学校の窓口は教育委員会、私立高校は県の私学振興課、溶接協会は県の工業振興課ということで複数の窓口があり、どこの窓口が調整を担うか等で時間を要したが、最終的には県行政からの強い後押しもあり、当時の商工労働部雇用人材育成課職業能力開発班が担うこととなった。その3年



写真1 工科短大での技術指導（デジタルメカエンジニアコースの学生）

後には、大分県が九州地区の7県に呼び掛け、県代表者が出場する九州地区溶接大会が開催されることとなった。現在では、大分県を皮切りに全国25県で県溶接大会が実施されるようになり、九州地区大会と同様、各ブロック大会が実施されているようである。溶接大会は大分県が発祥の地であり、全国へと情報が広がり、溶接に関するものづくり教育が定着していっ

たことは非常にうれしく、これまで実施してきた積み上げが無駄ではなく、信念を貫いた結果であると確信したところである。しかし、残念なことに全国大会が未だに開催されていないことが心残りでもある。

2006（平成18）年8月	第1回大分県高等学校ものづくり溶接技術競技会開催
2008（平成20）年10月	第1回九州地区高等学校ものづくり溶接技術競技会開催
2012（平成24）年11月	第1回大分県学生溶接選手権開催 （企画・運営・審査委員長を務める）

・民間企業等への人材育成

県産業創造機構からの技術アドバイザーや厚生労働省からのマイスター、中央職業能力開発協会からの高度熟練技能者として県北8社、大分市内15社、県南3社さらにポリテクセンターや高等技術専門校への技術指導や講演活動も行った。その講演活動の中では、溶接協会主催の第60回記念全国溶接技術競技会秋田大会での記念講演を行った際に掲載された新聞内容を写真2に示す。

4. 所感

若者たちは、大会が開催されることで参加者同士で相乗効果が生まれ、今後、教育界や産業界にとって、必ずや効果が出てくれるものと考えます。大会で最優秀を取るという目標に、高校生やその指導者が溶接評価試験を受検するようになり80%が合格するようになった。受験するに当たり、平日の夕方や週末に私の工場を開放し、高校や工科短大の学生さらには高等学校教職員の技術指導にも努めた。高校生への実技指導だけではなく、高等学校の教職員への技術研修及び成果発表会の審査委員長も務め、現在も研修・指導を継続して行っている。このように溶接関連の人材育成や啓蒙活動を実践し継続したことにより、大分県溶接協会の事業拡大、発展に努めてきた。

一方、高校生だけではなく、工科短大への期待も大きい。今年度に、溶接実習場が完成する予定で、各大会や検定試験さらに企業へ向けたセミナーの開催等を企画している



写真2 第60回記念全国溶接技術競技会秋田大会における記念講演（溶協ニュース）

ようである。県北地域にはそのような公共施設がなかったため、溶接協会にとっても、今後、連携した新たな企画が可能となり、楽しみにしているところである。

5. おわりに

溶接技術者の指導を通じて、技術だけではなく、人格形成を醸成する機会にもなっている。冒頭でも述べたように「リズム・集中力・忍耐力」を目標に掲げ、ものづくりの楽しさ・感動を与えながら熱情的な指導を行うことで、両者のバランスが取れた人材育成が可能と考える。今後も、教育機関を始め企業の若き人材に対して、変わらぬ指導を継続して行く所存である。自分ができることを確実に継続していけば、個人を始め組織全体が必ず成長していくことを確信しながら微力ではあるが、若い世代に負けないよう生涯現役の気持ちを持ち続け、県行政や産業界に貢献して行くつもりである。

最後に、繰り返しになるが、工科短大の客員教授として、これまで以上にレベルアップを図りながら、さらに人材育成に貢献していく所存である。

プロフィール

山下順一（やました じゅんいち）
有限会社山順工業（大分市大字下郡 下郡工業団地）
山下社長、米田工場長（20年間弟子）、他従業員6名

1986（昭和61）年3月	大分県溶接技術競技会最優秀賞（知事賞）
1987（昭和62）年5月	全国溶接技術競技会 被覆アーク溶接部門 最優秀賞
2003（平成15）年8月	高度熟練技能者認定（中央職業能力開発協会）
2004（平成16）年11月	厚生労働大臣表彰「現代の名工」（卓越技能章）
2007（平成19）年11月	黄綬褒章受章
2008（平成20）年4月	大分県溶接協会理事に就任
2010（平成22）年3月	九州溶接マイスター認定（九州地区検定委員会）
2013（平成25）年7月	ものづくりマイスター認定（厚生労働省）
2014（平成26）年11月	文化の日大分県功労者知事表彰
2015（平成27）年6月	大分県工業連合会工業功労者表彰

年度別入学試験応募・合格・入学者の状況

年度別入学試験応募・合格・入学者の状況

(単位:人)

Table with columns for year (年度), subject (学科), enrollment (入学定員), final qualified count (最終合格者数), and enrollment count (入学者数). Rows are grouped by period (一期生 to 十期生).

Table with columns for year (年度), subject (学科), enrollment (入学定員), final qualified count (最終合格者数), and enrollment count (入学者数). Rows are grouped by period (二十一年度 to 三十一年度).

出身校別入学者の年度別推移

Table showing the annual trend of students by their school of origin (出身校) from 2010 to 2029. Columns include school name and years.

Table showing the annual trend of students by their school of origin (出身校) from 2010 to 2030. Columns include school name and years.

卒業生就職状況

(単位: 人数)

年度	科 名	卒業者数	就職希望者	内					訳				進学等
				県内	県外	(小計)	公務員	計	就職率 (%)	自己開拓	未定その他	実質就職率 (%)	
H11	生産技術科	459 (6)	442	284	147	(431)	2	433	98	9	0	100	17
	制御技術科	282 (23)	266	164	97	(261)	3	264	99	2	0	100	16
H29	電子技術科	375 (29)	344	190	137	(327)	2	329	96	10	5	99	31
	住居環境科	289 (111)	255	175	66	(241)	1	242	95	10	3	99	34
計		1,405 (169)	1,307	813	447	(1,260)	8	1,268	97	31	8	99	98
29	生産技術科	27 (1)	27	16	11	(27)	0	27	100	0	0	100	0
	制御技術科	11 (0)	11	8	3	(11)	0	11	100	0	0	100	0
	電子技術科	19 (1)	18	12	6	(18)	0	18	100	0	0	100	1
	住居環境科	11 (5)	10	7	3	(10)	0	10	100	0	0	100	1
	計	68 (7)	66	43	23	(66)	0	66	100	0	0	100	2
28	生産技術科	26 (0)	25	15	10	(25)	0	25	100	0	0	100	1
	制御技術科	10 (0)	9	7	2	(9)	0	9	100	0	0	100	1
	電子技術科	22 (0)	22	10	12	(22)	0	22	100	0	0	100	0
	住居環境科	9 (2)	9	6	3	(9)	0	9	100	0	0	100	0
	計	67 (2)	65	38	27	(65)	0	65	100	0	0	100	2
27	生産技術科	29 (0)	29	21	8	(29)	0	29	100	0	0	100	0
	制御技術科	7 (0)	7	4	3	(7)	0	7	100	0	0	100	0
	電子技術科	15 (0)	14	4	10	(14)	0	14	100	0	0	100	1
	住居環境科	9 (3)	7	5	2	(7)	0	7	100	0	0	100	2
	計	60 (3)	57	34	23	(57)	0	57	100	0	0	100	3
26	生産技術科	30 (1)	30	20	10	(30)	0	30	100	0	0	100	0
	制御技術科	11 (1)	10	6	4	(10)	0	10	100	0	0	100	1
	電子技術科	15 (0)	15	8	7	(15)	0	15	100	0	0	100	0
	住居環境科	9 (2)	9	7	1	(9)	0	9	100	0	0	100	0
	計	65 (4)	64	41	22	(63)	0	63	98	1	0	100	1
25	生産技術科	27 (0)	27	15	10	(27)	0	27	93	2	0	100	0
	制御技術科	12 (0)	12	6	5	(12)	1	12	100	0	0	100	0
	電子技術科	16 (1)	16	6	9	(16)	0	16	94	1	0	100	0
	住居環境科	8 (1)	7	5	2	(7)	0	7	100	0	0	100	1
	計	63 (2)	62	32	26	(58)	1	59	95	3	0	100	1
24	生産技術科	30 (0)	30	19	9	(30)	0	30	93	2	0	100	0
	制御技術科	14 (0)	13	6	7	(13)	0	13	100	0	0	100	1
	電子技術科	21 (2)	21	12	9	(21)	0	21	100	0	0	100	0
	住居環境科	10 (2)	10	6	4	(10)	0	10	100	0	0	100	0
	計	75 (4)	74	43	29	(72)	0	72	97	2	0	100	1
23	生産技術科	30 (0)	30	22	8	(30)	0	30	100	0	0	100	0
	制御技術科	13 (0)	12	7	5	(12)	0	12	100	0	0	100	1
	電子技術科	23 (2)	22	12	9	(22)	0	22	95	0	1	95	1
	住居環境科	11 (6)	10	7	3	(10)	0	10	100	0	0	100	1
	計	77 (8)	74	48	25	(73)	0	73	99	0	1	99	3
22	生産技術科	34 (0)	33	24	9	(33)	0	33	100	0	0	100	1
	制御技術科	14 (0)	14	5	9	(14)	0	14	100	0	0	100	0
	電子技術科	26 (1)	25	15	6	(25)	0	25	84	2	2	92	1
	住居環境科	10 (3)	8	7	0	(7)	0	7	88	0	1	88	2
	計	84 (4)	80	51	24	(75)	0	75	94	2	3	96	4
21	生産技術科	29 (0)	29	23	6	(29)	0	29	100	0	0	100	0
	制御技術科	15 (0)	13	8	4	(12)	0	12	92	1	0	100	2
	電子技術科	22 (3)	20	10	5	(15)	1	16	80	4	0	100	2
	住居環境科	10 (1)	10	8	2	(10)	0	10	100	0	0	100	0
	計	76 (4)	72	49	17	(66)	1	67	93	5	0	100	4
20	生産技術科	28 (0)	27	19	5	(24)	0	24	89	3	0	100	1
	制御技術科	12 (0)	12	7	5	(12)	0	12	100	0	0	100	0
	電子技術科	22 (3)	20	9	7	(16)	0	16	80	3	1	95	2
	住居環境科	13 (3)	11	5	5	(10)	0	10	91	1	0	100	2
	計	75 (6)	70	40	22	(62)	0	62	89	7	1	99	5
19	生産技術科	14 (0)	14	10	4	(14)	0	14	100	0	0	100	0
	制御技術科	16 (1)	16	12	4	(16)	0	16	100	0	0	100	0
	電子技術科	20 (0)	19	10	9	(19)	0	19	100	0	0	100	1
	住居環境科	17 (4)	17	4	13	(17)	0	17	100	0	0	100	0
	計	67 (5)	66	36	30	(66)	0	66	100	0	0	100	1
18	生産技術科	26 (0)	25	15	10	(25)	0	25	100	0	0	100	1
	制御技術科	19 (1)	19	13	6	(19)	0	19	100	0	0	100	0
	電子技術科	19 (2)	19	10	9	(19)	0	19	100	0	0	100	0
	住居環境科	22 (10)	20	10	8	(18)	0	18	90	2	0	100	2
	計	86 (13)	83	48	33	(81)	0	81	98	2	0	100	3
17	生産技術科	21 (2)	20	10	10	(20)	0	20	100	0	0	100	1
	制御技術科	21 (1)	20	9	10	(19)	1	20	100	0	0	100	1
	電子技術科	19 (3)	18	9	9	(18)	0	18	100	0	0	100	1
	住居環境科	26 (10)	22	16	5	(21)	0	21	95	1	0	100	4
	計	87 (16)	80	44	34	(78)	1	79	99	1	0	100	7
16	生産技術科	23 (0)	21	9	11	(20)	1	21	100	0	0	100	2
	制御技術科	23 (3)	23	13	10	(23)	0	23	100	0	0	100	0
	電子技術科	22 (1)	17	9	8	(17)	0	17	100	0	0	100	5
	住居環境科	18 (12)	17	8	3	(11)	0	11	65	5	1	92	1
	計	86 (16)	78	39	32	(71)	1	72	92	5	1	99	8
15	生産技術科	16 (1)	15	3	12	(15)	0	15	100	0	0	100	1
	制御技術科	17 (1)	15	8	6	(14)	0	14	93	1	0	100	2
	電子技術科	20 (1)	16	9	7	(16)	0	16	100	0	0	100	4
	住居環境科	18 (5)	14	11	2	(13)	0	13	93	0	1	93	4
	計	71 (8)	60	31	27	(58)	0	58	97	1	1	98	11
14	生産技術科	16 (0)	13	10	2	(12)	0	12	92	1	0	100	3
	制御技術科	21 (2)	16	8	7	(15)	1	16	100	0	0	100	5
	電子技術科	25 (1)	21	15	4	(19)	1	20	95	0	1	95	4
	住居環境科	23 (6)	18	15	3	(18)	0	18	100	0	0	100	5
	計	85 (9)	68	48	16	(64)	2	66	97	1	1	99	17
13	生産技術科	17 (0)	16	10	6	(16)	0	16	100	0	0	100	1
	制御技術科	15 (4)	15	11	4	(15)	0	15	100	0	0	100	0
	電子技術科	14 (0)	12	5	7	(12)	0	12	100	0	0	100	2
	住居環境科	23 (15)	20	16	3	(19)	1	20	100	0	0	100	3
	計	69 (19)	63	42	20	(62)	1	63	100	0	0	100	6
12	生産技術科	16 (0)	13	10	2	(12)	0	12	92	1	0	100	3
	制御技術科	11 (1)	11	9	2	(11)	0	11	100	0	0	100	0
	電子技術科	17 (6)	15	14	1	(15)	0	15	100	0	0	100	2
	住居環境科	18 (8)	18	15	3	(18)	0	18	100	0	0	100	0
	計	62 (15)	57	48	8	(56)	0	56	98	1	0	100	5
11	生産技術科	20 (1)	18	13	4	(17)	1	18	100	0	0	100	2
	制御技術科	20 (8)	18	17	1	(18)	0	18	100	0	0	100	2
	電子技術科	18 (2)	14	11	3	(14)	0	14	100	0	0	100	4
	住居環境科	24 (13)	18	17	1	(18)	0	18	100	0	0	100	6
	計	82 (24)	68	58	9	(67)	1	68	100	0	0	100	14

※1 卒業者数中 () は女性内数
2 自己開拓とは各種事情により校を通じることなく、自ら就職開拓を行った者
3 県内、県外の区分は勤務地による。ただし、採用(内定)当初、勤務地が明らかでない場合は本社所在地とする。
4 実質就職率は「自己開拓」を加算後の数値である。

活動報告事例集

2015年4月 第1号 活動報告・卒業研究事例集

NEWS&EVENT

【活動報告】

- ・2014年実践教育研究発表会参加
～テーマ：金型における高速・高精度加工の実践報告～
栗林 仁
- ・若年者ものづくり競技大会機械製図（CAD）職種参加報告
十河 英二
- ・国家技能検定への取組
遠藤 宏光
- ・学生金型グランプリの取組
川崎 信人
- ・中津駅前ライトアップ事業への参加
上村 正幸
- ・建築システム系の校外見学の取組
松尾 浩助
- ・建築施工実習の報告
吉田 和彦

【卒業研究】

- ・プレス順送金型の設計・製作
井ノ口 楓、上野畑 聡、後小路 優、櫻木 景太
- ・5軸マシニングセンタによる3Dモデルの製作
土永 翔太、山野内 航
- ・小型卓上ボール盤の設計変更と製作
香月 健汰、花咲 皆紀、松山 滉哉
- ・ソレノイドコイルの設計・製作
坂本 一起
- ・無線通信を利用した多機能自動散水器の製作
原田 昂平
- ・日本庭園とその利用価値について
木元 祥太
- ・床の間の製作
城戸 宏太、山上 貴史
- ・平成26年度 卒業研究テーマ一覧
- ・平成26年度 教員一覧

2016年4月 第2号 活動報告・卒業研究事例集

NEWS&EVENT

【活動報告】

- ・高校生ものづくりコンテスト全国大会
～電子回路組立部門の審査員を引き受けて～
満永 浩一
- ・2015年実践教育研究発表会参加
～テーマ：小型卓上ボール盤製作の実践報告～
首藤 貴之
- ・学生金型グランプリの取組
川崎 信人
- ・電子回路製作実習の報告
小野 陽二
- ・ロールプレーイングによる建築生産教育の試み
吉田 和彦

【卒業研究】

- ・5輪マシニングセンタによるルービックキューブの製作
小山田新吾、加藤 光稀
- ・プレス順送金型の設計・製作
御幡 孝平、森田 洋祐
- ・プラスチック射出成形金型の設計・製作
大門 玲惟、辻 啓志、常廣 規
- ・シーケンス制御作業小型入出力装置の製作
安部 正道、藤末 智明
- ・DE 0-nanoを用いたデジタルCAD実習ボードの製作
上田 翔太
- ・クアッドコプターの飛行制御
仲 健治
- ・エントランスロビーの滞留空間の提案と製作
染矢 早貴、藤本 実那
- ・有名建築の模型製作
～木造・鉄骨造・鉄筋コンクリート造～
仲 朱里
- ・平成27年度 卒業研究テーマ一覧
- ・平成27年度 教員一覧

2017年4月 第3号 活動報告・卒業研究事例集

NEWS&EVENT

【活動報告】

- ・若年技能者人材育成支援事業
～国家技能検定受検に係る実技指導講座～
佐藤 安正
- ・若年者ものづくり競技大会機械製図（CAD）職種参加報告
十河 英二
- ・若年者ものづくり競技大会 機械加工関係職種参加報告
川崎 信人
- ・双腕ロボット導入とカリキュラムへの展開
新名 恒
- ・力学実験を通じた構造力学の習得
吉田 和彦

【卒業研究】

- ・ペーンポンプの設計・製作
伊藤 佳祐、後藤 貴裕
- ・プレス金型の設計・製作（トランスファ金型製作）
梶原 健汰、川島 雄太、山田 大智
- ・プラスチック射出成形金型の設計・製作
（学生金型グランプリへの挑戦）
近藤 克哉、富家 健太、南 和人
- ・Kinectを使用したアプリケーションの制作
佐藤 智紀、中山 湧汰、武藤 祥太
- ・第2種電気工事士試験受験対策教材の製作
秋月 星哉
- ・ピンポン玉格納競技ロボットの製作
平松 雅崇、村田 大樹
- ・実習用模擬家屋の建設～外壁工事・内装工事～
安倍 真吾、井上 仁、岩尾 祥汰、橋本 竜摩、原 翔輝
- ・平成28年度 卒業研究テーマ一覧
- ・平成28年度 教員一覧

2018年4月 第4号 活動報告・卒業研究事例集

【巻頭言】

- ・発行に寄せて
宮崎 淳一

【活動報告】

- ・大分県学生溶接選手権への取組
安部 洋行
- ・第9回学生金型グランプリへの挑戦
川崎 信人
- ・適応微分推定機を用いた非線形摩擦力の推定
満永 浩一
- ・土壌水分監視装置の製作（姫島スマート農業プロジェクト）
野中 和弘、兒玉 章宏
- ・フィールドワークを取り入れた卒業研究
～宇佐海軍航空隊跡保存整備事業の取組～
松尾 浩助

【卒業研究】

- ・エアエンジンの設計・製作
工藤 昂亮、森迫 靖仁、木村 公亮
- ・プラスチック射出成形金型の設計・製作
（学生金型グランプリへの挑戦）
伊藤 傑、宇薄 樹、河野 健斗
- ・5インチゲージ鉄道模型の設計・製作
草野 康太、佐藤 孝貴、友末 宇彦
- ・エレベーター模型の製作
佐伯 直哉、山本 輝貴
- ・ピンポン球格納競技ロボットの製作
小野 徹也、木村 匠吾
- ・「COTORI」の環境改善案と制作
池田 日和、金山奈々実、渡辺 桃香

NEWS&EVENT

- ・平成29年度 卒業研究テーマ一覧
- ・平成29年度 教員一覧

歴代後援会役員名簿

平成 11 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	小野 博	電子技術科 2年
副会長	時田 雄次	校長
副会長	清水 茂樹	住居環境科 1年
理事	司城 俊啓	生産技術科 2年
理事	仲村 洋子	制御技術科 2年
理事	安藤 直樹	生産技術科 1年
理事	豊田 洋司	制御技術科 1年
理事	水之浦昭子	電子技術科 1年
監事	中野 幸輔	住居環境科 2年

平成 12 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	清水 茂樹	住居環境科 2年
副会長	時田 雄次	校長
副会長	河野 正人	生産技術科 1年
理事	安藤 直樹	生産技術科 2年
理事	水之浦昭子	電子技術科 2年
理事	土橋 好喜	制御技術科 1年
理事	嵩田 桂子	住居環境科 1年
理事	豊田 洋司	制御技術科 2年
監事	野田 謙二	電子技術科 1年

平成 13 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	池田 廣彰	住居環境科 1年
副会長	時田 雄次	校長
副会長	河野 正人	生産技術科 2年
理事	土橋 好喜	制御技術科 2年
理事	嵩田 桂子	住居環境科 2年
理事		
理事		
監事		
監事	野田 謙二	電子技術科 2年

平成 14 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	池田 廣彰	住居環境科 2年
副会長	時田 雄次	校長
副会長	泉 直彦	制御技術科 1年
理事	米家まえみ	生産技術科 1年
理事	竹尾 吉数	住居環境科 1年
理事		
理事		
監事	楠本 功己	電子技術科 1年
監事		

平成 15 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	泉 直彦	制御技術科 2年
副会長	山下 忠	校長
副会長	神田 三郎	生産技術科 1年
理事	米家まえみ	生産技術科 2年
理事	竹尾 吉数	住居環境科 2年
理事	秋吉 京子	制御技術科 1年
理事	藤石 弘	電子技術科 1年
監事	楠本 功己	電子技術科 2年
監事	矢頭富美子	住居環境科 1年

平成 16 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	神田 三郎	生産技術科 2年
副会長	山下 忠	校長
副会長	吉本 学	住居環境科 1年
理事	秋吉 京子	制御技術科 2年
理事	藤石 弘	電子技術科 2年
理事	奥塚 洋一	制御技術科 1年
理事	塩田恵里子	電子技術科 1年
監事	矢頭富美子	住居環境科 2年
監事	加来 礼子	生産技術科 1年

平成 17 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	吉本 学	住居環境科 2年
副会長	三田 栄次	電子技術科 1年
副会長	山下 忠	校長
理事	殿畑 郁子	制御技術科 2年
理事	前野真知子	電子技術科 2年
理事	橋本 園子	生産技術科 1年
理事	中島 信男	住居環境科 1年
監事	加来 礼子	生産技術科 2年
監事	阿南 克子	制御技術科 1年

平成 18 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	中島 信男	住居環境科 2年
副会長	古野 剛士	住居環境科 1年
副会長	山下 忠	校長
理事	三田 栄次	電子技術科 2年
理事	橋本 園子	生産技術科 2年
理事	園田 好美	生産技術科 1年
理事	廣岡千代美	電子技術科 1年
監事	阿南 克子	制御技術科 2年
監事	高橋 法子	制御技術科 1年

平成 19 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	古野 剛士	住居環境科 2年
副会長	身深 文廣	機械システム系 1年
副会長	村上 周太	校長
理事	園田 好美	生産技術科 2年
理事	大倉真由美	電子技術科 2年
理事	小野 昌俊	機械システム系 1年
理事	姫嶋むつみ	建築システム系 1年
理事	高橋 法子	制御技術科 2年
監事	長谷川佳代子	電子システム系 1年

平成 20 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	身深 文廣	機械システム系 2年
副会長	堀江 光代	機械システム系 1年
副会長	村上 周太	校長
理事	小野 昌俊	機械システム系 2年
理事	姫嶋むつみ	建築システム系 2年
理事	藤原 和博	機械システム系 1年
理事	楠本 巧己	電子システム系 1年
監事	長谷川佳代子	電子システム系 2年
監事	森江あゆみ	建築システム系 1年

平成 21 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	堀江 光代	機械システム系 2年
副会長	三浦 太一	機械システム系 1年
副会長	村上 周太	校長
理事	藤原 和博	機械システム系 2年
理事	楠本 功己	電子システム系 2年
理事	澤山知加子	電子システム系 1年
理事	松永 里子	建築システム系 1年
監事	森江あゆみ	建築システム系 2年
監事	松尾 順子	機械システム系 1年

平成 22 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	三浦 太一	機械システム系 2年
副会長	阿形美智子	機械システム系 1年
副会長	小林 敏弘	校長
理事	澤山知加子	電子システム系 2年
理事	松永 里子	建築システム系 2年
理事	徳丸 多美	電子システム系 1年
理事	池田 達雄	建築システム系 1年
監事	松尾 順子	機械システム系 2年
監事	田中真智子	機械システム系 1年

平成 23 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	阿形美智子	機械システム系 2年
副会長	高瀬 初美	機械システム系 1年
副会長	小林 敏弘	校長
理事	徳丸 多美	電子システム系 2年
理事	池田 達雄	建築システム系 2年
理事	矢野 靖代	機械システム系 1年
理事	石川 里美	電子システム系 1年
監事	田中真智子	機械システム系 2年
監事	枡 扶美	建築システム系 1年

平成 24 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	高瀬 初美	機械システム系 2年
副会長	井村 修一	電子システム系 1年
副会長	小林 敏弘	校長
理事	矢野 靖代	機械システム系 2年
理事	石川 里美	電子システム系 2年
理事	佐藤 洋史	機械システム系 1年
理事	下原 進	建築システム系 1年
監事	枡 扶美	建築システム系 2年
監事	加来 仁美	機械システム系 1年

平成 25 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	井村 修一	電子システム系 2年
副会長	山野内英雄	機械システム系 1年
副会長	佐伯 心高	校長
理事	佐藤 洋史	機械システム系 2年
理事	下原 進	建築システム系 2年
理事	河野 幸美	電気・電子システム系 1年
理事	上野畑恵美	機械システム系 1年
監事	加来 仁美	機械システム系 1年
監事	木元 保子	建築システム系 1年

平成 26 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	山野内英雄	機械システム系 2年
副会長	佐藤 恭司	機械システム系 1年
副会長	佐伯 心高	校長
理事	上野畑恵美	機械システム系 2年
理事	加来 仁美	機械システム系 2年
理事	河野 幸美	電気・電子システム系 2年
理事	巢野 幸男	電気・電子システム系 1年
理事	高橋久美子	建築システム系 1年
監事	木元 保子	建築システム系 2年
監事	西谷 淳子	機械システム系 1年

平成 27 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	狭間 卓也	機械システム系 1年
副会長	高橋久美子	建築システム系 2年
副会長	佐伯 心高	校長
理事	巢野 幸男	電気・電子システム系 2年
理事	岡崎美由紀	電気・電子システム系 1年
理事	原 美由紀	建築システム系 1年
監事	西谷 淳子	機械システム系 2年
監事	中山 直美	機械システム系 1年

平成 28 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	狭間 卓也	機械システム系 2年
副会長	佐藤 裕美	機械システム系 1年
副会長	佐伯 心高	校長
理事	岡崎美由紀	電気・電子システム系 2年
理事	原 美由紀	建築システム系 2年
理事	白杵 浩美	機械システム系 1年
理事	金山かおり	建築システム系 1年
監事	中山 直美	機械システム系 2年
監事	石川 真弓	電気・電子システム系 1年

平成 29 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	山本 玲子	電気・電子システム系 1年
副会長	佐藤 裕美	機械システム系 2年
副会長	宮崎 淳一	校長
理事	白杵 浩美	機械システム系 2年
理事	金山かおり	建築システム系 2年
理事	佐々木敬次郎	機械システム系 1年
理事	新立 育代	機械システム系 1年
監事	石川 真弓	電気・電子システム系 2年
監事	池内 昌代	建築システム系 1年

平成 30 年度

役職名	氏名	学科・学年
会長	山本 玲子	電気・電子システム系 2年
副会長	佐々木敬次郎	機械システム系 2年
副会長	宮崎 淳一	校長
理事	新立 育代	機械システム系 2年
理事	西山貴美佳	機械システム系 1年
理事	広崎 初美	機械システム系 1年
理事	橋本 裕	建築システム系 1年
監事	池内 昌代	建築システム系 2年
監事	嶋田 美保	電気・電子システム系 1年

歴代職員名簿

1988 (平成 10) 年度		1999 (平成 11) 年度		2000 (平成 12) 年度		2001 (平成 13) 年度		2002 (平成 14) 年度		2003 (平成 15) 年度	
校長	時田 雄次	校長	時田 雄次	部制度導入		校長	時田 雄次	校長	時田 雄次	校長	山下 忠
副校長	土谷 浩	副校長	勝見 紀生	校長	時田 雄次	副校長	小林 義照	副校長	佐藤 文明	副校長	佐藤 文明
総務課	詫磨 秀一	総務課	詫磨 秀一	副校長	勝見 紀生 (兼)	部長	小林 義照 (兼)	管理部	佐藤 文明 (兼)	管理部	佐藤 文明 (兼)
	清塚 光司		清塚 光司	部長	森 さつき	部長	森 さつき				
教務学生課	衛藤 清孝	教務学生課	衛藤 清孝	管理部	森 さつき	管理部	森 さつき	管理部	佐藤 文明 (兼)	管理部	佐藤 文明 (兼)
	津留 智敬		津留 智敬								
生産技術科	小山田明生	生産技術科	小山田明生	管理部	森 さつき	管理部	森 さつき	管理部	佐藤 文明 (兼)	管理部	佐藤 文明 (兼)
	白石 元		白石 元								
制御技術科	土師 陽子	制御技術科	土師 陽子	管理部	森 さつき	管理部	森 さつき	管理部	佐藤 文明 (兼)	管理部	佐藤 文明 (兼)
	野中 和弘		野中 和弘								
電子技術科	磯谷大吉郎	電子技術科	磯谷大吉郎	管理部	森 さつき	管理部	森 さつき	管理部	佐藤 文明 (兼)	管理部	佐藤 文明 (兼)
	上村 正幸		上村 正幸								
住居環境科	伊集院豊磨	住居環境科	伊集院豊磨	管理部	森 さつき	管理部	森 さつき	管理部	佐藤 文明 (兼)	管理部	佐藤 文明 (兼)
	山下 良二		山下 良二								

2004 (平成 16) 年度		2005 (平成 17) 年度		2006 (平成 18) 年度		2007 (平成 19) 年度		2008 (平成 20) 年度		2009 (平成 21) 年度	
校長	山下 忠	校長	山下 忠	管理部改編		学科改編		校長	村上 周太	校長	村上 周太
副校長	甲斐 勇吉	副校長	甲斐 勇吉	校長	山下 忠	校長	村上 周太	副校長	大野 雄史	副校長	木田 和成
管理部	部長 宮野 敬樹	管理部	部長 宮野 敬樹	副校長	梶田 愛次	副校長	梶田 愛次	管理部	部長 大野 雄史 (兼)	管理部	部長 木田 和成 (兼)
	高木 博		高木 博	部長	梶田 愛次 (兼)	部長	梶田 愛次 (兼)				
生産技術科	土師 陽子	生産技術科	土師 陽子	管理部	梶田 愛次 (兼)	管理部	梶田 愛次 (兼)	管理部	大野 雄史 (兼)	管理部	木田 和成 (兼)
	森口 隆司		森口 隆司								
制御技術科	金丸 祥二	制御技術科	金丸 祥二	管理部	梶田 愛次 (兼)	管理部	梶田 愛次 (兼)	管理部	大野 雄史 (兼)	管理部	木田 和成 (兼)
	白石 浩一		白石 浩一								
電子技術科	上村 正幸	電子技術科	上村 正幸	管理部	梶田 愛次 (兼)	管理部	梶田 愛次 (兼)	管理部	大野 雄史 (兼)	管理部	木田 和成 (兼)
	野中 和弘		野中 和弘								
住居環境科	伊集院豊磨	住居環境科	伊集院豊磨	管理部	梶田 愛次 (兼)	管理部	梶田 愛次 (兼)	管理部	大野 雄史 (兼)	管理部	木田 和成 (兼)
	山下 良二		山下 良二								

2010 (平成22) 年度	2011 (平成23) 年度	2012 (平成24) 年度	2013 (平成25) 年度	2014 (平成26) 年度	2015 (H27) 年度
校長 小林 敏弘 副校長 木田 和成 部長 木田 和成 (兼)	校長 小林 敏弘 副校長 橋本 靖彦 部長 橋本 靖彦 (兼)	校長 小林 敏弘 副校長 橋本 靖彦 (兼)	系名称変更 校長 佐伯 心高 副校長 橋本 靖彦	校長 佐伯 心高 副校長 橋本 靖彦 部長 橋本 靖彦 (兼)	校長 佐伯 心高 副校長 中道 一徳 (兼)
管理 部 学生支援班 企業連携・交流室	管理 部 学生支援班 企業連携・交流室	管理 部 学生支援班 企業連携・交流室	管理 部 学生支援班 企業連携・交流室	管理 部 学生支援班 企業連携・交流室	管理 部 学生支援班 企業連携・交流室
指導 部 機械システム系 電子システム系 建築システム系	指導 部 機械システム系 電子システム系 建築システム系	指導 部 機械システム系 電子システム系 建築システム系	指導 部 機械システム系 電子システム系 建築システム系	指導 部 機械システム系 電気・電子システム系 建築システム系	指導 部 機械システム系 電気・電子システム系 建築システム系

2016 (平成28) 年度	2017 (平成29) 年度	2018 (平成30) 年度
校長 佐伯 心高 副校長 中道 一徳 部長 中道 一徳 (兼)	校長 宮崎 淳一 副校長 佐藤 仁 部長 佐藤 仁 (兼)	校長 宮崎 淳一 副校長 澤田 照彦 部長 澤田 照彦 (兼)
管理 部 学生支援班 企業連携・交流室	管理 部 学生支援班 企業連携・交流室	管理 部 学生支援班 企業連携・交流室
指導 部 機械システム系 電気・電子システム系 建築システム系	指導 部 機械システム系 電気・電子システム系 建築システム系	指導 部 機械システム系 電気・電子システム系 建築システム系

同窓会役員名簿

職	氏名	系
会長	後藤 聖和	住居環境科1期生
副会長	司城 俊一	生産技術科1期生
副会長	筒井 隆浩	制御技術科1期生
副会長	小野 孝仁	電子技術科1期生
副会長	山本 玲子	後援会会長
副会長	宮崎 淳一	校長
監事 (監査役)	矢野 友和	住居環境科1期生
監事 (監査役)	松尾 浩助	指導部長

編集後記

—響き合う瞬間—

平成29年の11月に記念誌の編集を託されてから、さしたる見通しもつかないまま、見切り発車の記念誌編集の始動となりました。

思えば20年という歳月は記憶を辿り、つなぎ止めるぎりぎりのところだったのかもしれませんが。分散し、抜け落ちた部分の資料を補充、修復し、埋めていくというパッチワークを作るような地道な作業が続きました。足跡を辿っていると、途中で行き止まりになってしまい、再度、道を替えて辿り直すということもありました。

関係する方々にコンタクトをとることで、図らずも静かに眠っていた記憶を揺り動かし、呼び覚ましてしまったこともあったかもしれません。

あたかも水面に投げられたいくつかの小石が波紋を広げるように、それぞれの方の思いが核となり、時と場所を越えてお互いに響き合う瞬間が、今回の記念誌作成の過程の中で、確かに存在したのではないかと私には思えてなりません。

本記念誌は、大分県立工科短期大学校で、学生、職員、そして関係者の皆様の過ごした日々の軌跡が素材となり、紡がれ、一片のタペストリーとして織り上げられたものと受け止めています。手に取り、目にさせていただくことで在りし日の時間を思い出すすがとなり、読者の皆様の琴線に触れることができれば望外の喜びです。

限られた期間の中で、ご執筆いただいた寄稿者の皆様、また、情報をご提供いただきました皆様、そして、今回の創立20周年の記念事業にご支援、ご協力をいただきました関係者の皆様に対し、記して深く謝意を表します。

これからも工科短期大学校が地域とともに発展しながら、新たな歴史の一頁一頁を重ねていくことを心から祈念いたします。

今後とも皆様の変わらぬご支援とご鞭撻を頂きますようお願いいたします。

編集委員長 松尾 浩助

大分県立工科短期大学校 創立20周年記念誌

平成30年7月14日 発行

発行／大分県立工科短期大学校

〒871-0006 大分県中津市東浜407-27

TEL 0979-23-5500 FAX 0979-23-7001

ホームページ <http://www.oita-it.ac.jp/index.html>

印刷／小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分市松原町2丁目1-6 TEL 097-558-3444 FAX 097-552-2301

※掲載されている各種資料・写真は、デジタル化され当社内に保存しています。

